

78-48

世界哲學文學庫

第三編

コ

ム

ト

全

文學士 小林 郁 著

明治四十二年十月發行

東京

合資社會富山房發兌



## 序

世の學の用不用を論ずるもの嗤ふ可き哉。學既に人類中心フシノゴセン的なるからは、何れの學か人に用ならざる。

別に又「無用の用」を唱ふるものあり、然りと雖、無用は用にあらず、二者其概念に於て異なり。無用のものにして用なるあらむか、其時は既に無用ならざるなり、若し又無用に止まらむか、未だ用ならざるなり、此二者を混ざる之れを詭辯と爲す。

オーギュスト、コムトは碩學の士なり。學問を以て人類中心の說を唱へ、由りて分離せる學に克く統一を附し、皆其處を得しむ、偉ならずや。然かも尙ほ學問の爲めに學問を攻究するの必要を説く事、其書の之に反覆之を幾度かす。所思學にして唯徒ら

に術の爲めとならば、學の進境は之を見る能はず、之に倚立するの術亦進歩を見る能はずと。然かも共に人類の爲めとの大義を失はざるなり、唯直接と間接との別あるのみ。

\* \* \* \* \*

今や我國振古未曾有の大難に際し、執銳の將士命を異域に賭して、國威を萬邦に耀かすあり、然かも戰止みての後の社會の統一に至りては、實に斯書に待たざる可からず、斯書豈に不急ならむや。

明治乙巳二月

廣島 小林 郁 識

## 緒言

「コムトの『Philosophie positive』なる語は我國『積極哲學』『實驗哲學』『實理哲學』『實證哲學』の譯語あり。コムトが以前の哲學を消極哲學 (philosophie negative) と稱し己れのを之と對立せしめたるよりしては、『積極哲學』の語可なるが如し、然かも其意義や消極的たるを免れず、又コムトが實驗を主としたりしとの事よりしては、『實驗哲學』其義を示せるに似たり、然かも之を以てしては、『經驗論 (Empiricism)』と擇ぶ幾何ぞ、而して後者はコムトの絶對的に反對したる處のものなり、次に科學全體を通じて脈絡ある論理的理法を得むとするなる彼の究竟的理想を以てしては、『實理哲學』の名最も適切なるが如し、然かも之れ彼の理想とする處に止まり、彼れ自身亦之を明にするの不可能無用を説きぬ、而して此語未だ盡さざるものあるを奈何、コムトが事實の論證に重きを置き、科學全體を通じて研究法は一致す可く、其理法に至りては、相互の間唯融合的なれば足るとの意を以てしては、『實證哲學』の語最も可なるが如し、況んや此語久しく學界に用ふる處たるをや、由りて余も亦奇を銜はずして此語を用ふ。

一、本書の本論は英國マルチノ嬢述ぶる處の「オーギュスト、コムトの實證哲學」に由りて其梗概を記したり、彼の嚴峻容易に人に許さざるコムト自身さへ此書を見て最も善く己が所説を叙したるものと爲し、後年「實證哲學體系の附録」に於ける「實證學者文庫」中に之を推薦したればなり。

一、本書は主としてコムトの所説を客觀的に叙述せんとしたりしかば、之が評論は極めて僅少なるを免れず、況んや本書の目的は彼の哲學を述べんとするにありて「實證哲學體系」は之にすら必要なに係らず、殆んど之を無視したり、彼に關する詳論は他日に期す。

一、終に諸方面に於てレヴィブワルの近著「オーギュストコムトの哲學」に負ふ處多きを特記す。

# 目次

第一篇 總説	一頁
第一章 コムトの時代	一
第二章 コムトの學統	三
第三章 コムトの實證哲學	一二
第一節 認識論	一四
第二節 科學の體統	二五
第三節 諸科學の實證的性質(社會物理學を除く)	三二
第四節 社會物理學	三二
第五節 人道教	四四
第六節 結論	四七
第二篇 本論	六六
實證哲學	六六

第一章 本書の目的の説明——實證哲學の本質及其重要に對する見解……………六六

第二章 實證科學の體統……………七七

社會物理學……………八七

第一章 斯新科學の必要並に其好期……………八七

第二章 社會科學を構成せんが爲めの主要なる哲學的企畫……………一一一

第三章 社會現象に應用せるに際しての實證的方法の特質……………一二六

第四章 社會學と實證哲學の他の部門との關係……………一三四

第五章 社會靜學即ち人間社會の自發的秩序……………一四二

第六章 社會動學即ち人間社會自然進歩理論……………一五四

第七章 歴史問題の準備——第二期神學的形態即ち拜物教——神學的並に軍隊的制度の濫觴……………一七四

第八章 第二期形態即ち多神教——神學的並に軍隊的組織の發展……………一八八

第九章 一神教時代——神學的並に軍隊的組織の變態……………二〇八

第十章 形而上學的狀態並に近代社會の批評的時期……………二二六

第十一章 實證時期の成素の興起——社會新組織に對する準備……………二五六

第十二章 革命的危機の回顧——近世社會最後の氣運の確定……………二八四

第十三章 實證的方法の究竟的評價……………三〇八

第十四章 實證的教義の結果が其準備的時期に於ける評價……………三二五

第十五章 實證哲學の究竟的行爲の評價……………三三〇

目次終

コムト

小林 郁 編

第一篇 總 說

第一章 コムトの時代

所謂時代精神ツァイトガイストの存在誰か之を否定するを得可き、大々多數の凡骨は云ふ迄も無く天才と云はるゝの人も亦其支配を免れず、ポールドウイン社會に個人化力と一般化力の存在を説き詳細を極むと雖、前者は畢竟後者の中にありて活動し、後者に融合せられて初めて其活動するを得可きのみ、此くの如くにして其社會は進歩し其社會には新なる思潮を生ず、所詮個人の社會に加ふるの力は當時の社會思想の潮流のある處を察し之を導きて以て一步を轉せしむるにあるのみ、是は之れ客觀的方面の觀察に過ぎざるが、主觀的に又其人に加ふる處のものゝ多大なる科學の進歩せる今日敢て説くを要せじ、コムトの云ふ周圍 (milieu) の勢力多大ならずや、然

らば敢て問ふコムトの生れし當時の社會状態は如何のものぞ、之れ先づ吾人の知らむと欲する處なり。

コムトは實に佛國大革命の後に生れたり、此空前にして想ふに又絶後なる可き時期に際し當時の人心を均しく支配せし大問題は、此社會は如何になり行く可き乎にあり、舊組織は全く破壊せられて新組織未だ起らず、智愚賢不肖の論無く擧げて此問題の解釋に苦しみぬ、當時の幾多の碩學は諸々の解決を試みたりき、然かも皆直ちに之を決せんとして未だ以て満足なるものを得ず、コムト此時に生れ亦此研究を以て己が事と爲しぬ、所思在來出でし幾多の解明遂に之を果す能はざる所以のものは職として其見解の皮相的なればなり、彼等は直接に社會を捉へて之を處理せんとす、能はざる所以なり、社會の秩序を計らむには換言すれば社會の政治を定めむには先づ道德、信仰を定めざる可からず、道德、信仰は所論(Las of finious)の上に立つ、彼を確にせんとならば之を定めざる可からず、と、此くの如くにして前後十二年を費して「實證哲學體系」六卷を得たり、科學の體統を説きて社會學に及び茲に社會學の基礎を確立し、由りて以て道德を説き、宗教を論じ、社會の歸趣する處を明

にしたり、嗚呼彼は時代の要求する處を察し遂に一般人士に之が解釋を與へたるものと云ふ可きなり、夫れ學者は二重に外的の支配を受くるあり、(一)時代の思潮即ち其問題、(二)其學問の系統、前者を客觀的方面と云ふを得可くむば後者は主觀的方面なり、前者は既に之を述べたり、請ふ後者を見む。

## 第二章 コムトの學統

哲學者の建設せる體系を以て全然新機軸たらずとして之を非議するは未だ以て斯學の性質を知らざるものと云はざる可からざるなり、抑も哲學の發展とは何ぞ前賢の組織せる學統を後人繼承して、更に生來せる新問題を解釋せむが爲めに之を補成し、此くの如くにして、層々相連續したるもの、み、故を以て、古來の哲學體系の間に脈々として相連關する處あるなり、其各體系の職責は當時の知識の組織を統一し得れば足る、然らずして一哲學に恒久に亘りて萬有の解釋を求めむとす、嗤ふ可きのみ、コムトの哲學を以て關係的性質を有すと爲す亦之れに外ならず。既に哲學は前後連絡のあるあり、然らば、某の哲學が其前人の示したる處のものを

材料として其中に包攝し去るの事敢て恠むを須むず、其然らざるこそ却て不可思議の極と云ふ可きのみ、此くして是等を其資料として更に一轉して新組織を爲す如きは實に其哲學者の技倆如何に存するのみ。然らば、請ふコムトに於て先づ如何の學統を有するかを見む。

一、デカルト、彼はベーコンと共に近世哲學の前驅を爲すもの、コムトの是等に負ふ處は共に其研究法に關してなり、コムトはデカルトを推尊する事深く自ら稱して、其完成者と云ひぬ、其形式論理學を以て、唯既得の知識を人に傳ふるに止まり何等の新知識を與へずとするが如き、或は、其研究法に統一を附す可しと云へるが如き皆之より來る、而してコムトは所謂實證論理なるものを稱へ、古來の形式論理は、是ならざるは無論の事なるが、是にありては其論理が研究する對象に由りて變り來るものとなり、換言すれば實質を離れし論理の存在す可きにあらず、實に夫々の科學研究の上に於て新に開展し來るとなり、數學に至りては、デカルトと同じく之を以て學問の完全なるものと爲しぬ、併し總ての學にして、悉く之れが示す法規に合せざる以上は未だ以て稱するに足らざるかと云ふに、さにはあらず、既に述べ

しが如く、コムトは實證論理を唱へ之に由りて學問研究を爲さむとせしが、之にありては數學的研究法は實に其第一歩なるのみ、之より初む可きも之れに止まる可きにあらず、簡單なる天然現象にありては此數學的理法に従ひ之れを解決し得可しと雖、其愈々複雑なるものに至りては、到底之を以て克く盡すを得可きにあらず、殊に其最も複雑なる社會現象に至りて然りと爲す、其方法とする處に異なるものある所以敢て恠むを須むざるなり、例へば生物學に比較的研究法社會學に歴史的方法あるが如き之れなり。

二、ベーコン、デカルトが大陸に於て純理派の主張者たりしが如く、ベーコンは之に對し英國に於ての經驗派の急先鋒たりしは人の克く知る處なり、此處にはもとより彼の研究法に關し詳叙せんとにあらず、唯コムトが之に負ふ處如何を見むとするのみ、コムトは彼れと同じく口を極めて新學問は經驗に基かざる可からざるを主張したり、之れベーコンと一致せる處、併し純乎たる經驗主義は純乎たる神祕主義と同様彼の斥けし處なり、所思徒らに事實の蒐集をのみ事として何等の主義に由らず雜然として之を併列したりとて何等の得る處かあらむやと、即ち彼は



材料を経験に求むるが、實に之れを外にしては哲學なるものあり得可からざるが、之を總ぶるに知識統一なるものあらざる可からずとす、彼が科學全體を通じて、皆同一體形を有せざるも調和 (Homogenität) あらば可、而して、是等に亘りて方法の上に一一致あるを必要とすと云ひしは是れが爲めなり、之を要するに、彼は其學問の材料は之をペーコンの示す處に従ひ、之を處理するの按配は、之をデカルトに得たりと謂ふ可きなり。

三、ライブニツ、コムトの之に於ける關係は、前記二人に於ける程密接のものあらず、今は唯其一致點如何を見るあらむとす、即ち一は極端なる唯心論にして他は實證論の主唱者なるに係らず、其主張に於て相對的のものあり、コムトは唯經驗のみ憑據し、其中の理法を知るを以て哲學の能事終れりとし、之れ以上には進む能はずとなるが、社會を靜的と動的との二方面に分ちて前者は其秩序後者は其進歩を究むとせるが、兩者の關係に就ては曰く、社會の動的法則即ち其進歩に關しての理法は其靜的法則即ち其秩序に關するものと相調和して衝突せずとす、故に彼の言に曰く「進歩とは之れ秩序の開展のみ」(Le progrès est le développement de l'ordre) と故に

又彼は總て動的法則を靜的のもの、上に樹立せん (Pour lier partout les lois dynamiques aux lois statiques) と云ひしにても知らる、此くして現在の秩序的状態を別にして將來の進歩も無し換言すれば現在の中には過去の變遷より將來に亘る悉皆を包含しあり、故に彼の好んで口にせる處はライブニツの「現在はその中に過去を充たし又未來を孕めり」(Le présent est plein du passé et pregnant de l'avenir) の語にあり、之れライブニツが其單子に附せる性質にあらずや、又ライブニツが其器械論と目的論とを調和せむとして其を動的のものとし其範圍内にて之れあらしめしは、宛かもコムトが理法を知るを以て唯事物の存在の狀態に於てのみ之を知るを得とせしものと相似たり、之を要するに二人の説は、事物表裏の如く相並行する處のものあるを見る。

四、カント、コムトの之れと一致せるは、經驗の統一にあり、カントは、先天的形式のありて吾人の經驗を統一す即ち先天的統覺之れなるがコムトは之れとは趣を異にして、諸科學は夫々の研究法に由りて、研究せらるゝなるが是等全體に亘りて論理的連結のあるありて以て、統一を附すを得可しとなり、彼の社會學成るに及びて全體を通じて實證的精神を以て貫通し此くの如くにして、統一する處あるを見

る。又カントは吾人の本性を尋究し之れが普遍的形式如何を云ひぬ、即ち抽象的に人類の普遍的體形を明にしたり、コムトは、之に對し事實に訴へ人類全體の發展を検し由りて以て人性の普遍的體形を具體的に明にしぬ、其個人的のものを捨てて普遍的方面を事とせるは共に一なりと謂ふ可し。

茲に忘る可からざるは、目的論的觀念にありと爲す、彼は口を極めて神學的、並に形而上學的の意義を以てして事物の活動が、或目的に向ひつゝありとの説を排し吾人は唯其が働く處の理法如何を知れば足る、其れ以上の事は不可なりとして之を斥けぬ、然かも、内存的目的に就きては彼明かに之を認むるあり、所思生物にありては其部分を構成する諸機關は全體の考無くしては活動ある能はず、社會にありても亦之れと同じ、社會有機體を見るに、實に此くの如きものあり、即ち社會の各部分の行動は、其一致 (consensus) の觀念無からざる可からざるなり、由りて以て其れ自身の目的を遂行す、敢て他のものより之に加ふるあるとにあらざるなり、今之を縦に歴史的に考察するに、社會各時期の行動は相率ゐて一大目的の爲めに行進しつゝあり、即ち實證的時期之れなり、更に之を説かんに、神學的、形而上學的時期に於

ける夫々の社會的現象は各自々身の目的を果せると同時に此最後の大目的に向ひて行進しつゝあるを見る、之れ内存的目的のみ。

然り而してカントが實在の過程に對する内存的目的の觀念は頗る有名のもの敢て説くを要せざる可し。

五、以上コムト哲學の形式的方面に於て在來の形而上學者の所説と關聯する處如何を見たりしなるが、今其内容的方面に關するものを見るに、希臘時代に既にプラトーンの「共和國」及びアリストテレスの「政治論」あり、以て社會學の前身と見る可く、中世の神學の見解を経て近世に至りてはモンテスキュー及びコンドルセーの徒あり、共に其説く處未だ以て醇なるものにあらずと雖、又社會研究の必要を認め述べ處ありしは多とす可きなり、故を以て是等二人の名はコムトの著作中に幾度か出沒を爲す所以なり、然りと雖、社會學たるや總てのもの、最後に來るもの、實に他の諸學問の發達したる後に於て初めて確乎たる生立を見るを得可し、之れコムト以前に於て斯學成らずして、氏に至りて、初めて體系を具へし所以なり。遮莫、コムトが其先進者中に於て其學説に關し最直接に刺激を受けしは一度其師事

せしサンシモンなりとす。(傳記を見よ)  
以上説く處に因りコムトの學說中に在來の哲學者の所説の成素となりて入りある處を見む、然りと雖、其所謂哲學者なるものは、皆形而上學者にして、コムトの云ふ哲學にあらず、由りて其實質に於て、在來の哲學者間に於けるが如く學說の連絡を見ざるなり、之れ他無し、コムトは實に是等のものを轉形(Trans-posed)したればなり、レヴィブリュール實證哲學が如何に形而上學を變形せしかを十二ヶ條擧げて以て示せり、請ふ以下之を見む。

形而上學的哲學

- 一、潜在性と實在性とを分別す。
- 二、結局原因の原理。
- 三、生得説。

實證的轉形

- 一、靜的見解と動的見解との並に又秩序と進歩との區別。
- 二、事物存立の條件の原理。
- 三、人性を以て不變と爲し進化は何も生せず唯其中にある潜在的のものを發出するのみ。

四、宇宙の觀念。

五、宇宙の諸現象は悉く相互關聯す。

四、世界の觀念。

五、人性の(Humanité)觀念は、唯一の實に宇宙的觀念なり、蓋し人間社會存立の條件は、常に吾人の組織の理法とのみならず又吾が地球の物理的並に化學的理法及び太陽系の器械的法則と必然的關係にあればなり。

六、アリストテレスの科學說、先天的

の原因よりしての知識及びデカルトの説(單純のものよりして出立する演繹的知識)。

六、科學は合理的豫覺に代ふるに、事實に由れる實驗的建設にあり。

七、數學原理は、先天的綜合判斷なり。

(カント)

七、幾何學と器械學は自然科學なり、而して純粹の分析は其原理を建設する事能はず。

八、宇宙の秩序は道德的秩序の基礎なり(ストア、スピノザ、ライブニツ)。

八、人間行爲は、其中に生活するなる世界の理法の全體に由り外的に統轄せらる。

九、人類史は神智に由り指導せらる。

九、人類史は理法に由り遂げらる。

十、自然法の觀念は必らずしも器械論を伴はず。

十、自然現象の諸秩序は之を推改するを得ず、然かも皆湊合的にして、實在は層一層豊富となり來る。

十一、靈魂不滅説。

十一、「主觀的存在」即ち他人の意識中に殘存するの説。

十二、合理的神學。

十二、人類の實證的科學。

### 第三章 コムトの實證哲學

コムトの實證哲學の特色とする處は、社會學の創設にあり、之に由りて彼は初めて其學問に統一あるを得せしめ、學問の全體に亘りて實證的精神の流行するを見

る、而して此社會現象は極めて複雑なるものにしあれば、最後に初めて構成せられしもの、然かも逆に又之れの興起してより爾餘の學問歸趣する處あるを得たり、即ち之に由りて初めて、學問の渾一を得たり、此くして云はむとす、社會學は總ての學問の終結點にして同時に又出發點なりと。

彼所思學問は人生に貢獻する處のものたらざる可からず、而して人生行爲を總ぶるものは實に倫理宗教及び政治なり、然かも今日の社會狀態を観察するに雜亂紛糾して其間に何等の秩序を見る能はず、此くの如くにして孰んぞ倫理の整然たるものを得可き、將た又秩序ある社會を庶幾するを得可き、然り而して是等のものの基礎を爲すは實に人類學説(les opinions)の整一に由らずむばあらず、其之を爲すは、もとより哲學の事のみ、此くの如くにして彼は初めより哲學に絶對的價值を認めず、社會改良の爲めの根基として之が研究を初めしなり。彼が政治哲學(Philosophie politique)を創めし事を其書の諸處に於て反覆し以て其誇りとするを見るも之を知るに足る。今之れが論評に入るに先ち彼が認識論より初めざる可からず、由り左の順序に由りて進まむ。

一、認識論。

二、科學體統。

三、諸科學の實證的性質(社會物理學を除く)。

四、社會物理學。

第一節 認識論

コムトは認識論を以てカントの如く超經驗的に之を攻究せず、過去の事實の中に之を見たり、而して所思人智は唯現實界の理法を知るを得るのみ、之れ以外のものは其及ぶ處にあらざるなり、古來幾多か實體とは何ぞやの問を起して遂に之が解決を得ざるは畢竟之れ人智の及ばざる處のものなればなり、乃ち人智開展の三大時期を示しぬ、曰く神學的時期、曰く形而上學時期、曰く實證的時期之れなり、之れ彼の哲學中極有名なる部分なりと爲す、人智の未だ幼稚なるや科學的精神を以て諸現象を解釋する能はず、然かも天地間の諸現象は彼等の注意を惹起さざらむが爲めには餘りに不可思議なり、一方に四時の推移日月の運行の如き整然たるもの

あれば、他方には雷霆風雨の如き端倪す可からざるものあり、然して之に對して何等かの説明を欲するものから舉げて之を神の仕業と爲せり、即ち天然現象は徹頭徹尾神の自由意思の結果なり、由りて如何なる事をも生じ得可しと爲す、然かも、如何に人智の未だ進まざるの時にありても尙ほ天然現象の或者の理法に關しては動かす可からざるものあり、重量に就ての觀念の如き之れなり、アダムスミス曰く如何の未開國にありても重量の神無しと、實に之れ丈けは最明瞭に、科學的に知るを得ればなり、此くして業に已に實證的精神の之れと併存するを見る、後世の進むに従ひ益々之れと衝突を來し二者兩立するを得ず、其一が仆れざる可からず、而して仆る可きは孰れぞ、云ふ迄も無く神學的のものなり、蓋し動かす可からざる實證的精神は益々發達し來り之を仆す可くもあらざればなり、然かも之れより彼に移るには其處餘りに甚し、即ち兩者の中間に形而上學的時期のあるありて以て連絡を完からしむ。其形而上學的のものにありては、神の觀念に代ふるに實體の其れを以てし、現象の根本的實體果して何ぞの問題を提起して之れが解決を求めむとす、然かも之れ亦吾人の知り得る處にあらず、事物の第一原因並に終局原因奈何は

人智の盡す可きにあらず、即ち第三の實證的のものこそ真正の哲學なれ、之れにありては、斯かる超越的問題に至らず、唯着實に事實を稽查して其間に行はるゝ理法を知るを得ば足ると。

コムトの此説は即ち彼の哲學の實證哲學(Positive)なる名稱ある所以、而して學者の批評を免れざる處、然かも之を難するもの往々にして、其旨意のある處を没するあり、請ふ之を述べむ。

説を爲すものあり、曰く、哲學は知識に由り宇宙の本體を知らむ事を庶幾し、宗教は信仰に由りて之を求めむとす、前者は他迄考察的批評的方法に由りて進む可く、後者は直ちに之に通る、此二者其方法に於て同じからざるものありと雖、然かも、求むる處は同一のみ、二者の間に敢て衝突のある可き理無し、且つ又科學を見るに之れはもとより知識に由り天然を研究するものなるが、其方法分析的に流れ、愈々精密になれば、愈々特殊のとなり、遂に以て、本體の奈何を知るに由無し、之を總合して茲に斷案を下すもの之れ即ち哲學の事なり、且つ哲學の研究を以て不可能と爲す誤れり、吾人は認識の事實を有す、此事疑ふ可くもあらず、然かも其必要なる事もと

よりの處なりと爲す、抑も吾人の經驗する處確實の度如何、幾何か眞にして幾何か然らざる、實に個々の經驗的事實を離れて更に其根本我に溯り經驗全體を捉へて其眞實性を確めんとす、之れやがて認識論の事なり、更に又人類の心理的構造を考ふるに、其個々の行動を自我もて統一するあり、此くして認識論が總ての經驗の根本的統一を計りしものは此性質の行はれし一現象に過ぎざるのみ、此くして認識的事實は存在し其必要を見る、更に進みては萬有の本體(Das Wesen)並に其過程(Der Vorgang)を知らむとす、科學は唯個々の現象の性質を検し之れが理法を明にするのみ、是等の全體の根底を構成せる處のもの奈何之れ即ち形而上學の問題ならずや、更に之を尋究すれば科學と雖、之れと背馳するものにあらざるなり、科學は唯其研究の特殊のとなりしに止まり、是等全體を通じての根本的實在を豫想せずむばあらざるなり、而して哲學なるものは實に是等の科學の研究せる現象界の事實に基きて、是等を總合して以て其根本を爲す本體界奈何を推度するもの、今日に於て哲學が科學と離る可からざる所以、科學の進歩に伴ひ其上に建設せられたる哲學の變遷ある可き所以、此處にあり、抑も哲學が獨斷的態度を採りしや久し、近世の大

哲カントに至り初めて認識の確實性を檢し然る後本體の如何を察せんとす、之を名けて批評學派と云ふ、今日吾人の執る可き態度亦此外に出でず、而して彼は、吾人の認識し得る處のものは現象界に止まり本體界は其外に隠れありとし名けて「物其れ自身」(Ding an sich)と云ひぬ。降て今日に至りては最早此説を容る可きにあらず、本體はカントの爲せしが如く現象と峻別す可きにあらず、逆に之を云へば、本體を離れての現象なるものある事無し、現象界の中には業に已に本體界の幾部分の表現しあるなり、此くの如くむば、孰むぞ之れを認識せざるあらむや、宜なる哉、科學の知識に基きて之を知らむとするや、此くの如くにして形而上學は成る、而して久しきに亘りて滅す可きにあらざるなり、コムトの説誤れりと。

今之れに答ふるに當り先づ注意す可きは、コムトが「神學的及び形而上學的」の文字の字義如何にあり。實に彼は、神學的を以て「假想的」(imaginaire)の意に解したり、古代の神學説を見るに概ね荒誕にして、人類が唯天然現象に向つて何等かの解明を求むるの急なる須らく之に由りて以て其欲求を充したるのみ、彼の拜物教の如き之れなり、然かも彼は宗教を以て、全然拒斥す可きものと爲したるにはあらず、

實に事實は之れと正反對にして、最確實なる知識の上に樹立せる宗教は彼の哲學の終極の目的とせる處なり、其所謂「人道教」の如き實證的知識に由れるものにして、實に彼の生命とする處なり、此くの如くにして宗教と哲學とは合一し先に兩者の關係に、就きて云爲せる處のものと衝突を見ずして却て一致せるを見る。更に進みて、其形而上學に對する彼の見解を見るに、彼は之を以て抽象的實在、若しくは宇宙の基源、並に其歸趣、即ち宇宙の本體と其過程を攻究すとし、神學的時期が幾多の神々を單一の神と爲すを得しを以て其極致としたるが如く、之れにても幾多の實體を或單一のものと爲すに至て其頂點に達したるものとす。併し彼は此時期には絶對的價值を認めず、抑も哲學最後の發展は、實證的のものにあり、實證的性質は既に已に神學的時代に其萌芽を見たり、併し直ちに彼れより之に移る可くもあらず、其性質餘りに懸隔せり、乃ち兩者の中間に形而上學的時期の入り來るあり僅かに其連絡を保持せしむるに過ぎずと、先に之に對し絶對的價值を認めざりしは之れが爲めなり、哲學は實驗的事實に基き其間に流行する理法を知り能ふ可くむば之を一のもの例へば重力の理法に歸することを得ば足る、併し現象は餘りに複雑

なれば此事難からむも。コムトの此説は幾多か人の批評を免かれざる處なるが、難者彼が形而上學の存在を認めざるを尤むるなるが、彼は在來の哲學が實驗的事實を顧慮せず、徒らに思辨を運らして以て之を得たりと爲すが故に此くの如きにして、彼は之に對して徹頭徹尾科學の必要を唱へしなり、十九世紀後半に於ける學界の新現象は科學の勃興にあり、其進歩の度計る可からざるものあり、而して哲學なるもの此事實を度外視して存立す可くもあらず、最新の哲學を構成せむとするもの、均しく之を云ふ、故にヴントは曰く「哲學とは、特殊科學に由り得たる一般的知識を一の矛盾無き體系に合一する一般的科學なり」と、コムト科學の未だ今日の如く隆盛ならざるの時に生れて既に其必要を看破し、哲學は此上に樹立せざる可からず、此を外にして又之れある無しとし、在來の哲學の徒らに思辨的抽象的に流れしを難じたるもの豈に卓見と謂はざる可けむや、夫れ人智の開展は正、反、合の次第に従ふは其本質上免るゝ能はざる處、コムトが在來の哲學に慊焉たらざるの餘りに反對の極に趣きしは敢て恠むを須るす、之れ人類共有の點、短處とす可くむば、人類を擧げての短處にして獨りコムトのみを責む可きにあらざるなり、今日の哲學が

一步を進めて現象界中に實在界を認め之を外にして、彼のみ獨存するものにあらずと爲すの説は、實にコムトの實證的性質に基きて更に一步を進めしもの、今古來の哲學とコムトのと此新哲學の三者を遞次連ぬる時は、實に正、反、合の次第にあるを見む。余常に云ふ哲學は、其學問體統こそ主なれ、其人は、之に次ぐ、古來幾千年に亘りその發展に於て某の時に解決す可きの問題は既に定まれり、若し然らずして之れと無關係の事を試みむか明かに時代過誤 (Anachronisms) たるを失はざるなり、此くして哲學は古來連綿たる問題の開展する處に於て其形體を見る、哲學者は其生れし時の學界の風潮を知り、之に處するの事を明にすれば可ならむのみ、即ち一人の哲學者の爲す處は此全體形の幾部分を建設するを得れば足る、もとより其中に哲學の全體のある可き謂無し、然るに若し茲に人あり一人の哲學說に向ひて、總てを要求するものあらむか之れ實に哲學の何たるを知らざる嗚呼のしれ者と謂ふ可きのみ。

又ヴントは、曰ふ、凡そ理法なるものは、論理的に獨立なる事實を整齊的に連結するを得且つ又將來の新事實をして克く其中に包攝して處を得るものたらざる可



からず、今コムトの三大時期の理法なるものを見るに、極めて近き將來にありては、此實證哲學は可なり、然かも彼は其れ以上に至らず、之れ新者の來るに及び如何に其中に包攝せむとはする、實に之れ今日迄の進歩の處にして將來には、更に之れと異なるものあらざる可からざればなり、之れ豈に理法ならむや、實に彼のは、人の心理的考察に由りての抽象したるもの、又歴史的事實の因果的連結を爲したるにあらずして、唯之れが圖式的叙述に止まるのみと。(ヴァント論理學第二部第二卷百三十三頁以下及びバルト歴史の哲學五十二頁參照)。

是れ實に彼の欠陥なり、哲學は彼の所謂關係的のものなればなり、實證的方法必らずしも恒久の價あるものにあらず、且つ之を責む可くむば、何れの學説か然らざる、要は當時の最も進歩せる知識に合すれば可ならむのみ。

然らば彼は如何の方法に由りて之を知りたるか、曰く次の二者に由りてなり。

一、歴史的事實、古來學問の各種のもの、進歩を案するに、皆順次此三段階を経あり、もとより總てのものが一樣に實證的時期に入りあるとにあらず、其對象の單複如何に由りて其進歩に差異あらざるを得ざるは、もとより其處なりとす。

二、心理的事實、更に之を人性に就きて案するに、然らざる可からざるの理由の存するを見る、往古未だ人智の開けざるに當り天然の諸現象に對して何等かの解決を求むるや切なり、乃ち之を以て擬人的天帝の作用と爲し、且之れは吾人々類と同様の性格を有せるものから、其意思を活用して以て天然現象を生せしむ、換言すれば、天然現象は悉く之れ神の自由意思の結果に外ならずとなり、由りて神學的時期は、自發的に人民の中に生ずるなり、然かも此時にも既に實證的分子の存するあり、後年に至りて益々盛となり、兩者相容れざるに及びてや當然神學のものとは仆れざる可からず、蓋し其反對は、之を爲すを得可きにあらざればなり、而して形而上學的時期は兩者の中間に位するも其性質上よりは寧ろ神學のものに近し、唯神體に代ふるに實體の名稱を以てしたるに止まればなりと。コムトは此心理的事實なるものを人類全體の經驗に借りて云ひぬ、彼は個人心理學なるものを難じ其所謂内省法の存立を斥けぬ、曰く個人心理學は内省法に由りて各自が其心的經過を實驗すとなるが、之れ不可能の事に屬す、蓋し内省の主體は自我の知識なるが、之れが其知識を知らむとするに及びては、同一物が觀察せむとして同時にせらるゝ、

のものたらざる可からず、主體にして同時に客體ならむとす、其一ならむ時に當然他たる能はざるなり、其他情意の如きものと雖、各自之を知らむとすれば、其を止めざる可からず、之れ遂に内省法の不可なる所以なりと。是れ當時心理學の未だ進歩せざる能力心理説に基きて心的作用の皆夫々別々のものとせるよりと又認識作用の如きも主觀客觀の二者を峻別せるとよりして生じたる誤解にして、今日の如き心的作用は皆同一の活動にして、知情意の如きものも皆之れ唯同一のもの、表現の方面の異なるのみ、如何なる活動と雖、此三者を包含せざるは無きものとす、實に意識現象は渾然たる一體のみ、如何の種類の活動と雖、精神全體に關係せざるもの無きなり、其内省法なるものに至りても吾人の意識活動となり之を明にするを得ば則ち足る、彼の何ぞ主觀客觀の如き別の生ずるあらむや。

コムトは明かに、心理學の解釋を誤れり、併し之れ當時斯學の未だ進歩せざりし時にしあれば、然かく斷定したる事誠に止むを得ぬ次第なりと謂ふ可きなり、併し個人心理學の方面に於ては此くの如かりしも、社會心理學の方面に於て絶大の貢獻を爲しぬ、彼は人類の經驗に訴へて事を見んとす、之れ即ち社會心理學なり、彼は

此必要を唱へしなり、彼の心理學に關する見解は消極的方面に失敗し積極的方面に成功したるものと謂ふ可きなり、當時の歐洲の思想界の風潮を案するに、十九世紀の初にはヘーゲルの哲學歐洲を席捲したりしが、其中にある客觀的精神の觀念よりして、集合精神の存在を唱へ個人は客なれ、社會こそ主なれとして、大に社會心理學研究の必要を論じたるものを獨のラアルス及びスタインタールと爲す、之と並びてコムト佛國に起りヘーゲルの此精神と呼應する處あり、彼以前に於て、未だ明ならざりし社會學存在の基礎を定めし事、其大功に歸せざる可からざるなり。最後に注意す可きは、コムト社會には、教育と行動の二方面ありと爲し、前者は學問研究に従事する人の爲す可き處、後者は、實際的事と爲し、學者の領域を前者に限りたり。

## 第二節 科學の體統

學問は、コムトの意を以てして三段の開展を経るは既に之を見たり、然かも總ての學問が同時に同時期に到達すにあらざるも、とより其種類に由りて差別の存す

るあり、コムト曰く學問は其簡單の程度に従ひ實證的時期に到るの遲速あり、愈々複雑なれば愈々此時期に到る難し、故に數學は最も早く此時期に進みしも、社會學は今日に至りて初めて之となるなり、彼は此次第を順次並列して以て、科學體統を構成したり、併し此中には總ての科學を包攝せむとにあらず、彼は、科學中の理論的、抽象的のもののみ選出したり、彼の具體的のもの、如きは皆之れより派生的の性質のものなればなり、由りて生物學は之を云ふも、動物學、植物學の如きは之を云はざるなり、彼あれば自ら、之を知るを得ればなり、此くして是等の科學は彼の所謂基礎的なるものなりとす。又最初に説きしが如きの理由に由り彼の三大時期の法則を補充的關係に立ちあるを見る、彼曰く「學問の諸分派は、其開展に際し同一速度を以て三大時期を経る能はず、由りて又同時に實證的時期に到る可からず、茲に是等の諸學問が、其進歩に際し従はざる可からざりし次第あり、之を考察するは、此理法に對し缺く可からざる補充的性質を有するものなり」と、其體統とする處次の如し。

一、數學、二、天文學、三、物理學、四、化學、五、生物學(個人心理學を含む)、六、社會

### 物理學。

乃ち知る數學は最簡單にして最初に發達し、之に反して社會學は最後に實證的時期に至りしを、而して爾餘の諸學は夫々其度に應じて此間にあり。是等諸學は其順序に應じて其れ以前のもの、知識を豫想す、例へば化學は、物理、天文、數學の知識を豫想するが如し、最複雑なる社會學が最後に來りしは、固より其處なりと謂ふ可きなり、然りと雖、此事は唯其根本原理に於て然りと云ふのみ、個々の事實に於ては却て逆流するあり、例へば寫眞術ありて天文學の知識の愈々發達せるが如し。

而して茲に牢記す可きは、各段の科學は管に其れ以前のもの、知識を豫想するのみならず、又之れと別にして其れ自身特殊のものを要す、例へば生物學の如き物理化學の知識は缺く可からざるが、之れのみにては生活現象を知る能はず、必らずや之に加ふるに其に特別なる知識を要す、此くして各の科學に獨立を見る。

今之を下より向上的に見れば、主觀的に、抽象を益々加へ來り、上より向下的に之を見れば、客觀的に、特殊性の増進的に結合せるものなるを見る、而して人心は、抽象のものを具體のものより早く知るの性あり、由りて彼れが如き順を以てして科學

發達したるなり、更に又之れが教育に及ぼせる影響如何を見るに、學問研究の上には次第あらしむ、即ち其如何の階段にあるものも、之を知るには其れ以下のものは之を知るを要せざれども其れ以上のもの、知識は必らず之を假定するが如し、例へば數學は直ちに之を知るを得可けれども、化學は數學以下物理學迄の知識を要するが如し。

コムトの此科學體統は、實に新時期を畫すものにして、氏以前の科學の分類が徒らに對象に従ひて之を施せしに慊焉たる能はず、所思總ての科學はもとより其相違せる點あるなるも、其根本義に至りては一致すと、此くして其研究對象の根本に於て合一すとの事よりして乃ち一元的系統的のものを試みてこの學皆關聯する處あり、所謂包括的理法 (Lois encyclopaediques) の存するも之れが爲めのみ、而して社會學が最後に發達し一度成立するや爾餘の科學は皆之れが爲めのものとなる、此處に於て統一を見る。

然りと雖、此分類たる極めて重大なるを以て、功績の大なりしと同時に其中に缺點の存せしは止むを得ざる處と爲す、其攻撃を爲せし中にありて最有名なるをス

ベンサーと爲す、彼は氏のを次の三點よりして攻撃したり、(一)抽象性と一般性との混交、(二)心理學の獨立、(三)人間中心的性質之れなり。曰くコムトは抽象性と一般性を混じたり、學問は抽象的又は一般性的のものより具體的又は特殊のものに赴くとの事なるが、一般的のものは其範圍は廣からむも、抽象性に於て、同様に加はるとの事無し、例へば、天文學の如き個々の物體を處理する上からは物理學よりも一層具體的ならむも其抽象性に至りては化學以上ならざるが如し。

二、心理學は其對象は精神現象なり、生理學の爲す生理現象とは異なれり、獨立の價値を與へざる可からず、又、三、コムトは其說大に人間中心的趣味を帶ぶるあり、其社會を以て中心と爲すが如き之れなり、彼は神學的時代の擬人的觀念を大に難じ實證的時期に至りては之を去る可きを唱へながら此くの如きは大なる矛盾にあらずやと。

先づ此最後のものよりして初めむに、先にコムトの體統を以て一元的と云ひしが更に其成素を分析するに、二元的のものあり、其出立點に於ては自然科學的にして生物學に至り之れよりして社會學となる、此方面よりして之を見れば彼の社會

學に生物學的の趣味あり、然かも一度社會學となるや其獨立の要素あり、前者は個人としての人を研究するに止まれども後者に至りては、社會中の一人として個人を以て抽象的のもの、社會こそ實在なれと爲しぬ、而して此くの如くにして社會學の成立するに及びてや、初めて學問の統一を得たりと爲し、爾餘の學問を以て皆之に揖せしむ、夫れ社會は人類の產物なり總ての學問が此中のものとなら其所説に人類中心説のある何の恠む處ぞ、實に總ての學問が、抽象と云ひ何と云ふも人類が爲す處にあれば、其全體に於て、人類中心説を以て包括するある敢て恠むを須るざるなり、而して、總ての學問が其部分的研究の如何に係はらず、之に由りて結束せらるゝなり。

コムトが心理學の獨立的價値を認めざりしは、既に述べしが如く當時斯學の進歩未だ幼稚にして所謂能力心理説なるもの流行したりしかば、彼は之に對して打撃を加へしのみ、即ち盛に觀察實驗の必要を説きしなり、今日の如きの意味を以てしては彼亦其存立を認めしならむ。

最後に其分類に至りては、スペンサーはコムトの系統的のものに對し團體的に

之を分別し三團とし、(一)抽象的、(二)抽象的具體的、(三)具體的のものとして爲し、夫々を此中に入れぬ、ス氏の此分類は後に人の批評を免れぬものなるが其コムトに關するものゝみを見るに、コムトは當初より學問の抽象的のもののみ分類せむと試みしにして、從てスペンサーの分類中にあるものにして彼の中に存せざるは當然の事なりとす。

人或はコムトの此科學分類を爲せしは六十年以前の後、爾來學問の進歩は實に顯著なるものあり、氏の分類亦遂に今日廢物たるを免れずと云ふあるも之れ實に事理を知らざるものゝ言のみ、コムトは具體的科學に就きて論述せしにあらず、抽象的に其精神を述べしのみ、即ち科學の哲學を説きしのみ、此點に於て今日も淪る事無きなり、レヴィブリュールは氏の位置を以てデカルトの物理學に於けるものに比したり至言と謂ふ可し。

以上三大時期の法則と科學の體統の説とに由り彼我相補充して彼の哲學を完ふしぬ、更に再び之を述べんに、彼は在來の哲學の徒に空理のみの研究に赴き爲す無きを説き科學と同様實在(Realité)の觀察に基礎を定めざる可からず、實に哲學は

事實の理法を明にするにあるのみ、由りて以て將來をト知するを得可し、故に曰く「豫覺せむが爲めに之を知る」(savoir pour prévoir)と、彼の神教説と經驗説とは、共に其斥くる處のものたり。此くして包括的理法のありて科學體統の全體に亘るあり、由りて以て之に統一あるを得るなり。

### 第三節 諸科學の實證的性質

彼の科學體統中コムトに至る迄の諸科學の叙述に至りては粗雜取るに足らずとは専門家の均しく口にする處なり、然りと雖、曩に述べしが如く此處に於て彼の期する處は唯是等諸科學の實證的性質を示すにあるのみ、之を爲せば則ち足る、而して彼のは之に餘りあり、今是等のもの、一々に入り論ずる處あるは其順序なれども、事本論より枝葉に亘り且つ又在來述べし處を以て是等のもの、夫々の位置は明かとなりしを以て今は直ちに社會學に赴かむ。

### 第四節 社會物理學

コムトは初め社會學なる語を用ゐず、其社會科學(Science sociale)を名けて社會物理學(Physique sociale)と云ひぬ、之に對して、社會學(Sociologie)なる語を用ゐしは、第四卷に於て初めて口にして實に氏の創むる處なり、此語は羅典語の *Socius* と希臘語の *Logos* との結合よりなる、此くも語源を異にせるものを合せりよりして、之を野蠻バルバリシユなりとして、久しく學者の間に斥けられしが、スペンサー先づ之を用ゐ、獨逸にありても之に代ふ可き更に適當なる文字を見出さざるが爲め、遂に襲用して今日は普通の語となりぬ。

既に科學體統に於て見たるが如く社會學は實に其最後に位す、蓋し總ての學問は皆神學の見解に初まり、形而上學的のものを經て實證的のものとなるが、其單復の度如何に由りて、此最後の時期に至る事同じからず、在來社會に於ける政治並に道德の現象は極めて複雑にして、其間に何等の理法の存立せざるものとせられたり、然り而してコムトに至り一度其科學的性質を定められしより、在來神學的若しくは形而上學的に解し社會は如何様にも人の欲する儘に之を改造し得可しとせられしものも、一定の理法の存立する事を明にせられ即ち茲に社會科學の成立を

見るに至りぬ、此くの如くにして、宇宙間の現象は擧げて之を科學的に知るを得る事となりぬ、科學は社會學に至りて終極に達す、而して社會學の存立は同時に又實證哲學の成立を爲しぬ、蓋し此くの如くにして總ての現象の理法を明にすればなり。故に曰く人類の研究は實に最後の研究なり(L'étude de l'humanité est la seule étude vraiment-finale)。

彼は社會中に於て、秩序と進歩の二者の存在の必要を感じ、而して此二者は、相衝突するものにあらざるを知りぬ、之を攻究せんとする、之れ彼の社會學の事たり、抑も社會の神學の見解は往古にありては社會の進歩に貢獻する處ありしも、科學進歩の今日にありては却て無用の長物たり、形而上學に至りては、唯過去の神學的の餘勢を打破し以て新來のもの、爲めに道を開きしに止まる、其事や實に消極的のみ、實證哲學の生出するに及びて初めて之を解し得たるなり。

抑も社會學は總ての科學中に於て最後に位するあり、由りて其研究法に至りても、在來のもの、總てを其中に包含す、先づ數學に由り實證的精神を得、次では、觀察實驗、比較法等を爲す。夫れ觀察とは事實を有りの儘に觀るの事にして總ての實

驗的科學の必らず試むる處なり、社會學もとより之を爲す、之に由りて材料を集む、次に實驗に至りては、社會現象に至りては、或は之を試むる能はざるが如きの觀あり、抑も實驗とは他の點に於ては總て相一致し其の事のみ異なる二個以上の事實を比較するにあればなり、而して社會學にありては實に此事を爲すを得、蓋し社會には病的現象あり幾多混亂の時期之れあり、彼の革命の如き之に屬す、之と之に相當する平時のものとを比較せむか即ち之を得可きなり。

比較法は、實に生物學に初まり其特色とする處たり、此法は實に社會學にも極めて必要にして、由りて以て同時に存在せる異なる諸社會、例へば文明社會と野蠻社會とを比較研究するを得るなり、共に之れ人類進化の段階を示すもの、其始終を通觀すれば共に同じきものあらむ、然かも或特別の時期の比較は彼我同じからざるものあり、此くして社會靜學の上に貢獻する處尠からず。抑も斯法の社會學に於て重きを爲す所以のものは、之れと生物學との間に通有性の存在するを示す、共に之れ部分が全體を離れて活動無し所謂一致(consensus)なるもの、必要を認む。然り社會學の生物學に密接の關係の存するは明に之を見る、然りと雖、若し彼此類似

の點のみありて其特有點無しとならば、社會學は實に生物學の分派に止まり其中に獨立の價を認むる能はざるなり、社會學豈に然るものならむや、抑も社會現象には過去の記憶あり、歴史之れなり、之れ生物學の無き處、茲に於てか其特色とする歴史的方法、生ず、之れに由り人類過去の發達を觀察す、然かも社會學に於て論ずる史觀は徒らに過去の事實の併列に止まらずして、之を分類し其根本概念を明にし、以て社會發達の原理を明にするものなり、歴史哲學即ち之れなり。是等に關する論議は本論に詳なるを以て、茲に之を贅せずして以下直ちに主論に入らむ。

#### 社會靜學 (Statique Sociale)

是は社會動學と併せてコムトの創むる處なり、彼は之に由りて、人間社會の自發的秩序を攻究せむとす、所思社交性は之れ人類に固有せるもの、此處を以て彼のルソーの如くに社會を以て、人類の約束に由り成立したるものと認めず、而して此秩序存在の條件を三段より見たり、一、個人、二、家族、三、社會。既に社會の存立せむには一人にて爲す可きにあらず、必らずや直接若しくは間接に多人類の協働を要す、勞働と云ふ器具を要す、之れは他人の製作する處たり、況んや精神的方面の知識若し

くは道德の如きに至りては、もとより多人數の存在するありて之を得るなり、社會は多人數より成る、而して、個人は其働者となる、然らば社會の單位となるものは何か、コムト所思凡そ某の者の單位たらむが爲めには、其れと同性質のものたらざる可からず、社會の單位は依然集合的のものたらざる可からず、而して之に加ふるに獨立的存在のものたるを要す、換言すれば其れ自身に於て存在の能力を有するを要す、此くの如くにして彼は、家族を以て之れと爲しぬ、由りて其成立の爲めの結婚を重大視したり、而して社會は是等の多數者の團體なり、今此二者を比較するに其間の性質に於て異なるものあり、前者は合體 (Union) にして感情的性質主にして、智的のもの、之に次ぐ、社會は之れと異り共働作用 (Cooperation) にして、知的性質主にして、道德的のもの、之に次ぐ、由りて其社會に分業あり、此分業とは極めて廣義にして、實に物質的のもの、みならず萬般の事を其中に包含す、即ち種々の階級並に之に屬する種々の人々は、種々の事に於て社會に寄與する處あるなり、而して此社會を結合する處あり、彼我の中に局部的の想念より脱して全體の念を起さしむるもの之れ實に政府なるもの、職能なりとす。



スペンサーは靜學を以て單に秩序を攻究するとの事を不充分とし、曰く社會の均勢狀態を之れとす可し、而して社會は動的のものなれば、其中に於て之を得たるもの、即ち動的均勢(Moving equilibrium)を以て之れと爲しぬ、近者ワードに至りては更に進みて、社會活動に於て、少しも新分子の加はり來らざるものを之れと爲す、即ち時と人とを異にすとも、其構成に於て、先にありしものと異ならざるからは其社會は靜的なりと云ふ、之れ字義の變遷なり。

#### 社會動學(Dynamique Sociale)

是も亦コムトの創めし處にして、靜學に對し、社會の進歩を研究せむとするもの、もとより此進歩なるものは秩序と別にあるものにあらず、故に彼は進歩は秩序の發展(Le progrès est le développement de l'ordre)なりと、之れ彼の社會學の根本原理を爲すは先に述べし處なり、然りと雖、其孰れに重きを置くかと云へば云ふまでも無く動學にあり、彼の三大時期の法則の如きも之に於て初めて適用するを得可し、社會學の特殊の研究法なる歴史的方法の適用するを得るも實に之にあり、之れ實に彼の社會學精神とも謂ふ可きもの、故を以て實證哲學體系の第四卷の末章より第五

卷第六卷に亘りあり、其所説はコンドルセーに基因し更に進みては、ライブニツに由らずむばあらず、彼が好んでライブニツの「現在に過去に滿ち未來を孕む」の語を誦したるにても知らる、又パスカルの「社會は過去より未來に亘りて連續ある一巨人と見る可し」との言を喜びぬ。然かも人間社會の複雑なる其未來に於て生起する處のものを悉く豫覺す可くもあらず、乃ち過去の社會を取り以て其發展の間に於ける理法を検せむとす、此くして彼の社會學は之を主とするに至る、タルド曰く「コムトの社會學は歴史哲學なり」と、味ふ可きの言なりとす、社會理法、ゾント亦同様の言を爲して曰く、コムトの社會學の内容は歴史哲學のみ、而して幾度か繰返されたる三大時期の理法の適用に基くと(タント論理學第二部第二卷四百四十一頁)。

彼は之に由り人間社會なるものが、神學者形而上學者の所説の如くに無難作に變易せられ得可きものにあらずとす、其中には理法の存すればなり、故に彼曰く社會は無際限に之を完全に至らしむ可きにあらず、夫々の時代に應じて制限あり、人は唯其を變形せしめ得るに過ぎずと。此くして社會進歩の根本原理として、神學的形而上學、實證的の三大時期を定め、總ての社會が必らず此次第に由り進化し

來たるものなるを見たり、而して之に加ふるに氣候、人種、政治的行動のあるありて其進歩に遅速あらしむ、然りと雖、此三者は之れ第二次的性質のものにして、彼の時期の發生の上に加ふる處あるに過ぎず、未だ以て根本的のものと爲す可きにあらざるなり、此事の明かならざりし爲めモンテスキューは社會に及ぼす氣候の勢力を過重したり更に詳に之を云へば、夫々の社會發期の時期には、夫々進歩の極限のあるあり、總てのもの其活動に理法のあるあり、故を以て、是等のもの、加はるれば、如何様にも其無際限に社會を改變し得可しとの如き事は無きなり。

晩近米のウォード純正社會學を著し社會構造靜學（静學）と其進歩（動學）との關係を論ずる詳なり、彼はコムトの此説を以て未だ盡さずと爲し、其何が進歩あらしむるものなるやを示さずとし之を論じて社會の進歩とは社會の組織に變化ある處のものたらざる可からずと爲し、動的原理なるものを次の三者に歸しぬ、（一）ポテンシャル潜勢の差異、（二）イノベーション改新、（三）マネーション動能、彼は天然の征服を以て文明の進歩と爲し以上の三力を以て之を進むるの原動力と爲しぬ、其所説もとより一方に偏するの憾あれども、コムトの言はざりし處を具體的に示したるもの、又彼我補充的關係に立てるものと謂ふ可きなり。

### 歴史哲學

コムトの社會學が其骨子に於て遂に歴史哲學に歸するは、幾度か論述したる處抑も彼の社會學は抽象的科學なり、由りて之れが爲めの歴史哲學亦此性質を帶ぶ可きや當然の事、彼の徒らに事實をば年代を逐ふて列記するは之れ歴史家の手に屬す、過去二千年に亘りて如何の理法に従ひて社會の發展し來りしかを知らむとするは之れ彼の社會學の教ゆる處なりとす。而して彼は之れの對象として歐洲の五大強國を挙げたり、彼の時代にありて彼の如き國に生れて此くの如きの想を爲せしは當然の事なりとす、彼にして今日に生れしめば、絶東の新興國必らずや又其念慮の中に加はりしや疑を容れざるなり、遮莫彼の哲學は歐洲文明開展の次第を解釋するには餘りありと謂ふ可きなり。

彼は文明の進歩の極致を以て鞏固なる社會統一並に人道の流行にありとし、文明の進歩が不斷に此方に向ひつゝあるを示しぬ、即ち總ての區別的社會を打して一丸と爲し以て一個の人間社會と爲すにあり。彼は此歴史に於て主として知識

發達の次第を見んとし蓋し之れ根本のもの餘は之れよりして生ずるものたればなり。彼所思軍隊制度は之れ過去の産物のみ今日の如き實證的時期となり科學の隆盛を致す事彌甚しきに至りてや産業的時期之に代らざる可からず、産業の發達は即ち國の富なりと。而して彼の三大時期に相當して夫々の社會組織を説きぬ、曰く神學的時期にありて最初に現れしものを拜物教時代と爲す、此時の社會組織は軍隊組織の初を爲しぬ、次で神教時代に入るや宗教に於ても軍隊組織に於ても益々發達を來しぬ、次の一神教時代となるに及びてや軍隊組織の上にも變化あり、此時代の軍隊組織の精華を以て、騎士制度と爲し又封建制度の及ぼせる影響如何を説き、次で第二期の形而上學時期に入り、産業の進歩漸く盛に遂に實證的時期の曙光を見る、彼の印刷術の發明の如き之れなり、此くて今日に至りては純然たる第三期にありと爲す。彼は又美術に關する見解を下して之れ亦社會の爲めとの事を外にして存す可きにあらず、由りて彼の美術の爲めに美術 (*art pour l'art*) を事とするものを斥けぬ。

コムトの此見解に關しては、後の學者の批評を免れざる處、ウインデルバンドは曰く極めて委曲にして細目の點には興味深く然かも全體としては全然隨意的ウイルクユールリビにして幾重にも無學と僻見とに由り損はれたるコムトの歴史哲學は全然其社會改革の目的の爲めに新建設を試みたるものと判す可きのみと、(ウインデルバンド哲學史第五百三十一頁)。

バルトは更に進んで曰く管に其主要の點三大時期の法則に於て誤れるのみならず又其細目に於ても然るを見る、コムトは古典的時代には進歩の念缺乏し、基督教と共に初めて世に出でたりと、此くして彼は常に總ての國民を通じて最初の政府は神政なりと爲しぬ、然かも、古典的時期を見れば之より更に善きものありしにあらずや、由りて猶太の神政が基督教の僧侶制の生起に與かりし處のものを知らずして、却て之を以て一神教の精髓より自發的に出でしものなりとし、又中世に於て權力の分離を以て、一方の羅馬人の政治的權力と、一方は希臘哲學者が或は之を行ひ或は夢想したる精神的權力との合併したるものと解するも實に此事、中世の僧侶には因襲さるゝ事極めて微にして猶太僧侶制に於けるものに比す可きにあらざるなり、明かに彼は此偏頗なる二者が同一目的を有すとの念に驅られしものな

るを見る、或は又佛の裁判所、パーラメントの如き封建制度より生じたるものとす  
るも實は獨裁君主制よりなり、又新教の實證的性質を全然無視し、此中に唯革命的  
方面のみを見て道性原理を弛廢するを難するも、彼にしてカルヴァン派わけは  
新教法の道性の嚴肅なるを見れば、到底此かる判断を維持する事能はざる可きなり。  
(下略) (バルト歴史哲學第五十二頁以下)。

此くの如く、コムトの歴史哲學は全體として將た又其部分に於て學者の攻撃を  
免れざる處、然りと雖、之に係らず其社會學を創設したるの功に至りては久しきに  
亘りて到底滅す可きにあらず、忘る勿れ、オーギュストコムトは社會學の鼻祖なり。

## 第五節 人道教

余は本書に於てコムトの哲學を述ぶる事を以て目的としたり、然りと雖、既に述  
べしが如く彼の哲學は社會の爲めの哲學なり、其道德、政治の爲めの哲學なり、此く  
して彼は之に對して絶對的價值無きなり、今此最後のものを知らずむば、則ち其價  
のある處を解するに苦しむ、宛かも龍を畫きて睛を點せざるに同じ、茲に此論ある

所以なり。

コムトの人道教に入るに先ちて先づ知らざる可からざるは、其倫理説にあり、其  
題句に曰く「愛を主義とし秩序を基礎とし進歩を以て目的と爲す」(「Amour pour prin-  
cipe, et l'ordre pour base; Le progrès pour but」)と、又曰く「他人の爲めに生活せよ」と彼の主義  
とする處は愛なり、利己的觀念を捨て、他人の爲めにせよとなり、即ち其倫理説は  
其創造語なる愛他主義 (Altruisme) なり、之れ其哲學説の社會を主とし個人を以て抽  
象的のものに過ぎずとするものよりして生ずる當然の成果なりとす、今茲には彼  
の倫理説は詳細せず、唯次の人道教の前提となさむのみ。

此くの如くにして彼は人道を (Humanité) を以て實在とす、他のものは皆之れに従  
屬す、コムトは形而上學者の絶對的實在を知らむとするを以て不可能の事に屬す  
と爲せしも、吾人に對しては、即ち主觀的實在なるものを以て此人道と爲しぬ、大實  
在 (Grand-êtré) 之れなり。初めは科學的性質のものなりしが、後には宗教的着色を示  
し來りぬ、古來の歴史は實に此人道の開展に外ならず、社會は横に之を見れば、連結  
性 (Solidarité) あり、縦に之を見れば、繼續性 (Continuité) あり、後者は即ち其動的方面にし

て、總ての時期を通じて皆此人道の開展に寄與す、之を離れての個人無し、個人は人道の中に生活す、加之、之に寄與する處のもの無かる可からず、若し茲に人ありて余は社會の益を受けずと曰はむか其曰ふ處の言辭既に社會の産物にあらずや、人類生起してより茲に幾千載其間に生死せる數幾何ぞ、然かも後世に遺す處のものありて初めて生存する價あり、換言すれば人道の發展は寄與する如何に於て其價を見る、此に於てか知る、彼の動物的生活の用無く精神的のもの、み、必要なるを。後年更に此意を明にして大實在の部分を構成するものは總ての人が之にあらずして之れと融合し得る少數の人士のみ之れと爲す、大多數は寄生者の位置にあり、此に於てか大人の價有す。

更に靈魂不滅の義を明にして曰く形而上學的に死後靈魂の存在に就きては知るの要無し、吾人が此人道の部分を爲し恒久に亘りて存在すれば之れ吾人の不滅にあらずや、抑も不滅とは何ぞ、多人數と共在する事にあらずや、吾人の死後願ふ處は唯之れのみ、而して人道の一部となれば克く之を充たしあり、換言すれば彼は靈魂の客觀的不滅を認めずして、主觀的不滅を唱へしなり。

オーギスト、コムトの科學的、社會的並に宗教的觀念の綜合するは人道の觀念に向ひてなり、此綜合にして完からむか彼の事業は遂げられしものなり、由りて心的並に道德的混亂は癒され、政治宗教の混亂將に去らむ、統一は到る處に之れを見るを得可し。此事たるや吾人の知識は調和的なり、即ち實證的との事にし知らる、蓋し吾人の研究には悉く其方法を一にし、最後に科學全體を社會的見地よりして制すればなり、精神全體の統一は知識が此くして其理法其機能を知り己を情に従屬せしむ即ち愛情の指導する處たらしむるに由りて之を得、最後に社會に於ける統一は、普通的に認容せられし原理を有せる新精神力ありて總ての男子婦人に同一教育を授け同一道德を教へ、愛情及び至善の宗教の下に集合せしめて以て之を得可きなり（此項レヴィブリュールによる）。

## 第六節 結論

オーギスト、コムト社會學の基礎を定めしより茲に六十年、其間に於ける斯學の發展は實に駭く可きものあり、譬へば、黄河千丈の堤を一時に決したるが如く水勢

奔流四面に横溢し滔々として天を浸し新進の學を以てして、因襲久しき諸々の學を壓するあり、蓋し十九世紀後半に於ける世界の新事實多々ある中に於て、社會現象を以て最と爲す、人は社會の中に生れて社會の中に歿するものなり、此社會を外にして幾何か其れ人たるを得む、ゲーテ曰く「才能は孤獨尙之を善くす可し性格に至りては世界の潮流の中に於て初めて之を得」と、豈に獨り性格とのみ曰はむや、學を脩め業を習ふの事亦社會的生活に於てのみ之を得、十八世紀の末葉より十九世紀の初期に亘りては、純乎たる合理説主張せられ各個人は如何様にも之を陶冶するを得可しとす、其個人に絶大無限の力を與へたるよりして之を見れば之は又個人主義と稱するを得可し、後學界の思潮漸く變じて遂に反對の方向に赴きシッペンハウアーは、人の性格は生得のもの生涯を通じて不變なり」と叫ぶに至る、此時に當りてコムトは周圍(milieu)の人に及ぼす勢力の多大なるを唱へぬ之に天然と社會と二者あり、併し今日の文明國民は往古と異り直接に天然に接する事少く、由りて周圍を以て社會と見るを得む、而して此(milieu)なる語は實に彼の創むる處たり、願ふに人性を以て、恣に改易するを得可しとの説は他の絶對的に之を爲すを得

ずとの説と均しく不可なるものなりとす、人の性は有限的の範圍に於て之を改むを得可し、抑も人の性を構成するもの之を分て二と爲すを得む、(一)遺傳的のもの之を素質と云ふ、(二)自己の代にて構成するもの、先きの二學説は畢竟此孰れかを過重したる偏説のみ、事實に於て二者は並存するなり、而して共に、コムトの所謂「周圍」の影響を蒙らざる無し、唯其人に取りて直接たると間接たるとの別あるのみ。

コムト以後にありては、斯學を事とするもの大抵其部分を承繼して精なるものあり、先づ其生物學的方面を重んじ主として、此方面より入りしものを英のスペンサー、獨のシユプレ、露のリ、エンフェルドと爲す、彼の周圍ミリューの説を奉じ、盛に之を論せしものをテインと爲す、其科學説を奉じたるものリットレあり、英のステュアルトミル亦氏の實證哲學を喜び説の合する處あり、然りと雖、今日以後斯學の趨勢は遂に所謂心理學派の解決を待たざる可からず、夫れ社會は心理的實在なり、コムトの人道明に之を示す、然らば之れを解せんとするもの心理學的方法にあらずして復何ぞ、之れ豈に近年心理學勃興の爲めに然か云ふものならむや。然り而して今日之に屬する驍將を佛のタールド、フリーエー、ヂュルケイム、獨のジムメル、ラッツェンホーヘル、露

のノヴィコフ、米のギッチングス、ワード等なりとす。

願れば吾國維新以來泰西の文明を輸入してより以來茲に四十年、世界の新進國を以てして尙善く列強と雁行するあり國民の精力豈大ならずや、夫れ異なる文明は異なる特色を有す、夫々の長處を收めて以て吾が物と爲すを得るの國民眞に偉大なるを得可し、ワード曰く、多くの文明に曝露さるゝ、丈其れ丈社會は進歩すと、此謂なり、我國絶東に國して、先づ儒教に由りて支那の文明を輸入し、次で佛教に由り、印度文明の來るあり、爾來彼我の交通度を加へ克く其精華を吸ひ、此處に日本の文明成りしが、近年更に西方の文明を加へ來り、今や又撰甲執銳北方の強を挫くあり、夫れ露國は久しく學者の問題となりし處、スラヴ民族の文明に關しては未だ明ならざるものありき、將來ますます彼我の接近一層密となり、吾國民は其眞相を知るを得可し。世界に國するもの其數何ぞ限らむ、然かも異なる文明を吸收するの多き吾大和民族の上に出づるものあらむや、此好個の地位にありて、國運の將來を定むるもの夫れ斯學にあらずや。

## 傳記

オーギュスト・コムト (Auguste Comte) 詳しく言へば (Isidore Auguste-Marie-François-Xavier Comte) の傳記は之を四期に分つを得可し、以下逐次之を述べむ。

## 第一期

コムトは一千七百九十八年一月十九日佛國南方の都市モンペリエーに生る、父は其地方の稅務官たり、父母共に熱心なる加特力教徒にして王黨たりしが、其子の性抗拒的なると夙く膝下を辭して他に教育を受けしとの事は之に其影響を及ぼす事充分なるを得ざりし、九歳にして、モンペリエー學校の寄宿生となり、既に學業に熱心にして諸校規は之を無視するを以て聞ゆ、此處を以て教授は之を賞し監督は之を處罰しぬ、十二歳にして學校課程を終へ、校長の勸に従ひ更に數學を修め其進歩の著しき四年ならずして高等學術學校 (Ecole Polytechnique) の入學試験に最優等を以て合格したりぬ、併し此校入學生規定の年齢は十七歳なり、由りて一年間母校に止まりて、舊友等に師として數學を授けぬ。

翌年學術學校に入り、其卓越せる才能は大に師友の敬愛を受けしに居る事二年、教師の一人に對し同盟反抗を試みしよりして校を逐はれぬ、此處に於て彼の仕官

の望は絶えぬ。

歸國して留る數月、地方生活に堪ゆ可くもあらず、巴里に赴き奮闘的生活を爲さむの念は一日も去らず、雙親の止むるをも聽かずして都に出で、數學の私塾を開きて僅かに生計を営みぬ、高等學術學校教授・ポアンソ、並にツ、ブレイン、グイユの二人は共に彼が學才を認めて親交し、其周旋に由りて幾多の門生を得たり、彼はフランクリンを以て其理想としたるにても其状態を知るに難からず、實に彼はフランクリンよりも層一層の困難と戦はざる可からざるものたり、人あり彼をカシミル・ペリエーに薦めて其秘書たらしむ、然かも其職の意に満たざるあり、居る事三週日にして去てサンシモンに赴く、實に一千八百十八年なり。

### 第二期

第二期はコムトがサンシモンと生活を共にせしに初まる、此二人の交通は六年間續きたり、コムト初めや其秘書たり次で其門生となり、更に其協力者となり、遂に其友となる、其初めやコムト非常の熱誠を以て之に對し、次で尊敬となり、遂に其説の反對劇甚を加へて極に達するに及びて分るゝに至る。

二人者の關係に就ては世間説く處往々牴觸する處のものありと雖、實證哲學大系の學説に關しては、コムトはサンシモンに負ふ處無し、併し其知識をして斯かる傾向に至らしめしはサンシモン與つて大に力ありと謂はざる可からざるなり、年代の上よりすれば、サンシモンはコムトに先てり、然かも科學に對する知識は缺乏せり、コムト在來の教義に慊焉たらず、深く歴史を讀みて熱誠の情火炎々たるに當り、己れと思想を同じうせるの人に接す、豈に風馬牛相關せずとせむや、然かも此人は全然社會新組織に關しては誤れる見解を爲しぬ、由りて一八二二年コムトが科學の上に基礎を定めて、以て社會進化の理法を示せる「社會新組織に必要な事業の案」(Plan des Travaux nécessaires pour réorganiser la Société)なる論文を公にするや、サンシモンとは遂に學術上、敵とならざるを得ざりき。遂に一千八百二十四年兩人の交は公然と破れぬ。

### 第三期

第三期は彼が實證哲學大系を構成せし時なり、而して之は一千八百二十五年を以て初まる、蓋し前年の書は唯社會進化の理法を説きしに止まるが、未だ實證哲學



に至らず、此年に至り「科學及び學者に關する哲學的考案」(Considérations philosophiques sur les Sciences et les Savants)の著あり、此二論文に由り、總ての現象は悉く政治と雖、不變の理法に従ふ事、又人類思想の三大時期共に相當して社會活動の三大變化のある事業を示すあり、之に基きて彼の大著成りしなり。

彼に取りて此年は更らに記憶す可きものたり、此年を以てカロリン・マ・サン(Caroline Massiro)なる娘と結婚したり、其曲の孰れにあるやは局外者之を明かにするを得ざれども、家庭の和樂を見る能はず、遮莫、此結婚に關しては、初め反對したりしが、遂に止むを得ず之を容るゝに至りぬ、然かも、コムトは彼等の要求を容れずして、宗教的儀式を斥け通常儀式に由りぬ。結婚後其生計は依然數學教授に由るあるのみ、結婚當時は僅かに一人の弟子ありしのみ、次で幾多の貴族子弟の入塾すとの事なるを以て彼は其所有金を果して之れが爲めの器具を購ひ新に大家に移りしが、來る可きの人々遂に來らず、一人の寄宿生も之を家に歸らしめ自からはさゝやかに居を移しぬ、生計の困厄甚だしく時に心ならずも小論文を書して之を補ひぬ。

一千八百二十六年四月に至り、彼が久しく考慮したりし大體系は漸く熟して組織成り、之を前後六十二回の講義を以て其私室に講せむとの廣告を公にしたり、世の人士は未だ世に知られざる年少哲學者が、總ての科學の哲學を講じ以て精神勢力を改造せんとするが如き大事業に驚きぬ、其聽講者の中にフムボルト、ポアンソ、ツブレイン、グイユ、モントペロ、カルノー等、當時有名なる人士のあるを見て更に驚きぬ。

此大事業は其れ丈に於てさへ絶大の勢力を要するものなるに況んや生計と諸種の困難と闘ひ、又妻と爭論の止まざりし彼が如何計り其精力を傾倒したるかは察するに難からず、果然講義を爲す事三四回にして急に癡狂の襲ふ處となり、之を止めざるを得ざるに至る、遂に癡狂院に入りしが此處にあるは徒らに彼の病勢を盛ならしむるに過ぎざれば、氏の妻は變を聞きて來りし母と共に家に歸りぬ、其病院を去るの日、病院に於て一の滑稽劇の演せらるゝあり、先に述べしが如くコムトの結婚は宗教儀式に由らざりしが、彼の雙親は今回の事件を以て、之に基くものと爲せり、遂にコムトを説伏して病院内に於て更に宗教的儀式を以て結婚を行はし

めたり。

家に歸りしより病益々愈え六週日の後には最早患ふるに及ばずなりぬ、然かも此事ありてより以來、精力は著しく疲れ、自身亦曩時の元氣を回復する能はずして爲す無きを覺りセーン河に身を投じ死せんとす、水夫の救ふ處となりて果さず、此劇動は彼の精力を喚起したり、想ふに其血行に新刺激を加へしによるか、後此事を大に悔ひ之に由り其妻を憂へしめしを悲みぬ。

一千八百二十八年に至り、中絶したる講義を再び開始したり、此度は其居宅にして聽生の中には、大幾何學者フリーリエト、國手ブルッセイ、其他例のヅブレイン、ウィユ、ボアンソーあり、此度は遂に之を終りぬ、一千八百三十年其體系の第一巻を出版したり、併し第二巻は、當時商業界の危機の爲め一千八百三十五年に至り漸く世に出でぬ、最後の第六巻は一千八百四十二年を以て出でぬ。

彼は此くの如くにして、一千八百三十年より同四十二年に亘る前後十二ヶ年の星霜を費して其大著「實證哲學大系」を完成したり、其間に於ける諸方面の苦心勞力言ふ可くもあらず、此處を以て彼を尊崇するの後學は口を一にして曰く、よしや彼

の學説に反對の意見の人と雖、彼の此熱心には大に感服せざる可からず」と。

彼の一千八百三十年の後、幾くも無くして、彼は國民隊に加はるを否み拘留三日に處せられぬ、彼其理由を述べて曰く「法律は佛蘭西が自ら設けし政府を防禦せんが爲めに國民隊の制定せられしを示す、若し之れが單に秩序を保持せんが爲めとならば、余は之に與るを辭せず、併し政治上の鬭争に參與するは、拒む處なり、余は決して暴力に訴へて政府を攻撃せざる可し、併し余の精神は共和黨にあるが故に、余にして實際當路の人たりしならむには必らずや攻撃したりしなる政府をば、余並に他人の生命を捧げて迄も防護せん事を宣誓するは能はざる處なり」と。

一千八百三十三年に至り高等學術學校に一職を得、且つ又私立學校に數學教授の口を得たり、此くして其生計も漸く寛になり、此後數年間は一千フランの收入を得たり、在來彼唯一の休養は永き散歩にありき自から名けて「哲學的散逸」(Flânerie philosophiques)と云ひぬ、此時以來、新に興味を感じたる音樂に耽るを得、伊太利歌劇に赴く事尠からず。

彼は其初年の頃には非常に讀書し記憶力に富み、英、伊、西の書籍を自由に讀みた

りしが、後其體系を案するに至りてや全く此事を断ちぬ、既に是等のものは材料となりて其組織中に入りしなり。リットレ氏の製作法を示して曰く「彼は問題を一語をも書せずして黙想したり、一般概念より初めて大部門に至り次で細節に及ぶ、此全體よりして小目に及ぶの勞作終るや彼は其書成りしとしたり、之れ實に然り、蓋し、此くして彼の坐して筆を取るは、曩時の思想は滾々として出で來り筆之を書するに暇あらず故に其書を書き終る事極めて迅速なり。

一千八百四十二年は彼に取りて二重に記憶す可きの時なりき、一は其哲學大系の完成せると、一は夫妻同棲の生活を終りしとにあり、其曲二人の孰れにあるやは之を知る能はず、諸々の事實に徴するに、二人の間に幾度か劇烈なる喧嘩のありしは疑ふ可からず、畢竟世界觀の異なるものあればなり。

彼は「實證哲學體系」の出版を以て古今の大思想家の中に列するを得たり、併し之に由り其競争者並に幾多の教授神學者等の惡みを受け遂に彼の職を褫はれぬ、由りて更に又數學教師として勞苦的生活を求めざる可からざりき、此悲む可き打撃を和げむが爲めに、三英人即ちグロート、レーク、カリー及びモンヌウオースはスチュア

ートミルの紹介に由り一ヶ年間彼に曩の職務俸と同格のものを送らむと申出しぬ、思ひらく一年の終りには、彼は復職するか、さなくば方向を他に變ずるならむと、一年は過ぎぬ、彼の再選は復び斥けられぬ、彼初には之を苦とせざりき、己を尊敬する者より補助金を受くるは當然の事とせり、然かも英國の人士は之れと見解を異にしグロートは更に六百フランを送りしも補助金繼續の事を辭しぬ、コムトは之に對して激怒し彼等は當然其爲す可きの義務を果さずと罵りぬ。

## 第四期

此時に當りて、彼の生活に一轉機を與ふるの事起りたり、一千八百四十五年クロチルド、ヅグー夫人(Madame Clotilde de Vaux)に初めて會ひしが、兩人の寡居的生活に著しき類似ありたり、夫人の夫は犯罪の爲め生涯船役に服せざる可からず、由りて道徳上は自由なるも法律上之れと關り、然かも夫の行跡の爲め日影者たるを免れず、コムトも亦之れと同様に、妻とは法律上夫婦的關係にあるも事實に於て共棲せず、此くして兩人は法律上結婚するを得ざりしかども、純潔なる友情を以て互に慰藉せり。然かも此交情は久しき能はず、夫人は一年ならずして死しぬ、然かも彼の夫

人に對する切愛の情は依然として其生ける時と同じく彼の所説の人の主觀的不死を事實に於て示したり、彼の後年は絶えず、夫人に頌歌を爲すを以て事としたり、毎週必ず其墓に參し日々夫人に祈を捧げ其加護を求めぬ。「實證哲學體系」はサンシモンの智的方面の刺激に由りて之を初めたり、今や夫人の愛的刺激に由り更に他のものを出さむとす、其愛を基とせる人道教なるもの此成果にあらずして何ぞ。

「實證哲學體系」を完成する迄は其方法は客觀的なりき、然かも此度は主觀的方法に轉じぬ、彼は或假定に基き其を客觀的事實に訴へて證明するに暇あらずして之れより直に演繹して説を立せんとす。蓋し彼晩年獨身の生活を送り默想に耽りしものから其臆説とせる處、躍如として腦中を往來し、復疑ふ可くもあらず、由りて成りしもの「實證政治學體系」(Système de Politique Positive)四卷之れなり、第一卷は一千八百五十一年に第四卷は一千八百五十四年に出でぬ。愛を基とせる人道教を説く詳なり。

コムトの哲學體系と政治學體系とは齟齬する處あり、由りて其哲學説を奉ずる

ものにして之を斥くるものあり、然りと雖、之れ亦彼の理想的國家を示せしもの、彼のプラトーンの共和國等に比して優る萬々なりとす。

彼の大著は此二種に盡く、其他の小著ありと雖、概ね此中にあるの説を述ぶるに外ならず、書目は擧げて著書の中にあり。

一千八百四十八年政治界の風雲頗る急なるや實證會を設け、新革命に於ける勢力一千七百八十九年の革命に於けるジャコバン俱樂部の如きものあらしめんとしたりぬ、此目的は遂げられざりしが、其哲學弟子集り來り遂に一の教會を形成したり、一千八百四十九年、五十年、五十一年に於て三度 Palaisroyal に講義を爲しぬ。

一千八百五十七年癌腫の襲ふ處となり、九月五日平穩に死したり。時に年六十歳。

コムトは人生を中心として其説を立てぬ、故に其哲學に光明あり其説く處に生氣あり、彼の徒らに「毛髮剖析」の事を爲し本を忘れて末に走るの何人の用ぞ、然かも「其人の性格即ち其人の哲學」とならば、如何ともする能はじ、余も復何をか言はむ。(以上主としてリッヴィスに據る)。

著書

コムト自身の著書を擧ぐれば左の如し。

- 一、實證哲學體系 (Cours de philosophie positive, 6 Tomes, Paris 1830—1842, 5<sup>me</sup> Edition 1893—1894).
  - 二、實證政治學體系 (Systeme de politique positive, pu traité de sociologie i nstituant la religion de l'humanité, 4 Tomes Paris, 1851—1854).
- 此中に以前の著書を含む、自三至八、之れなり。
- 三、評論と欲求との一般的分離 (Séparation générale entre les opinions et les desirs, 1819).
  - 四、近世全體の概評 (Sommaire appréciation de l'ensemble du passé moderne 1820).
  - 五、社會新組織に必要な科學的作業案 (Plan des travaux scientifiques nécessaires pour reorganiser la société 1822).
  - 六、科學と學者との哲學的考察 (Considérations philosophiques sur les sciences et les savants, 1825).
  - 七、實證學者曆 (Calendrier positiviste 1849—1860).

八、實證學者文庫 (Bibliothèque positiviste 1831).

九、實證的精神の論文 (Discours sur l'esprit positif Paris, 1844).

十、實證論總論 (Discours sur l'ensemble du positivisme, Paris 1848).

十一、實證學者問答 (Catechisme positiviste, ou sommaire exposition de la religion universelle, Paris 1852, 5<sup>me</sup> Edition 1890).

十二、守舊派に告ぐ (Appel aux conservateurs, Paris 1855).

十三、主觀的總合一名人道に本來の概念の普遍的體系 (Synthèse sur l'écriture, ou système universel des conceptions propres à l'humanité vol. I, Paris, 1856, 2 Ed. 1878).

是は次の事を含む。

十四、實證的論理體系 (Systeme de logique positive ou Traité de philosophie mathématique).

コムトの書翰は左の如し。

一、ツァラーに與ふるの書 (Lettres d'Auguste Comte à Valat. Paris, 1877).

二、スチュアートミルに與ふるの書 (Lettres d'Auguste Comte à J. S. Mill Paris 1877).

三、コムトの遺言狀並に之に關係ある文書 (Testament d'Auguste Comte avec ses documents qu'il

pattechant, Paris, 1884).

コムト著書の翻譯並に梗概に關しての書は英獨に數種あり左に掲ぐ。

1. Miss Harr, Martineau—The Positive Philosophy of Auguste Comte, freely translated Scamlens, London 1853, 3<sup>rd</sup> Ed. 1893.

2. J. A. Kirchmann—German Translation. Eble-Heidel, 1883—84.

3. The System of Positive Polity 1875—77.

其傳記學說の大要はバルト「歴史哲學」第一卷、リッウイス「哲學史」第二卷、大英國百科字典中モーラー「コムト」編及びフヂング「近世哲學史」に於て之を知るを得可し。

コムトの學說に關しての後人の著書の一斑を示せば左の如し。

1. Littré—Auguste Comte et la philosophie positive;

Paris, 1863, 3<sup>rd</sup> Ed., 1877.

2. ————Principes de Philosophie positive

par A. C. Paris, 1868.

3. Robinet—Notice sur l'oeuvre et la vie d'A. C. Paris, 1860.

4. E. de Roberty—A. C. et H. Spencer, Paris, 1894.
5. F. Slengry—da Soeologie chez A. C. Paris, 1900.
6. dévy Bruhl—da Philosophie d' A. C. „ 1900. (white Eng. trans.)
7. Sonner—Der Positive Philosophie A. Comte's, Berlies 1886.
8. Uaximilian Britt—Der. Positivismus nach seiner ursprünglichen Fassung dargestellt, begetheilt.
9. Hermann Gruber—A. C., eter Begründer des Positivismus. Preiberg 1/2, 1889.
10. Dietz—Die Probleme im Begriffe der Gesellschaft bei A. C. Jena 1891.
11. Waentig—A. C. a. seine Bedeutung für die Entwicklung d. sozial wissenschaft, Deip. 1895.
12. H. Spencer—Classification of the Sciences, dond, 1864, 2<sup>nd</sup> Ed., 1871.
13. E. Caird—The Social Philosophy I. Religion of A. C. Glimgon 1885.
14. J. S. Mill—A. C. und Positivism.

其詳細なるものは、ユーバーウエツヒ「哲學史」第四卷、バルト「歴史哲學及びブスタイン「社會問題」第一版、及び第二版」にあり。

## 第一篇 本論

### 實證哲學

#### 緒論

#### 第一章

#### 本書の目的の説明——實證哲學の本質 及其重要に對する見解

凡そ哲學體系の概觀を行ふに當りては、其如何のものに由らず、今建設せむとする教義の概畧か若しくは、既に建設せられしもの、約説に過ぎざる可し、前者に比して後者が一層の價值あるが、前者は又其當初よりして其處理せんとするなる主題の特色を明にするを以て尙ほ重要のものたりと爲す。今研究せむとするが如き其範圍の廣漠にして不確なるものありては之を出來得る限り明ならしむるの要を見る、由りて今本書を成さしめし考案に就て先づ一瞥を試みむとす。

實證哲學の眞正の價值並に其性質を知らむが爲めには人類心意が全體として

の進歩的徑路を瞥見せざる可からず、如何の思想か其由來を明にせずして之を知るを得可き。

人智の發達を總ての方面よりして又總ての時代を通じて研究すれば、茲に其根本法則を發見す、曰く、吾人の主要なる思想は當然三時期を経過せざる可からず、神學的即ち虚構的、形而上學的即ち抽象的及び科學的即ち實證的之れなり、換言すれば、人心は、其本質上、究理に際し進歩の時期に應じて夫々の三方法を行ふ、其方法の各者は根本的に相違し、或は相兩立せざるものあり、即ち神學的方法、形而上學的方法及び實證的方法之れなり。此に於て三種の哲學生じ、各自他を拒斥す、第一のものは當然人智の出發點なり、第三のものは、其確定せるもの、而して第二のものは、單に過渡期のものに止まる。

神學的時期には、人心は事物の本質、總ての成果の期成原因並に結局原因(即ち其紀源と目的)換言すれば、絶對的知識を求め、總ての現象を以て超自然的事物の直接行動に由り成されしと爲す。

形而上學的時期は、之れ唯第一のもの、變態に過ぎざるが、彼の超自然的事物を

云はずして之に代ふるに、抽象的勢力、眞實體（即ち人格化せる抽象なり）を總ての事物中に存在すとし以て、總ての現象を生ずるを得とす。故に此時にありては、現象を説明すと爲すものは、唯夫々の相當の實體に參するとの事に外ならざるなり。

最後に、實證的時期に至りては、人心は、絶對とか、宇宙の始源、其歸趣若しくは、現象の原因如何に關するが如き無用の研究を止め、其現象の繼起並に類同に關する不變の關係を知らむとす、其知識の手段とする處のものは、推理と觀察とを適宜に結合したるもの。此に於て事實の説明と稱するものは、唯或現象と或一般事實との間の連結を附するに止まる、其數に至りては科學の進歩と共に減退し來るなり。

神學的體系は、是迄假想したりし許多の神々の諸種の行動に代ふるに、一の實在の神意的行動を以てするに及び其完全の極致に達し、之と同じく形而上學的體系の終局に至りては、其初めに想像したりし夥多の實體に代ふるに、一大實體（即ち自然）を以てしぬ、同様に又、實證哲學の究竟的完全は（若し斯かるものを期待するを得可くむば）、總ての現象を以て、或普通事實例へば重力の如きもの、特殊の方面と爲すにあり。

凡そ如何なる科學も、實證的時期に達せるものとして、他の二時期を経ざるもの無し、其最進歩したる科學と稱するもの皆之を證するを見る。

個人心意の發達は之れ一般心意の發達を示すものなるが、各自内省すれば、幼年時代には神學者たり、少年時代には形而上學者たり、而して壯年に至りて自然哲學たるを知らむ。

此事實に事實に於て然るのみならず、理論上又其然るを見る。就中最重要なる事は、常に或學說のあるありて吾人の觀察したる事實を之れに參するを得せしむるにあり、蓋し人智の初期にありては、人々は事實の觀察よりしては到底學說を建設する能はざるの事と連關す、もとよりペーコン以來眞正の知識は皆觀察せられたる事實に基くのものたらざる可からざるは、幾度か繰返されたる處なるが、人智の初期に溯れば、然らざりしを見る、學說は悉く觀察せられたる事實に基かざる可からざるが事實なるが、又同様に事實は或學說の指導を待たざれば觀察せられじ、斯かる指導無くば、研究せんとする事實は次第無く效果無きなり。

此く學說を構成せむが爲めに事實の觀察を要し、而して又事實を觀察せむが爲



めに學說の存在を要し人は循環的事實の中に彷徨す可かりしを神學的思想の自然に生出したる事に由りて之を脱するを得たり、之れ人類初期に於ける神學的性質の根本的理由なり、此事神學的哲學が人心の極初期に全く適合せる事に由り確證せらる、蓋し實在の本質、現象の紀源並に其歸趣の如き最も到達し難き諸問題が原始的時期に先づ生じ、却て身邊のものは殆んど眞面目なる研究の價值無しとして斥けらるゝとの事は注意す可きものと爲す、其然る所以は固より明白なる事蓋し人は其初期に在りては、其智力の如何程迄なるやを知る能はず、其能はざる處のものをも之を得むとす、此時に當り彼の實證哲學の如き、いかで容れらる可き、其徒らに現象の理法を攻究すとの事遂に人心を惹くに足らざるなり、實用的方面の刺激無からざる可からざるなり、彼の占星術や鍊金術の如き實用的意味を以てしてのもの先づ生じ其れが刺激となりて後實證科生じたり、之と同じく神學的哲學生じ先づ人の欲求せむとする處に應せんとし、其れよりして實證哲學を生せしむ、然かも兩者の懸隔せる事の甚しき其中間を爲すものを要す形而上學即ち之れなり。

以下實證哲學の本質を考察せむ。

既に述べしが如く、實證哲學第一の特質とする處は、總ての現象を以て不變の理法の下にあらしむるにあり、由りて吾人の爲す可き處は、是等のもゝ原因如何を知らむとするの無用なるを知り、是等の理法を精確に尋ね且つ出來得る限り其數を減退せしむるにあり、事物の原因を尋究するも其期成的たると究竟的たるとを問はず吾人何等の解決を得る能はざるなり、吾人は唯々現象を分析し其間に行はるるの理法を明にするを得るのみ、例へば天體の運動を説明して引力の作用に歸するが如し。

學問の種類に由り實證的時期に到達するには夫々前後あり、其性質の普遍、單純及び他の部門より獨立なる事多大なれば益々之に達する事早し、故に天文學は最も早く、次に地球物理學、次に化學、最後に生理學なりとす。

此く天文、物理、化學、生理の四大部門を述べしが、更に一部門の殘れるあり、社會現象即ち之れなり。之れは生理の中に包含するあるも當然之れと分る可きもの、蓋し最も重要、困難にして最も多く他の學科に憑依しあり、由りて最後に來る可きものなりとす、故に神學的、形而上學的研究が他の部門を去りし後にありても依然

として此部門文には止まるあり、此欠陥を充たして初めて實證哲學完し之を社會物理學と云ふ。之れ本書の主として論せむとする處なり。

もとより此新學問を直ちに其完全の状態にて示さむとするは無謀の事なりと雖、他に存せる實證性は又此中にも之を見るを得可し、此くして五大部門悉皆整頓し皆實證的方向にあるを見る可く、よしや其を進むるあるも其は唯其を完からしむるに止まり其性質に於て缺くる處ある無きなり。

以上は之れ本書の特殊の目的なり其二次的、一般的のものは次の如し、曰く諸科學に由り遂げられしものを檢し以て皆根本的に別のものにあらずして、皆同一の樹幹よりして出でしものなるを示すにあり、之れ即ち實證哲學を唱へ既成の實證的科學を大觀せむとする所以なりとす。

今諸々の自然科學の説明に入らむとはあらず、之れが爲めには人は絶大の知識を要するのみならず、又現問題に無用なり、蓋し吾人は實證科學を論せんとはあらず、實證哲學にあればなり、之れが爲めには其根本概念を知れば足る即ち根本的科學が夫々實證體系に於ける關係如何となり。

此二目的は異なれりと雖、又分つ可からざるものあり、一方には社會科學の基礎無くしては實證哲學ある能はず、之れ無くば、包括的たる事を得ざればなり。而して又他の一方には、社會學は社會より複雑の度の尠くして、又社會に關係を有する先進的事實の理法を知るに非ずむば、之を研究する事能はざるなり。

吾人の研究は此く特殊研究の細節に入らむとにあらず、古は人總ての學問を研究したり、學として亘らざる處無し、今の人は特殊のとなれり、之れ不可とにあらず之に由りて進歩あるを得ればなり、然かも又此くの如くにして普遍的優勝に於ては古の人に譲らざる可からざるものあり、之れ今日の欠陥なり、之を補はざる可からず、之れ實證哲學の起る所以なり。

由りて茲に二種の學問を要す、一は夫々の學問を現存の儘に解し其精神を明にし相互の關係を確定し、由りて實證的方法を定む可し、他のものは、之を心得て各自其特殊のものに進む可し、此くして實證的時期に到達するを得む。

以上は實證哲學の精神のある處を明にしたり、由りて以下之れよりして人生進歩に及ぼす便宜如何を見むとす。

一、實證哲學の研究のみが、人心の論理的理法を明にする唯一の合理的方法なり、先づ之を分ちて、靜的と動的と爲す事之れなり、凡そ行爲として、此二者の孰れにか分屬せざる無し、其靜的方面とは、之れが解剖及び生理を云ひ之れが動的方面とは、人類の智力の行動並に其成果を研究するに外ならず、之れ即ち實證哲學の大目的とする處と全く一致す、斯かる事實を観察し初めて論理的理法を明かにするを得るなり、故に彼の妄心理學の如き唯人心其れ丈を取り其原因成果より分ちて之を論せむとするが如き神學的時代の殘形は之を捨てざる可からず。

實證哲學は、ペーコンの時代以來發達し來りしが、漸く優勢を占め來り形而上學者自身亦其學を事實觀察に基くと爲す、彼等は内外の事實ありとし己等は内的事實を研究すと云ふ之れ恰かも、肉眼が萬物を見るを得るが己れ丈は能はざると同様の妄なるのみ、或は云はむ、人の智は其情を観察するを得可し、兩者の腦髓中の中樞同じからざればなり。然かも之をしも科學的に觀んとは、其爲めに動かされざらむが爲めに外的のものよりを必要とす、若し夫れ知識が知識を観察するに當りてや更に甚しきものあり、觀るもの觀らるゝもの同一機關たり、之を觀んとすれ

ば其行動を止めざる可からず、止めざれば觀る能はず、此くの如き方法を以てしては心理學得る處無し、之れあらむとせば唯實證的方法あるのみ。

二、教育を更生する事。歐洲の教育尙ほ神學的、形而上學的のものを離れざるが之を打破し實證的のものと爲し總ての科學を以て一大樹幹より出でしものなるを明にせしめざる可からず。

三、此科學的普遍性の研究が夫々の實證的科學の進歩を助くるあり。今日の科學の分類は極便宜的のものにして必然的のものにはあらず、由りて其雙方に亘るが如き事は之れが別々の研究にては得可からず、デカルトの解析、幾何學の如き之れにして、之れが詳論に入らずとも、化學と生理學の如きは、相互密接に伴進せざる可からざるものなるを見る。

四、實證哲學は、社會新組織に唯一の鞏固なる基礎を與ふるもの、而して此事たるや、今日の最文明國民の在るなる批評的狀態を繼ぐものたり。夫れ社會の根底を爲すものは思想たり、換言すれば、社會は、人間所説の支配する處たり、由りて之にして、一致する處無からむか社會道は暗黒ならむのみ、彼ありて初めて之れある

を見る。今日の混亂は、大に社會に三種の不兩立の哲學の存在するに基くあり、神學的、形而上學的及び實證的之れなり、其一丈けなりせば、兎に角に統一を保持し得しならむも、悉く併立する故、今日の如かり、然かも、學問の傾向は實證哲學に赴くにあれば、總てを之に至らしめて、以て統一を附す可きなり。

吾人は吾人の知識を總べて教義の調齊的一體と爲さむとするなるとの事なるを以て、直に之を一法則の下に歸せむとするものなりと速斷する勿れ、宇宙は吾人の知識に由り解決し去らる可く餘りに複雑なり、吾人の知識をして究竟の處に迄至らしむるには餘りに其資料の狹隘なりと謂はざる可からず、よしや又之を遂行し得たりとするも、其れよりして生ずる價は左程のものにもあらず、併し兎に角其方向に赴きつゝあるは事實なり。

吾人は斯く教義の單一性を求むるに及ばず、其調齊的なれば足る、而して一方には、方法が實證的なるを以て一貫し即ち之れが一ならば可、此くして庶幾くば總ての學問を歸一するを得む乎。

## 第二章 實證科學の體統

科學の分類を行ふに當り、在來試みられしものは皆之を斥けざる可からず、蓋しペーコンやダレムブルの爲したるが如き皆任意的に人心の能力を分析したるものに基礎を置きしものなるが、實に吾人の能力の主要のものは、如何の科學研究にも與らざる無きなり、其他の分類も皆夫々の缺點の爲めに採る可きにあらざるなり。

其此くの如き所以のものは、在來諸學の進歩區々にして、或者は既に實證的時期に達せるに他のものは尙ほ神學的、若しくは形而上學的たるが爲めなり、今日に至りては是等が皆實證的時期となりし爲め、是れが科學的分類を爲すを得可きなり。其方法としては、動植物學者の如きものを可とす、即ち先天的に之を分たずして、其内容の研究よりして生ぜざる可からず、此くして分類にも實證的方法行はる。幾多の科學の相互依從の關係即ち其研究對象の然るよりして生ずる處の之れは、以て人間知識の體系の排列を定めざる可からず。

扱吾人の勞力範圍如何と云ふに、其中に二種あり、思辨並に行爲之れなり、前者は理論的方面にして、後者は實際的方面なり、吾人の今研究せむとする處は其前者に限れるや論無し、即ち諸現象の根本概念にして、相互連結に鞏固なる基礎を與ふるものを見んとす。吾人々類の行爲に由りて外界に加ふる力は微弱にして、到底吾人の要求を充す可くもあらず、其之を爲すを得るは、理論的に自然法を明にし其示す處に従ひて力を用ふればなり。科學と技術との關係は次の如くに約説するを得可し曰く、

科學よりして豫覺を生じ豫覺よりして行爲を來す。

併し茲に注意す可きは、今日一般の傾向とする科學を以て單に技術の基礎と爲すに止まるものとす可からざるにあり、凡そ學問は學問として研究して絶對的價値あり、此事即ち吾人學問研究の直接目的にして、一層高尚なるものなり、此事實を包括的次序に定むるの事即ち學問本來の目的とする處なるが、之れ實に人心固有の欲求にして之を實證的方法に由りて充す能はずむば、神學的若しくは形而上學的にても之を遂げむとするにて知らる可し、此くして科學の高尚なる歸趣する處

を知るを得るなり、若し然らずして、之を以て全然技術の手段と爲さむか、コンドルセーの言ひしが如く技術自身の進歩をも見る能はざるに至らむ、蓋し技術は其進歩を科學の待つなるに後者進まざれば、前者獨りいかで之れあるを得可けんや。更に一言の吾人研究範圍に關し附記す可きものあり。自然科學に二種あり、一は抽象的即ち普遍的にして其對象として有らゆる場合に現象を規定する理法を發見するにあり、他は具體的即ち特殊的又記述的にして時に狹義を以てしての自然科學と稱せられ是等の法則を現實の事物に適用するを以て其職能と爲す、前者が心的にして、吾人研究の對象と爲す可きもの、後者は之れ派生的のもの、みに生理學は論ずるも其れよりして生來せる動植物學は論せざるが如し。以上述べし處之を約説すれば次の如し。

- 一、科學は思辨的知識と實際的知識とよりして成り、吾人は前者を處辨す。
- 二、理論的知識亦分れて、普通と特殊即ち抽象と具體の二者となり、吾人は唯前者のみを研究す。

準備既に成りぬ、請ふ以下根本的科學の眞實の次序を定めむ。

抑も科學の分類たるや一見せる處に現るゝが如く容易のものにあらずして、如何程自然的に分類せんとするも、其中には、よしや任意的ならずとも多少は人爲的の分子を包含するあり、科學を全然其自然的次第に排列するは不可能の事に屬するなり。

科學は悉く之を二方法を以て示すを得可し、歴史的及び教義的之れなり、二者全然別のものにして、爾餘の諸方法は此二者を或度を以て混合したるものに外ならず、前者は其科學が人心に由り實際獲得せられし次第に従ひて且又其方法をも併せて述ぶるもの、後者は其科學の思想の體系を今日の進歩したる場合に於て、學殖ある人が其科學全體を改造するに際し、取る可きの次第を以て叙するなり、新科學は歴史的に攻究せざる可からず、蓋し此時に當りて爲さる可き唯一の事業は唯其科學の進歩に資したる諸種の材料を時代を逐うて叙するに止まればなり、然かも是等材料が漸く其學の全體系に關する處のものを示すに至るは蓋し材料漸く蓄積し、其科學進歩の結果徒らに是等を排列する處を以てしては、不適當なるが爲めなり、此を以て材料愈々加はりて人益々之を徒らに列ぬる事を厭ひ來る、教義的排

列の必要生ず、之れに由りて以て曩時の材料に新生命を與へ來ればなり。此くして教義的方法は絶えず歴史的方法に代りつゝあり、唯歴史的に研究せんとせば學問の材料際限無し、教義的方法に由り其體系のある處を知るを得るなり、由りて今日、普通の人は尙ほ克く往時の天才の爲し遂げし處を明にするを得、人或は教義的方法を以てしては、其科學の如何にして其現狀に到達したるやの次第を知る能はずとして之を非難するものもあらむも、此欠陥は歴史的方法にも免るゝ能はざる處なりとす、抑も或科學を歴史的に攻究すとの事は其進歩の歴史を知るのとは異れり、後者は之れ人生史の事にして此書の終篇に論せんとする處なり、實に科學は其緣起的方面の知識無くしては之を完全に知る能はず、由りて以下根本的科學の研究に當りても其由來明瞭なる時は之を説かん、社會物理學に於ても亦之れと同様なり、然かも歴史的方法は重要なものなりとは曰へ、其教義的研究とは別のものたるを忘る可からず、由りて單に歴史的研究にのみ固着すれば大混雜を來すあり、皆同一の割合を以て進みしにあらざればなり、由りて其紀源の前後如何に係はらず、他のものゝ知識を借りて説明に資するあり、例へば科學の體系に於ては、天文學は

物理學の前に來らざる可からざるものなれども、物理學の諸分派殊に光學の知識は之を豫想せざる可からざるものあり、併し大體に於て科學は簡單のものよりして複雑のものに赴くとの分類は科學自然の發達と一致す。

根本的科學其數六あり、而して之は七百二十の可能なる組合せあるを得可し、併し其中の唯一の合理的次序を見むとす。

科學分類の原理は、其對象とする現象に由り定まる、即ち其現象依從の關係に由るものにして、凡そ吾人の觀察し得可き現象は、數個の範疇に之を歸するを得、而して是等は後の範疇は前の範疇の示す原理に基き、而して其後に來るもの、基礎となる様に之を爲すなり、即ち現象の簡單のもの、換言すれば、其普遍性の大なる程、初に來るなり、凡そ最簡單なる現象程最普遍的なるは明にして、人間に最近き程、複雑のものたる事亦明なり。

吾人は自然現象が劃然として、無機體と有機體の二者に分るゝを見る、無論有機體は無機體に比して複雑のもの、即ち之れが彼に先ちて其研究に資する處ある可きなり。

此自然哲學の二部門更に細分せらる。無機體のものは、天體現象と地球現象とになる、即ち天文學、幾何學的と器械的、及び地球物理學之れなり。天文學は總ての學問中最簡單のもの最普遍的のものにして、他の科學の基礎となる、例へば重力説の如き萬般の科學此法則に従はざるもの無きなり。

更に進みて物理學に至りては當然分れて二となる、純正物理學及び化學之れなり、後者は前者に比して一層複雑にして、其知識に基くものなり。

有機的方面に於ても亦之れと同様の分類あり、即ち個體的と集合的之れなり、人によりては殊に此分類根本的なりとす、前者は生理學、後者は社會物理學なり、社會物理學を以て生理學の附屬と爲したるの人あれども、其は誤れりと爲す、其對象に於て異なるものあればなり。

此くして五個の科學の順次依從的關係に立てるを見る、天文學、物理學、化學、生理學及び社會物理學之れなり、天文學は最簡單の最普遍的のもの最基本的のもの、最人に遠きものを攻究し、社會學は最複雑の最人に近きものを攻究す、爾餘の科學は其間にあり、此くして科學の親子的關係明かとなりぬ。

此次第の原則は各科學自身の中にも亦同様に行はるゝを見る。

此等級は實に自然科學の諸部門が自然に生じたる順序と克く一致し、以て余の排列の自然なるを證するあり、實際に於て最簡單なる科學は最初に發達したり、天文學之れなり、以下之に由るのみ。

此事を明にして初めて人心發達の歴史を明にするを得るなり、或學問は既に實證的時期となれるに、他のものは未だ神學的若くは形而上學的時期にある所以のものは、其發達の次第に前後する處あればなり。

又此分類は諸科學完全の度を示すあり、即ち最簡單のものは最發達し、而して最複雑のものは最進歩に後る、社會學之れなり。茲に注意す可きは學問明瞭の度と其確實の度の別なる事なり、二者必ずしも相隨伴せず、故に三角形の總ての角の和は三直角に均しとの事は不條理なれども、明瞭たるを失はず、之に反して人は死すとの事は確實なれども、遂に明瞭に於て缺くるあり。

遮莫吾人の科學等級範式の最興味ある本質は、其が一般教育並に科學教育に資するある處なり。物理學者は天文學の知識無くしては其學を知る能はず、其他の

科學亦然り、而して社會學に至りては、爾餘の科學悉くの知識を要す、之れ科學教育の方針を定むるあり、而して一般教育は之に基くのもの故、其受くる處のもの説くを要せじ。

以上は教義に關しての事なるが、請ふ以下之れが方法に及ぼす處のもの如何を見んとす。

現象の調齊的のものは、同一科學の下に之を配合し不調齊のものは之を他に別ちしが故に實證的方法は同一科學にありては絶えず同一體形となされ、而して別のものには之を變態するあり、由りて其精神とする處は、總ての科學に通じて同じきも、其進行に至りては人に由り同じからざるものあり、故に或科學にありては觀察を主とするに他にては實驗を主と爲すが如し。

更に又一の忘る可からざるものあり、曰く唯に一般的知識を有する事の必要なるのみならず、之を其次第に従ひて研究する事必要なり、由りて複雑なる現象を處理するに先ちて簡單なるものに由り、理法とは何ぞ、觀察とは何の意ぞ、實證的概念の意義如何、將た又推論とは何ぞ等を明にせざる可からず、若し然らずして徒らに



雜駁の知識を以てして、例へば最複雑せる社會學に臨む何の得る處か之れあらむ。以上は即ち合理的、實證的、分類の必要を認めし四見解なりとす。

茲に一大省略のありしは敢て云ふ迄も無し、數學之れなり。是れ極めて必要なるが故に故らに之を後としたるなり、斯學は實に最初に來る可きものゝみ。

今日數學は其教義の上よりして之を推重するにあらずして、むしろ其が爾餘の科學の基礎を爲すの上よりしてなり。分れて二となる、抽象的、具體的之れなり、後者更に又一般幾何學及び合理的器械學となり、之は總ての自然哲學の基礎を爲し而して自然亦抽象的のものを基礎とす。

抽象的科學は之れ單に自然論理學を或演繹的次第に爲したるものにして、畢竟他の道具に止まる、之に反して具體的科學は他のものと同様、觀察に由れる自然科學なり。

數學を實證哲學の頭首に加へしは之れ曩の分類の原理を擴げしものゝみ、抑も幾何學と器械學は、最抽象的最簡單のもの、故に總ての首に置く可きなり、此くの如くにして教育を行ふ時に當りても此次第のある處を察し、之を行へば庶幾くは其

效果に於て失ふ處無からむ。

由りて科學の次第は、其自然的表現のものと相一致して次の如し。

數學。天文學。物理學。化學。生理學。社會物理學之れなり。

註、數學より生理學に至る五科學は、直接に社會學に大なる影響を加へざるに又其之に對する關係大體に至りては、既に之を知れるを以て、以下直ちに本論に入らむとす。

## 社會物理學

### 第一章 斯新科學の必要並に其好期

學問體統中に於て、他の五者は之を古來の哲學と分ち、科學として之を處理し其進歩の次第を究明するに難からざるも、獨り最後の社會物理學に至りては大に他のものと異り其困難の甚しきを見る、社會科學に關する學説は今日尙神學的形而上學的哲學と錯綜し、遂に永久此様を保持すとも思はるゝに至る、由りて余は次下極めて大膽に是等のものに關する無く全然新面目を呈せしむるあらむとす。

然りと雖、此社會學の未だ幼稚なる到底他の五者中の最不完全者の位にすらも至らしむる能はず、期する處は唯是が實證性を示し吾人の最渴望せる智的欲求の充足にあるのみ。今日の社會を見るに、全然混亂の様に入り經世の志あるもの顧みずして可ならむや、もとより此くの如き幼稚の學にありては學と術との疆界未だ以て明にする能はず、相混同を致すは數の免れざる處なりとす。此くして、神學的形而上學的哲學の衰亡の結果久しきに亘りての欠陥を補填するを得て、彼の過去三百年に亘りて徒らに鬭争したる政黨の無用なるを悟り之に全然新精神を輸入し來りて以て此争を終らしむるを得可し。

古人は秩序(Ordre)と進歩(Progress)の二者を以て氷炭相容れずと爲すも、近代の文明に在りては此事不可缺的條件にして、實に此結合は大困難にして、又苟くも純粹なる政治組織の主要の根源なりとす、抑も秩序にして全然進歩と適合せざるものは之を存續する能はず、又進歩も秩序を固定ならしむるものにあらざるよりは、之を遂ぐる能はざるなり、故に其一を採て他を斥けんとするは愚の極のみ、蓋し二者共に同一原理の二方面に過ぎざればなり、此くして秩序と進歩の二者は生物學に於

ける其組織と生命の如く分つ可からざるもの、實に彼は此よりして生出せるなり。吾が現状の困難とする處は、此二者が全然相對峙して互に容れざるにあり、以下の觀察は歐洲諸國一般に通じての事なれども特に佛國に關してのものなりとす。抑政治思想千態萬様なりと雖、畢竟此者の諸種の結合に外ならず、而して今日の社會は既に過去三百年の大争鬭の後を承けて、全然面目を一新せるものたるに係はらず、依然之に施すに在來の武器を以てして相對峙して下らず其結果として何等の得る處無きなり、政治界に於ける秩序の觀念は神學的及び軍隊的制度殊に其加特力教的及び封建的制度のものより生ず、余輩今日の見地よりしては社會科學の神學的時期を示す、之と同様に進歩の觀念は、純乎として消極的哲學より生ず、是は新教より發して其最終の發展を前世紀に遂げ、政治界の形而上學的時期を構成す、凡そ今日存在する政治思想必らずや二者其一に居る、一新事實生ずる毎に守舊派は社會秩序の保持を主張し改新を欲せず、反之、批評派は常に進歩を口にす、別に此二者を合同せる一派あり、然りと雖、其分子とせる處のものに於て既に存在せざるの長點は孰んぞ又此者に於て見出すを得可き、吾人先づ神學的政治及び形而

上學的政治を個別に檢し然る後強て之を結合せんとするもの、徒勞に過ぎざるを示さんとす。

今日、神學的政治は有害なりと雖、具眼の士は、近代社會の形成せられ漸く發展を致したるに際し爲したる之れが保護は看過せざる可し、併し又之れと同じく過去三百年に亘り之れが爲したる處のものは結局退歩的のものを致せるや明かなり、此くも知識並に社會の自然的進歩の趨勢に堪へざる此くの如きもの、いがでや社會秩序の基礎と爲すを得可き。是を歴史的事實に徴するに、此加特力制度並に封建制度の崩解せる所以のもの明かなるを得む、神學派にありては事實を證明するに個々の偶然的原因に歸し、或は神祕的解釋を試む、歴史に徴するに神學的並に軍隊的組織は、其當初より時を経るに従ひ漸く其社會組織を改むるあり、蓋し之れ社會進化の根本法則に照せば皆一時的性質のもの未だ以て基本的性質を有す可きにあらざるなり。

論理的見地よりして之を見れば、吾が社會再組織の問題は次の一條件に約説するを得む、曰く是れが實際的發展を完うするに當りてや常に全然其自身の原理とする處に基因するなる政治主義を合理的に構成するに在り。今日存するの主義は如何のものも之を完うするに足らず、皆其重要なる點に於て、幾多の矛盾を包藏す、故に政治の主要なる問題を矛盾無く解決するに足るの主義は間接に社會を再組織するに足るのものと見るを得む、此くの如くむば社會の幾多の思想を克く調和するに足ればなり。斯かる再組織個人心意の中に生せんか之を起點として社會の人民一般に及ぼす可し、蓋し其原理に於て異なる無く唯複雑の度の差のみなればなり、然り而して實證哲學が是に最適せるは後來見る處あらむとす。

此大論理的條件の完成は、就中神學的政治よりして期待し得可きが如し、蓋し其主義とする處は、其久しき應用に由り明瞭に定められ、又其要點とする處を充分に發達せる體系を整列するのみに止まりあれば、あらゆる甚だしき矛盾より遠かれ、るものと思惟して不可なからむ、此く其論理的齊一の、ある處他の進歩主義者の矛盾多きに比し其特色とする處なりと雖、併し實に神學的政治は、形而上學的のものに比し矛盾の度一層尠なりと雖、然かも尙ほ日々其根本主義と柄鑿相容れざるものを日々容れざるを得ざるを見る。是れ或主義が本來其本質に最相當せると

する處の一資質すらも有せざるもの、畢竟無益たるを證して餘りあり。抑も科學、工業及び美術の如きものに至る迄其發達は、歴史的に之を見て神學的及び軍隊的組織の回復す可からざる主要の原因たるや明けし、今日に在りて、神學的精神の眞正の復舊を防止するものは是等科學的精神並に工業的精神の發展にありと爲す、然り而して、今日の政府、學校に於て、是等科學及び工業の發達を防止せんとする者ありや事實は之に反す、ナポレオン、ボナパルトの如き身は守舊派の驍將を以てしても尙忠實に是等のもの、保護者たりしき、過去二百年に亘り幾度か名士は神學的形式に従ひて理性と信行に服従せしめんとしたりき、然るに思ひきや此時に當りても此く服従を爲さしむるの最高判官は依然理性たりき、此くして遂に此命題の矛盾的性質を證す。其今日に至るも尙其根據を止めあるなり、一層直接の矛盾は、此保守派に屬する門派が擧げて、其共同主義とする或根本的のものに直接反對を示せるにあり、今此學派の一般に承認する處は精神界の權力(僧)を俗世界の權力(俗人)に従屬せしめ以て加特力教及び封建制度の根底とする處を打破せんとするにあり、之に關しては、帝王は人民と相結びて改新派を爲し、而して一方には、僧侶

は己等の衰退を自認しあり、若し僧侶にして、舊組織を再現せんとならば、先づ基督教の廢弛よりして生じたる無數の宗派を結合するを以て其が第一の勤とせざる可からず、然かも此くの如き壯舉は、各國政府が宗教に對する至上權を把持せんとの念慮よりして互に下らざる爲め、遂に不可能に終りしなり。

更に進みて形而上學的政治を検するに、第一に注意す可きは、斯主義は全然批評的由て革命的たるにあり、蓋し彼の過去三百年間の消極的たる政治を支配せるもの之れたりしなり、其職とする處は、人心及び社會の當初の生長を指導せる組織を打破するにあり、換言すれば、唯次の實證學派の準備的學科たるに過ぎず、即ち秩序と進歩の二者を結合して以て革命時期を終結せしむるは此實證學派の天職たり、然りと雖、形而上學派も歴史上よりして之を見れば不必要とにあらす、之れありて初めて前後差等の甚しき二者の結合を得せしむるものなり。夫れ一の社會組織より他のものに推移するは必らず連續的に又直接なる能はず、常に過度時期として少くとも幾時代に亘るなる暗黒状態あり、而して其久しきに從ひ益々其改新は完全のものとなる、斯かる時代に爲すを得る最上の政治的進歩は漸を趁うて舊組

織を廢弛するにあり、斯かる間に新組織の要素は政治的制度となりて發現す。世界歴史の初期に在りて、革命的行爲は唯正當の政府組織を全然非認するの事と相連關したり、是よりして、此批評派なるもの、在來爲し遂げたる行動及び其が近代社會の組成に對し反對する處の防遏を知るに難からざるなり、形而上學的精神は評批的及び反神學的主義の構成を指導するに必要なものたりき、蓋し舊來の組織を打破せんには大勢力を要したればなり、然かも其結果や慙む可きものあり、即ち遂に、其本來の目的として出で來りし政治制度の設立を爲さずして却て之を妨止するに至る、夫れ此くの如くむば此主義も最早死するの時到れるなり、蓋し其目的を遂行すればなり、吾人は知る之に次で更に新哲學の生出す可きを。革命的政治の精神は、其が激勵する一時的行爲を轉じて以て永遠的のものたらしむるにあり、例へば舊來の社會組織に抗する結果政府を以て悉皆社會の敵と爲し之をして決して社會進化に參與する無からしめんとす、即ち唯警察官的の職務に止らしむるにあり、然かも今や却て此事が更に又妨害を加へるあるは嘆ず可きなり、蓋し幾世紀を経て此第二の形而上學的のもの勢を占めしが、其が前者を仆さんが爲めには

又更に之に代りて或鞏固なる勢力(少くとも近眼者流の)を有し來りたればなり。

此教義を一層特殊的に檢するに、其根本とする處は、自由討究即ち良心の無限的自由に分ならず、此點は是れ此革命的教義の集注點、如何の社會的階級の人も之を唱へ又其他の點に於ては反對せる人々も等しく之を可とす、其勢の猛烈なる殆んど抗す可からず、彼の神學派の人と雖、己が主張する教義を判斷するの最高主權は、形而上學派の人と同様、其理性に訴ふるあるのみ、雖然自由討究權なるものは神學的哲學の衰滅に従ひて生來せるものにして唯、次の實證哲學の出現の豫備的のもののみ、其示す處の範式は未だ以て絶對的のものたる能はず、蓋し既述の如く過渡的時期にして其範圍の如きも未だ明なる能はず、唯消極的に在來の舊主權より脱出するとの消極的作用のみ、併し其中に存在する潛勢力は遽に其が革命的企圖を全うせしめ遂に新組織の原理を討究する事を得せしめぬ、此根本原理とする處のもの明にせられ初めて個々のもの、關係を知るを得可し、亦之に至る迄は幾多の説く處のものも、亦單に個々の思想と解す可きなり。

此教理は缺く可からざるものなるが、未だ以て有機的原理と稱す可きにあらず

加之、社會の再組織の上に於て妨害を致すに至る、抑も此時期たるや曩に述べしが如く自由討究の精神の盛大なりしものなるが、此くの如くにして在來のものに對し絶えず疑問を發し久しく決する處あらざらんか遂に社會秩序を見る何れの日ぞ、學問中最複雑と稱せらるゝ此社會の事は最高知識の人にして初めて解釋するを得可きを尙劣等の少數の人に任す可しとなすか、否々、人々は皆他人を以て能力を缺くと爲して己を以て充分之れあるものと爲すが通常なり、其れ此くの如し、由りて人々自由の説を持して下らず遂に大混惑を來さん。吾人は知る、或根本原理とす可きものを定め、其範圍内に於て人々自由討究を行ふ可きを、此くの如くにして初めて其社會に秩序を見るに至る可きなり。

以上自由の教理に次で重要なる教理は平等の其れなり、是れ良心の自由の直接の成果にして最根本的のものとす、是れが比較的たる可きに絶對的なるを唱へ、唯舊來の組織を打破すれば足る可きを永遠のものと爲しぬ、此くして舊組織を破り得しも、更に其爲めに新者を得せしむる能はず、それ奴隸廢止以來人には絶對的の權利あり、然かも是れ唯根本的のものゝみ、先づ第一に人は其體軀に差等あり、然か

も之を其能力相同じからざるに比す可くもあらず、然るを今強ひて絶對的平等を唱へんか、斯かる差異を差異として存せしむる能はず、社會は遂に暗黒の裏に沒了せんのみ、抑も亦文明進歩の大敵とこそ謂ふ可けれ。

良心の自由よりして生ずる第二の成果は人民の主權之れなり、而して前者と同様舊組織を破りて新者の準備を爲しぬ、新者の完成する迄は一時的には、人民の欲する儘に存廢するを得る制度を設くるにあり、然かも其事を遂行せんか、又其が革命的性格を示すものあり、即ち先に帝王の有せるを耻として人民に有せしめ、彼をして之に従はしめむとす、是れ畢竟同事實の反覆に過ぎざれば、如何の再組織にも反對す可ければなり、即ち到底永遠的の價值を有すべきのものにあらざるを見る。

此批評的教義の革命的精神のある處は、國際的關係を見るに及びて愈々明瞭を加ふ、古代に行はれし精神界の勢力地に委してより、各國は皆獨立の風を爲し是等を總ぶるのもの無し、是れ即ち良心の自由より生じたる結果のみ、此くして更に新結合の行はるゝ迄は、此批評的教義の結果の別的態度を執る可く、其間は此教義絶對的價值を有したるのものと見る可きなり、然かも今日更に是等が新結合漸く成

らんとせるに當り、此批評的教義が過渡的作用として國々の分別を爲したるに止まらで、更に之を進めんとすれば、是れ遂に社會を混亂せしめ、復び舊時の陋態を繰返すに過ぎざるなり。

要之、形而上學的教義の自家矛盾せるは神學的のものより更に甚だしきものあり、其未だ充分に斥けられざる所以のものは、其成形の之に比して新しきと、批評的職能を爲すには之にても足ればなり、然りと雖、其全體が當初の目的と相反するが如くむば、如何の教義と雖、拒斥せざる可からず、而して之れ實に形而上學的教義に於て之を見る。是れが最高潮に達せるは、第一佛國革命時代にありとす、即ち之を以て社會再組織の原理と爲しぬ、然かも實は之れは如何の社會組織とも相容れず、近代文明の運動に對し最激烈に反抗するに至る、例へば彼のルソンの稱へしとせらるゝ社會原人の状態の如き實に氏一人の所説とす可きにあらず、時代と土地の別も無く、在來の革命的の形而上學者の等しく無意識的に口にせる處、此に由りて明瞭に結末を附せられしに過ぎざるのみ、今之に由りて社會を組織せんか、即ち人類原始の状態に復歸するなるを以て、克く社會を進歩せしむと云ふも實に退歩に

外ならず、彼の中世の宗教的組織に代ふるに更に不可なる希臘羅典時代のものを以てせんとす、抑も科學の進歩を致し分化の益々隆盛を進めたるは今日の事なり、然るを人類當初の單純的状态に歸らしめんとす、愚も亦甚しと謂ふ可きなり。

形而上學的教義が神學的のものより生來し之を變態せんとせるなるを以て、畢竟彼が之を辯護するの位置に立つは敢て恠むを須るざるなり、過去三世紀間に亘りて此派の改革者は擧げて、其を先進者よりも一層批評的態度に出づ可きを唱へながら、其據る處は舊組織にあるなり、即ち其新教義の根底とせる絶對權なるものも畢竟宗教的に神聖化せられたるものに外ならず、是れ丈は論議に由りても動かす可からずとなり、此くして遂には自然的宗教ナチュラレリリジョンの如きものを生じ、恰かも宗教は超自然的たるを要せざるが如し、今日の致命傷的の矛盾は實に此にあり、宗教的組織の必要を認めながらも之に必要な敷設を肯せざればなり、此點に於ては却て加特力教の之に優れるを見る、形勢此くの如くむば、更に第三の哲學の出で、之を救ふあらむとせば、何ぞ敢て之を阻むの權を有せむや。

以上は之れ精神界の事なりしが、今之を實際界に見るに又同様の現象を見る、即

ち其が封建制度を保持せんとするの事之れなり、抑も軍隊的精神は批評的教義と相一致するもの、如何の口實も以て其放縱なる行動を辯ずるに足らむ、例へば進歩せる國民が未だ進まざるに國民を義を以て制馭せんとするが如き之れなり、夫れ此くの如くむば社會は諸方に騷動を生じて止まる處無からむ、幸にして近代の文明には、曩時の軍隊的、神學的組織を回復せんと計りたる人を記憶に復舊せしめんとして怠らざるを見る。

今更に進みて政治の事を見るに此二派相争ひて容れず、一方が他を倒したりとするも僅に一時的に止まり、忽ちにして他の爲めに復び倒さる、此くして一起一倒交迭を重ねるもの之れ即ち兩者争闘の状態なりとす、實に一は社會に秩序を教へ他は之に進歩を授く、此くして未だ二者を包含するの哲學あらざるを以て、暫らく兩者を併存せしめて以て其偏するを止めしむ、而して新に出づ可きものは、神學的のものより一層有機的にして、形而上學的のものより更に進歩的たるを要す。

素より舊態の政治組織は、其時とは著しく異なる今日の文明社會の模範とす可くもあらざれども、將來革新されたる形式を以て出現す可き社會組織の本質を知

らんが爲めには、此研究は缺く可からざるものなりとす、批評的時代にありては之を更新したるものなれば、一層佳良のもの、生ず可きや論を要せず、此くして第三のもの、來る迄は、社會をして秩序あり、進歩あらしむるの手段としては、此批評的時代の組織亦必要なりとす。

今批評哲學に反對して、暇々を重ねるは無用の事のみ、蓋し之に由りて以て其材料を得ればなり、之に由りて社會再組織を得るの事、彼の後退的の神學的のものに優る、蓋し之は唯秩序を與ふるあらむも、未だ進歩せしむるには足らざるなり、今日此くの如きの二者あるなるが、互に相軋し交迭を爲しあるが、是れよりして更に第三者を生じたり、名けて靜止的教義と云ふ、蓋し之れ兩者の中間に在るの所説にして、彼此を合同せるものから其中に矛盾するの分子の存在するを免れず、之は常に其中に矛盾を包含するのみならず、其教義自身は之れ矛盾を以て其原理とせるものなり、即ち他の組織の根本原理を認めながら其活動を妨止す、一方にユートピアを斥けながら自身其最猛烈のものを主張せり、即ち社會を以て、後退と更新との相矛盾する性質の中間に在らしめんとす、孰んぞ能くす可き、是れは英國に於て生



せる處のものなるが此處にて秩序と進歩の二者を調和せしめんと念より生ぜしも格別更に新者を出すあらず、若し必要ならば兩者の孰れをも犠牲に附して憚らざるなり、即ち帝王は舊政治の尙有せる唯一の形式なるが秩序の方面を爲し、議會は之に對して進歩的の方面を事とす、然かも之れ未だ進歩を加ふるあらず、然り而して、斯かる組織の有するなる秩序なるものも唯物質的秩序に止まる、唯之れありて後來眞に自由の發達あるを得るは其長處なるのみ。夫れ此くの如し、若し斯かるものを之と更に風習を異にせる他邦に於て爲したらむには成功の庶幾す可からざる敢て言を要せざるなり。

以上三者は皆缺點を有す、獨り後退學派(神學派)のみならず、他の形而上學派及び靜止學派共に然り、蓋し在來の弊害のある處を治するを知らず其儘之を存續せしむればなり。就中最も劇しく致命傷とも云ふ可きは、智的混亂の範圍の絶えず擴大し來る事之れなり、而して特に其最顯著なるは革命的哲學に於て然りとす、是は其特色として、如何の論難も容れずとの事無し、雖然、革命的哲學にありては、適當なる論據あるに於ては、嘗に論難を重ねるに止まらずして、斷定を下すを不可とせず、

第二の靜止的哲學に至りては實に斯かるものを下す可きの基礎無し、唯徒らに二個の學說の中を彷徨し定まれる無ければなり、若し夫れ第三の後退的のものに至りては一層の甚しきものあり、即ち既に其衰退の結果幾多の混亂を致せるものを更始せんとするなり。

凡そ世に社會の問題程紛糾を重ねあるもの無く、從つて之れは卓識のある極少數の人士にて初めて解決を得可きのみ、然るを劣等の人々も悉く之に參與するが如くむば紛然として無際限の種類を呈し遂に統一を見ず。今日の列國中自由主義の最盛なるは新教諸國なるが其說の夥多にして之を制御するの主權を缺き何等の統一を見る能はざるなり。是れが影響の最著しく赴く處は、公德の上にあるに、之には公共の安寧の爲めに計るものにして、寧ろ習慣に基き一般人士の從ふ處のものたり。今政治界を見るに、形而上學主義に基き自由討究の結果人々自我を主張して相下らざるあり、互に陥擠して社會統一の期無し、固より此革命的哲學は其進歩的性質を有するの點に於て優に在來のものに擢んずるありと雖、其が用を爲したるの時期は遂に終に近きぬ、蓋し之のみを以てしては社會は始終混亂中に

彷徨す可ければなり。今日の社會的墮落なるもの全く此結果に外ならざるなり。翻て私徳を見るに幸にも、彼れ程に俗説の支配する處とならず、家族制度に關する一般の陋習の存在は彼の政治界の如くに破壊力の侵入するを容易ならしめず、先づ政治的組織破れて次で個人的方面を犯し來る、又彼の感情を理性に従屬せしむ可きの普通の個人的道德に従はずして、遂に理性を感情に従はしめんとは之れ所謂改新論者の主張する處なるも、其結果の如何は固より論ずるに足らざるなり。

次に述べ可きは、政府たるもの、缺く可からざる器具の腐敗せる事之れなり、在來の三教義皆多少の度に於て之を有せざるを免れず、行爲の正當なるものを指導す可き一般的精神を缺けるを以て、唯々個人的利害の向ふ處に由りて之を截定するあるのみ、斯かるは今日智的混亂の結果社會觀念が動搖不定なるに由らすむばあらざるなり、夫れ此くの如くむば政治は腐敗せむ、革命學派は當然腐敗の組織を致さしめし分解的作用を行ひ、靜止的學派は其状態を愈々鞏固ならしめ、後退學派にありては、其が特色とする組織的偽善の形式を以て又道德を腐敗せしむ。今日に於ては唯社會學說の根本とする處のものを明にし以て、其上に爲政の基礎を

樹立するあるのみ。

次に吾人の社會的地位の徵候とする處は、政治問題に關し物質的の將た直接的のもの、勢を加へ來れるにあり、理論と實際の兩者に在りて、前者を斥け後者を主とせるは歴史的事情のあり、即ち三世紀以前より既に精神的勢力を後にし世間的のものを主とせる事之れなり、夫れ今日の弊害の主なるものは、智的混亂を以て然りと爲すなるに、此くも理論的討究を禁じて不條理の一致を保持せんは、惜みても餘りあるものと謂ふ可きなり、其社會を改造するに際しても、此新社會的秩序の教義を先づ稽查する事を爲さずして、直に實際の方面に走り制度を定めんとす。其弊の赴く處は政體の瑣末の問題に頭腦を腦まし、社會組織の原理とす可き根本を忘却し去るにあり、是を之れ其本を忘ると謂ふ。

實に物質的觀念の盛なるは、常に進歩を妨ぐるに止まらずして又秩序に害あり、即ち弊の存する處のものが其社會の思想、風習にあるを忘れ、去りて其表面的の組織を改むる事を爲さんか、如何のものを持來するも竟に目的を遂ぐる無からむのみ、實に社會は其根本とする哲學的教義に由り指導する可きものたるを見る。

今日の社會狀態の第四に述べ可きものは、先きのもの、補充的性質を有す、即ち政治の要職に當るもの、無能なる人々たる事之れなり、是等の人々は社會の將來に就き未だ明確なるもの無きこそ却て得意とする處、此くの如くにして以て其高等なる野心を遂ぐ可きを得ければなり、即ち其次第無きに乗じ一時を塗抹して俗人の眼を眩惑せしめ、其間に事を處し以て得々たりと爲す、由來過去三世紀間は科學の時代にして當時の俊髦概ね其に赴き政治界の重大事は法律家及文人なるものに問ふの傾あり、此くして、今日に至るも、筆を執つて文を草するに堪ゆるの人は、此事に容喙するを得て益々紛糾を致す、若し社會の有機的狀態にして定まらむか斯かる詭言者流の言流は遂に跡を絶たんのみ。夫れ此くの如し、今日の社會の紛糾たるの様を見て少しく思慮する人の、或は憂ふるあらむも、其は遂に杞憂に陥らむ、蓋し今出でんとする實證哲學に由りて之を救濟するを得ればなり。

以上の豫備的研究は、余を導きて當然政治問題に入らしめぬ、今之れより歸りて、本書全體の立脚點に歸り、實證哲學の根底よりして社會の狀態並に其希望のある處を明にせざる可からず、在來他のものは皆成立せざるを見たり、獨り此實證哲學

に至りては、反之、混亂を極めたる社會科學を救ひて知識界の満足を與へぬ、過去三世紀に於て既に然りしもの又將來に於て然らざらむや、此實證哲學こそ實に近代社會を組織するに唯一の基礎たる可きは今日の社會狀態を考察すれば當然至らざる可からざるの結論なりとす。今以下説く處のもの或は未だ盡さざる無きを保せずと雖、其研究的方法是必らずや是に由らざる可からず、後の學者之を補は、初めて全きを得んのみ。實證哲學と政治との關係に就きての議論を止むるに先ち、此哲學が今日の二大要件に對する關係を説かざる可からず。

實證的社會教義の他に卓越せる點は、其適用せらるゝ全範圍が完全に論理的連結を爲せるにあり、即ち政治的見解も又科學的見解も相共に結合して矛盾無きを得せしむるもの之れが爲めなり、此實證的政治は、文明の現状の要點を悉く其中に收めしめ其中に衝突ある無からしむ、加之、現在を過去と連結し人生全體を以て一の融合體たらしむ、此點在來の二者と異なる處、彼の批評學派は革命以前を以て全然拒斥す可きものと爲し、後退學派亦現今と過去とを結合して統一あらしむる能はず、過去三世紀間の社會狀態を擯斥するあり。若し夫れ人生歴史の全體を以て其

發達の沿革を示すものと爲し、其各時期は皆其前のものより必然的に生來せるものと爲すの事は、獨り實證哲學之を擅にするの處たり。

此教義が秩序に及ばず處如何に關しては唯云はんとす、眞正の學問は智的秩序の建設より他の目的無きなり、今日人心は絶對的懷疑主義に傾けるを以て人の難する處となりあるが、然かも實證的論議の出でんには如何に不完全のものとも雖、之を歡迎するに踟躇せじ。不變の自然法則は其が他の學問と同様此社會にも適用せられ以て一貫するを得ば、此處に於ても他の諸處に於けると同様に哲學的有效を有するなるべし。此實證的精神の支配に由り、今日社會の根底に横れる幾多の困難なる問題も科學的に評價せられ以て社會安寧を増進するあり、社會制度の事は、之れ其表面的事實のみ、社會を根本的に改造せんには其中に横れる精神を事とせざる可からず、實證的精神は即ち此處に起らんとす。實證哲學は縦には古今の歴史を以て人生の變遷に資する段階を示すもの、故に何處として其前後のものとも因果的關係に立たざる無しとし、又一方には横に科學體統あり、即ち科學は皆相連結を爲し、實證的精神を以て一貫すと爲す、故を以て其最後の社會科學に至る迄に

は幾多の學問の知識を要す、蓋し其間に實證的精神の隨行するを明にして然る後初めて最後のものに至る可ければなり、故を以て數多の凡骨漢は此準備的研究に堪へず、徒らに容喙して學問を亂すの憂無からむ。

更に轉じて、進歩の方面を觀察するに之に實證的精神の獨り擅にする處たり、知識を進め其部分の連結を完からしむ、社會に進歩の念あるは、必らずや此實證的精神の影響たり、蓋し社會各部分の連結を明にし其全體の赴く目的を示すもの之れ此哲學の事なればなり。彼の革命哲學の本來有するなる進歩の觀念は唯自由の不斷の擴大にあり、換言すれば人力の漸進的擴大之れなりとす、此點に在りても實證哲學は彼に優れる霄壤の差あり、蓋し眞正の自由は專擅なる個人的示命の儘に任せずして、自然の法則に従ひて行動するに外ならざればなり。

今日政黨其種夥多にして一起一倒爭奪を事と爲せども、遂に此實證主義の勝を制す可きや疑を容れず、神學的教義は克く秩序を重んじたりしが、之を重んずるの餘り、手段に過ぎざる此秩序を過重するの弊を生じ、靜止學派の者は彼に比して公平たるを失はず、實證政治は前者に求めて得ざる處のものも之に求むれば之を得

可し、形而上學派の議會制度の如きは靜止學派をして其赴く處を變せしめし事無きにあらずと雖、其大なる有効勢力を以てして尙ほ實證哲學の生起を止むるに足らず、蓋し後者は前者に比して一層優勢なればなり、此實證哲學に由りて總ての欠陥を全ふす可く、もとより彼の形而上學的の革命的行動を妨ぐる事無く、唯之を手段として克く己が目的を遂行するの用に供す。

人或は思はん吾人の期待する改新は、大に社會中の科學的研究に従事するの人々に由り増進せらる可し、蓋し是等の人士は實證科學に最近邇すればなりと、然かも事實は之に反するあり、科學者は概ね識見狹少にして唯自家専門の範圍内の事のみに齷齪として従事し、未だ以て學問全體の事を知るの暇あらざればなり。

以上此新政治哲學が革新的勢力を加ふるに資する社會今日の狀態を叙しぬ、實に今日社會の最缺けたるは其理論的方面即ち智的のものにある故、此方を先づ討究せざる可からず、人の道德的改造は政治的のものに先ち且つ之を指導せざる可からず、以下科學的見地に歸り之を研究せんとす、併し其に先ち、簡單に社會科學を構成する主要なる哲學的企畫を考察せざる可からざるなり。

## 第二章 社會科學を構成せんが爲めの

### 主要なる哲學的企畫

社會現象の極めて複雑なる事が斯學の最後に至る迄不完全たりし主なる理由たり。之に加ふるに更に又他の述べ可きものあり、抑も最初の理論的教義は神學的方法よりして生出する事既記の如し、併し他の學問に在りては、一旦現象の恒常性を知り得たらんには、之を要せずして直に實證的方法に由るを得可し、社會現象にありては、當初にありては其材料未だ足らず、以て哲學的分析に資す可き無し、近代の政治的革命殊に佛國に於けるものによりて、舊來の政治組織の不完全を示されしより、初めて、進歩の觀念科學的の用に資するに足る迄充分鞏固なるものを得來れり、此目的の觀念明になりて初めて社會の行動が同一處を輪廻する無く、進歩的意義のある處を明瞭にするを得可きなり。

社會進歩に關する觀念は、政治的觀察に資する材料缺乏の爲め、古の哲學者には全然知る能はざるの處たり、就中最顯著なる人も現代を以て過去に比して遙に劣

れりと爲す、殊に希臘時代の末路の如き、之を後世のものと連結すれば、明に歴史開展の一時期を畫するに相違無きも、之を知らずして單に過去と比するに大に遜色あるを免れず、此時基督教出づるありて、猶太教に代りしは明に思想界の一大進歩たりしを失はずと雖、之れ亦神祕的見解を事とし遂に終極のものたる可からず、所詮は實證哲學の出現を待たざる可からざるなり。

夫れ此くの如し、故を以て進歩の觀念が全然實證哲學にのみ存するや明かなり、之を初めて満足に解せるはパスカルなり、氏曰く「人類全體が全時代に亘りての繼承の全體は以て一人の是れが全體に亘りて生活し且つ又絶えず學びありしものと見る可きなり」と。此くの如くにして過去に在りては、社會科學の構成極めて不可能たり、以下其極主なるものに就き其弊のある處を示し、以て余が説の確實なるを明にせんとす。

先づ述べ可きはアリストテレスなり、氏は「政治學」の著あり、氏の他の著述と比して著しく實證的成素あり、もとより其中に人生の進歩的方面其他又文明に關するの事は説く無しと雖、當時の如き實證的研究の萌芽とも稱す可きもの、僅かに

幾何學に於て見るを得しが如き、時代にありて、斯かりしものは氏の卓見に歸せざる可からず。

氏以後に亘り幾世紀間は其資料とする處に於て異るところあれ、方法に至りては全然アリストテレスを祖述するに過ぎず、之れが一新時期を畫せるは實にモンテスキューを待たざる可からざりし、氏は「羅馬盛衰史」並に「法律精理」の著あり、其企畫せる處は、氏の先行者デカルト、ガリレオ、ケプラーが施したる後を承けて實證的論斷を法律の上に及ぼさんとせしにあり、當時此實證的方法是僅かに極簡單なる自然現象に限られ、化學の一部にすら漸く至りし位に止まらざりしを、此くの如きの擧は實に氏の卓見と稱せざるを得ず、氏の所説は次の二理由に由り失敗に歸せざるを得ざりし、(一)實證的精神が未だ生物學に施されざるに先ち之を社會現象に用ひしより往々其説明する點に於て過大せる處あるを免れざる事、(二)當時社會の革命的時代にありて此く社會組織の論議を唱へし事之れなり。

次で社會學(Sociology)余は社會物理學の表示せん爲め此語を用ゐんとし發明せる處なり)に大なる寄與を致せるは、コンドルセーなりとす、氏は「チルゴ」に由り益

せられ、人心進歩の歴史的叙述を試みぬ、抑も人類社會的進歩に關する科學的觀念は此時初めて明瞭となりしものといふ可し、もとより其效果は未だ完きものあらざりしと雖、企圖する處に於いては、實に社會學問題の精髓を標榜せしもの、千古に亘りて渝る處無きなり、當時學界の進歩はモンテスキューの時より大に進みしかば、モ氏にしてモ氏の時に生れしめば、彼よりも一層の學界に貢獻する處ありしなる可かりし、併しモ氏の斯業と雖、見る可きもの素より尠からず、其完全なるものを得ざりし理由は次の二者に歸す、(一)當時生物學未だ充分に進歩せざりし事、(二)當時の政治事情を案するに、社會の舊態を廢滅せんとの事は一般人士の認めし處たり、而して革命主義の惡結果はコンドルセーに於て明かに矛盾のものを致さしめぬ、氏は十八世紀の終末に於て、人類が完全の度に到達せりとしながら、一方には其れ以前の諸般の制度文物等を以て、後退的勢力を有せるものと云ひぬ、然るに進歩とは畢竟何ぞや、是等個々のもの、進歩せるもの、綜合の結果に外ならざるなり、然るに此くの如し、之れ矛盾に非ずして何ぞ。

以上社會科學に貢獻せる主要なるものを述べぬ、今尙一の説く可きもの存す、經

學之れなり。

抑も社會科學の設立を經濟學に求む可きにあらず、蓋し彼等は其學を以て一般の政治科學と異別のものたるを説けばなり、然るに一方には又實證的方法を之に施せるを以て任するあり、由りて以て社會科學の從ふ可き標準を示せるものと爲すの觀あり、故に茲に説かざる可からず。實に經濟學者は、大抵法律家若しくは文士よりなれば、實證的修養に乏しきは當然の事を自ら此方面に造詣深きを高く標榜するも、遂に羊頭を掲げて狗肉を賣るの徒たるを失はず、中にありて一の異彩を放てるをアダムスミスと爲す、氏は經濟學を以て社會哲學中の或一部即ち職業、銀行事務等の事に關するものとし、其方法も當時の形而上學的のものに擁蔽せられずして、科學的のものを用ゐぬ、是れ他の經濟學者と異なる處にして、大に經濟現象は社會現象の一部として解す可く、古今に亘りての智的、道理的、政治的現象の變遷と相待ちて初めて解決を得可きなり。

今日人の經濟學に熱心なるは、社會的研究を實證的方法に由り試みんとする本能的欲求の結果のみ、此方法にして遂げられんか、人の經濟學に對する趣味は失し

去らむ、蓋し彼は唯此爲めとなればなり、即ち此くの如くむば何も經濟學を事とするに及ばざればなり。次に今日の學界の傾向は歴史的研究に趣けるにより、ホッシュエの如き高き見地よりして社會の過去を觀察せるあり、然かも此れは神學的なるも吾人は其態度を賛成せずむばあらず。今日此史的研究を或は形而上學的に解するあるも之れ未だし、古今を通じて其全體を案じて科學的眼光に照して解決を施す事こそ吾人の最渴望する處なれ。前章余の論する新哲學の歸趣する處を叙せしが、今は其必要、其好時期たるを論じたり、夫れ此くの如し、次に社會物理學の方法に就き論せんは其が當然の結果なりとす。

### 第三章 社會現象に應用せるに際しての 實證的方法の特質

科學に於ては如何のものにありとも、其方法は其教義と密接の關係のあるあり、故に複雑なる社會科學にありては、此事一層甚しきを見る、先づ其大體の精神を明にし、即ち教義に通じ然る後特殊のものに對する方法を案す可きなり。今日社會

科學の現状を察するに、尙ほ神學的、形而上學的方法を用ゆるの幼稚の狀態にあり、抑も此くの如きは諸科學の必らず一度は通過したる處なり、社會學獨り其轍を脱するを得ず、併し今日新に別に方法を試みんとは、即ち實證的方法に従はんとは、特に深き思想家に待たざる可からず、蓋し此學界にありては、頗る想像的思考の多大に亘れるを見ればなり、實に科學は之を排して觀察に基けるものたらざる可からざるなり。

實證哲學が在來のものとも異なる點は、知識は是に在りては絶對的なりしものを彼に在りては關係的のものと爲せるにあり、實在の本性如何、第一原因、結局原因如何等の問題に關しては敢て問ふ處にあらずと、唯現象界をのみ之れ事とす、而して現象界の事、もとより絶對的のものたる可きにあらず、知識の進むに従ひ益々擴大せらるゝあり、是れ其關係的たる所以。而して今日の實證的社會學は實に此くの如きの方法を以てせるものなり。

此事たるや社會學に於て一層其要を見る、蓋し之にありては他の學科よりも殊に理論と實際との關係密邇なるが故に、徒らに空理をのみ事とせるもの何等の用



無きなり、人は自然現象の法則を明にせば之に如何の事をも加ふるを得可しと信じたる時ありき、蓋し人智の未だ幼稚なる自然現象を以て、或超自然的動作者の作業に外ならずとせる故なり、而して此思想は、學問の進むに従ひ漸く除斥せられしが、新學問にして其範圍の一層狭く又一層複雑となるや、依然として存在するを見る、今日の社會現象の如き實に之にして政治學者が如何の方法を以てしても之を自由に改造するを得可しと爲せり、神學の見解は社會現象に於て僅少なる原因に對し多大なる結果を生ずるを得可しとし、之を以て立法者は唯其後に立てる超自然的勢力の傀儡となり、之を代表するに過ぎざるが爲めとし、形而上學的のものにありても此不可思議の勢力に代ふるに、或實體を持來りしに過ぎず、共に人力を以て不定限のものと爲す、今日社會組織に混亂のある之に職由せずむばあらざるなり、社會には又法則のあるあり、之を明にし其に基きて行動すること、真正の政治なれ、此くの如くにして初めて社會組織の整然たるものを見るを得可けん、而して之を爲す實に實證哲學の事に屬す。

上述の理由に由り社會現象の豫覺に關しては、次の三者を假定す、(一)形而上學的

觀念説を排し觀察を以て想像に代ふ、(二)政治的觀念は古の如く絶對的のものならずして文明發展の事實夫々の時期に於ける關係的のものとなる、由りて將來とも察するに難からず、(三)恒常的性質を有する政治的行動は或定期に由り限定せられ之を以て立法者の任意の行動に従はしむる能はず、此事即ち實證的社會哲學の在來のものに優れる點なりとす、神學的のものは、神の啓示あり、然かも此場合にありては其豫覺とする處のものが實に犯神的性質を有す、蓋し或事實を捉へて之に由り説明するに又一方には之と正反對の事實をも同一の立脚地よりして説明するを得るが故なり、形而上學のものにありても其精髓に至りては全然之と異らず、即ち事實の出沒を以て形而上學的實體に歸するなり、唯啓示なるもの無き點に於て彼と異なるのみ。

以上政治哲學の問題の根本的地位を定め其到達す可き科學的目的に關して案内を得しかば、次に社會物理學の普通精神を示すあらんとす。

扱社會現象亦自然法則に従ひて行動するの事明かとなりしが、其研究對象の何たるや將た又其法則は何ぞやは、之れ刻下の問題なり、是にありても他の學に於け

るが如く、靜的と動的の二者に分たざる可からず、之れ生物學に於ける分類法なるが社會學に於ても亦然り、而して一は社會の秩序を明にし他は其進歩を示す、一は社會存在の狀態の恒久の調和を示し他は社會發展を意味す。然り而して此學に於ても理論と實際の二者の密邇の關係に立てるを見る、抑も實證的には等を研鑽するの人は何ぞ實際家よりして實際社會の要求する處を満足するに至らざるものとの誹を受く可けんや。

社會學の靜的研究は、社會體系の諸部分の行動並に反動の法則の研究に在り、此の如くにして社會學的豫覺は、是等の關係に關する確實なる一般的知識に基きて、社會存立の各様式の種々異なる靜的表示を考察せんとす、此く其各部相關的な事を明にし、之を知り其結果は、吾人は常に社會運動の研究の唯一の基礎を得しのみならず、又直接觀察を行ふに際し大なる便益あり、即ち直接知る能はざる幾多の社會成素も他との關係よりして知るを得可ければなり、其科學若しくは其技術の諸部分の內的關係に關し科學的知識を得、次に諸科學相互の關係を知り、更に又技術と其に相當する夫々の科學との關係を明にしたらむには、其の一部の觀察は

以て他の部分の如何に關しては直接に知らずとも、之を云ふに難からざるなり、其の國民の復合的社會現象を研究するに當りても、將た又各時期の諸國民の交互作用を知らむとするに際しても、全く同様の事なり。

是の誤解され易きものは、社會組織にあり、而して此社會組織は總ての中に在りて最重大なりとす、實に社會組織の理論を以て全然絶對的のものとして爲し、當時の文明とは少しも關係の無きかの如きものとせる事之れなり、而して是等の人士は不變の政治的標式を以て人間發展の極幼稚の時期に一致するものとし、文明の進歩に伴ひ社會は墮落すと爲すなり、卓見のある政治學者は、政治制度間に存在する多少の相互的關係に就きて認むるあり、是れ實に政治制度なる或特殊の組織が文明の全組織と一致するとの事の眞實の思想なり、然かも是等の議論を爲せるものは、未だ以て組織的のものたらず、社會哲學としての價のあるに遠ければ、アリストテレス以來の學者が法律を以て當時の風習に従屬せしめ行くの必要を唱へながら、尙ほ一方に彼は此と獨立して存在するを得るものとの學理を主張するが如き矛盾を敢てするを止むる能はざりしなり。故に政治組織と其社會狀態との關係

に就き科學的に云へば次の如し、曰く、社會組織の全體と其部分との間には常に自然的調和あらざる可からず、之を構成するの成素は、其本性に適合せる様式を以て結合せられざる可からず、政治制度と社會風習と又風習と時代思潮とは相關的のものたらざる可からざるは無論の事なるが是等の結合體は、智的、道德的並に體力的活動の總てを包含せるなる人道の完成的發達の夫々の時期と相關聯せざる可らず、夫の革命的時期の如きは等の關係の最薄弱なるが如く見ゆる時にありても尙ほ之にあらざる可からず、然らずば遂に其社會有機體の破壊し去りて根跡無ければなり、實に政治は當時の社會文明の一表現として見る可きのみ、然り而して又一方には遂に政治組織が其社會の文明に影響を及ぼすあるは、もとよりの事に屬す、唯在來は此方を過重するの弊ありたる位なり。此くの如くにして余をして社會有機體に固有なる此根本概念を主張するに至らしめしは二個の理由の存するあり、社會靜學に關する此中心的思想の哲學上非常に重要な事、次では動的方面の事に關する之れなり、先づ前者こそ主要のもの、之にて秩序を知る、之に由り其各部分間の連關せるを明にす、然り而して此事は其現象の一層特殊的となり一層

複雑となるに従ひ益々深切を來すものなり、社會に於て最も甚しとす或は政治學者の之を忘るゝあるも其は實に事理を解せざるもの、此くの如くにあらずむば孰んぞ學問の體統を知るを得可き。

故を以て、社會を科學的に研究せんとするものは、之を幾多の小部分に分開して其各を討究せんとするが如くむば成果の收め得可き無し、素より此く細別の要を生ずるの時あらむ、然かも今日は尙之を爲すに如何の原理に従ひて爲す可きかを知らざるなり、蓋し此原理たるや其科學の發展の結果に於て初めて生ずるもの、而して此發展は科學を全體として考察して初めて之れあるものなり。實社會學を以て正道に従ひ研究するのは唯一あるのみ、而して其は其各部分を全體的眼光に照して觀るの事之れなり。

茲に注意す可きは、此研究の次第なり、哲學者は、吾人は如何のものにありても簡單のものより複雑のものに至る可きを云ふも之れ必らずしも常に然りとにあらず、吾人はむしろ云はんとす、克く知れる處のものより斯く知れる處に進む可しと、有機體の法科學にありては部分の方全體よりも善く知れあり、故に彼を先づ研究

す、然るに人間及び其社會にありては全體の方他に優りて知れあり。畢竟目的を遂ぐる上に於て、便宜の多き方を主とす可きなるを以て、以下論述するに當り夫々機に應じて之を處するあらむとす。

更に轉じて社會の動的方面を考察するに、よしや靜學は社會學の根底を構成せるものとは云へ、人をして興味之深からしむるは彼にありとす、之れ生物學と區別する處にして、不斷の進歩即ち人生の漸進的發展之れなり、之れが討究に入るに先ちて人類の進歩的勢力を構成するなる幾多の能力を検するを以て當然の順序と爲せども、其は在來幾多の學者に由り既に討究し去られし處なるを以て今は是等の事實に基きて、又一方にはあらゆる社會の要素を包含せる或一國民の社會を假定して之が討究に入らむとす。

社會動學の眞髓とする處は、連續的社會の各者を以て其前のものより來りしものとし、又次來のもの、必然的原動者となるを解するにあり、ライブニツの語を借れば、現在は其中に未來を包含すとなり、由りて社會動學は繼續の理論を究め、後者は共在のもの如何を解決せん、とす、即ち前者は進歩の理法を、後者は秩序の理法を知

らむとす。

既に社會學法則にして、靜的狀態の中に之を見るを得可くむば、之れよりは一層容易にして、一層明確なる動的狀態に於て之を知る能はざるの理由なし、如何の時代如何の場處たるに論なく一個人の短生涯と雖、其社會狀態に於ける變化を知るに難からず、社會が時代の推移に従ひ漸を逐ふて到る處の變化の推釋、之れ即ち社會運動と稱す可きもの、此く社會運動の存在は事實なるに又一方には社會狀態が一より他に轉移するの次第に序あるの事故、是等變化の中に自然法の存在するは到底之を沒却する能はざる處なる可し。

古往今來社會の關聯せるは此くの如し、今便宜の爲め特に其顯著なる智的方面の變遷を抽象して之を考察するも、其時期に在りて起る可き問題は既に一定せるものあり、其人の如何を問はざるなり。夫れ此くの如きの故に、社會に於ても他の科學に於けるが如く自然法の流行するあり、而して其れは之が大體を見るに從ひて愈々明になるもの、即ち個々の障害を排して此法則の行はるゝを見るなり。

更に人生の成全性を案せん、抑も人の幸福なるものは、其諸能力の發展と其周圍

の事情との調和に基き又一方には此均勢は或度迄は殆んど自發的に定まるを得るが故に、實證的方法を以て個人間の幸福の度如何を計量する事能はず、況んや異別の生物間の如きは尙更の事なりとす、所詮は問題とする處は、發展と進歩は同一なりや、發展は必らず改善、進歩の伴ふものありやとなり。余は之に對し肯定的に答へんとす、人類全體を取りて之を考察するに、人類の發展は二途に由り不斷的改善を見る、(一)人の根本的狀態に於て、之れもとより誰も異議無かる可し、(二)其相當する能力に於て、之れは餘り人の注意する處たらざりし。古來人類が其周圍の天然の支配する事愈々多大となり、或は社會組織に改善を加ふるが如き歴史の證明する處人類の斷えず増殖するは此事を示して餘りありと謂ふ可し、彼の革命的時期の如きと雖、物理的智的方面のみならず、又道理的方面に於ても進歩のありしは之を認めざる可からず、第二に人類の逐次的進歩に關しては、ラマルクの所謂動物殊に人類にありて其有機的進歩あるを見る、以て其人種に固定のものとなる、文明人の野蠻人に比して一層適合力の多大なる之を證して餘りあり、以上の事實に照して之を見るに、發展の後には必らず進歩の伴生し來るを證して餘りありと謂ふ可

けん。社會は各時期を通じて皆調和を有し然かも又他の方に進歩あり、即ち前者は其社會の其時完全なりしを證明するものなり、而して周圍の事情の變化に伴ひ不斷的變遷し即ち進歩を來せるものなりとす。

社會動學の最後の方面として、政治的行動の界限に就き述べざる可からず、古の神學の見解に由るにあらざるよりは、立法者に絶大無限の勢力のあるを認むるものは無かるべし、實に政治家の行ふ處皆自然法の爲めに掣肘せらるゝものあるを忘る可からず。由りて此處に二問題の解決を促すあり、(一)人類發展の途は之に幾多の可變者を加ふるに當りては如何にしてか、(二)幾多の政治的行動が是等の可變者に幾何の及ぼす處がある。

社會現象に於ては其自然的行動を變態せしむるの事は、之れが他のものに比して一層複雑なる丈益々多大なりとす、併し此くの如しと雖、變態は遂に變態のみ、其が根本法則となるにはあらざるなり、即ち或他の根本法則に基きて活動するなる社會を變態せしむるに過ぎざるなり。今政治組織を見るに之を社會に施すに當りては、靜的に之を解すれば其夫々の社會狀態の有せる種々の傾癖をして其密度

に於て多少の濃淡あらしむるに止まり又動的に之を見れば、人種の進歩は唯其速度に於て差等あらしむるを得るに過ぎず、通過せざる可からざるものは必らず通過せざる可からざるなり。知識發達の次第を案するに其最顯著なるものあり、某のものより某のもの、次で来るは必然的關係ありて存し、決して必然的に年代を逐ふて生來したるにはあらざるなり。其他道德の事に於て之を見るも亦同様たり、個人には夫々特質ありと雖、一時代に通じての通有性なるもの之れあり、例へば或時代には犍猛の事を左程の事とも感せざりしを後にては大に非倫として一般に斥けるが如し。

次に此社會の幾多の變態的勢力を夫々の重要な度に應じて分類するの事に就きては絮説する能はじ、蓋し此事未だ生物學に於てすら成らざるに之を社會學に施さんとするは大早計たるを免れざればなり、抑も社會を變態せしむるもの三ありと云ふ、曰く人種、曰く氣候、曰く政治運動之れなり、然りと雖、上述の理由に由り唯第三者を論せんとす、政治を以て萬能のものと爲す可からず、唯其社會力をして少しく變態せしむるを得るに過ぎざるのみ、故を以て其最も甚しき戰勝者が戰敗

者に加ふる政治的勢力にありても後者を全然其欲するが儘に變態せしめ得可きにあらず、唯其が早晚經過す可きの途を遲速あらしめしに過ぎざるのみ、此く人が其文明に加ふる勢力の無際限との野心的妄想より脱して之に合理的制限を加へ以て政治をして施す處を明にせしめば、社會的理論と實際の二者の契合點を得るに至る可し。斯くして社會科學の職責明となり來れり、政治的行動を拒斥するにあらずして是等をして或學理の下に従はしめむとす、而して其は觀察に由りて得し處のものなり、然り而して是は各現象を以て其他の現象と調和的關係にあるを知り又バスケルの所謂過去現在未來に亘り一大巨人の如く相關的のものたるを知るに至る。

以上政治哲學の概念を得しかば例に由り之れが研究法に至らむ、併し社會學は他のものに比し一層複雑なるが故に従つて其方法も簡單のものたる能はざるなり、又一方には科學體統の最後に位せるが故に、其方法を大別して二者とす、直接、間接之れなり、間接とは他のものと共通のものを云ひ、直接とは是に特有のものなり、今此直接のものより初めんとす、之に屬するもの次の如し、曰く觀察、曰く實驗、曰く

比較之れなり。

觀察、是れが何たるか將た又其が社會科學に及ぼすの效果如何に關しては今日極不完全なる更に又有害なる意見の流行するを見る、十八世紀に於ける教義の混亂的狀態は延いて其研究法に及ぼし、實驗的と云はず、合理的と云はず幾多の豫備的方法是破壊せられ社會的知識の如きも之を觀察に由りて得るの事は破壊し了りぬ、併し此くの如くむば獨り社會學のみならず、あらゆる學問を擧げて破れんのみ、是れが疑を懐くの根底は、人類立證の不確實なるに歸すと雖、實際吾人は己れ自ら觀察に由り得たる知識にあらずむば他人の行ひしものを信用し、依然間接に觀察に由るものなり。次に又今日最公平を口にする經驗學派は如何の學理にも依らず唯觀察にのみ之れ依ると云ふと雖、之れ妄の妄なるもの、如何の觀察と雖、或學理に由り指導せられ又之に由り解決せられたるものにあらざるよりは未だ以て眞正のものと稱する能はず、此欲求を充さんが爲めに古代既に神學的のものあり、今は之に代ふるに實驗的方法を以てせんとす、然らずして漫然唯觀察を之れ事とするも之れ俗人の知識のみ、何等組織的のものを得可からざるなり、其複雑の最

甚しき社會學にありて此事殊に然り、幾多の事實の連結を博し其關係を明にするを得る之れ實驗的方法に由りてのみ。其靜的方面としては社會連結の根本法則を知るを要し、動的方面としては社會發展の法則を豫想せざる可からざるなり。故に社會學にありては、觀察に由りて蒐集せる事實は之を靜的並に動的法則に従はしめて之を解す可きなり。

實驗、社會學に實驗とは、聊か妙に聞えんも不可能の事にあらず、抑も之に直接と間接の二者あり、今社會學にて爲すは直接のもの即ち故らに人工的に造るもの謂にあらずして、間接のものを謂ふ、即ち病的狀態の研究之れなり、社會體亦生物體と同じく病氣あり、例へば革命時代の如し、是に由り社會調和及び其繼續の理法の亂るゝの觀あり、之を検して以て當初の健全社會の理法如何を知るの事を得、蓋し此時に當りては或障害の加はりて之を損ねしもの、以て彼と比較せば可なり、之を間接實驗と云ふ。

比較、古來人間社會を以て全然動物社會と別物と爲し彼と之れとを比較す可からざるものとする傾向あるが、右は神學的形而上學的の哲學見地より出でしも

のにして、兩者はもとより程度上の差等たるや明けし、動物社會に於ける主要なる欠陥は、其進歩的性質を有せざるにあり、故を以て、人間社會を研究するに當り最興味のある動的方面に就きては些少の得る處無し、然りと雖、家族の組織種族の形成の如きもの、萌芽に至りては動物社會克く之を有するなり、或は此比較を動物の有爲的社會組織にのみ限らずして、無意的のもの、即ち或は單純なる固質若しくは眞實の繼續のものを研究するは吾人直接に得る處無からしめむも、其研究に關しては大に與ふる處あるを見る。

此方法に基きて爲す第一のものは、地球の各處に同時に存在する幾多の社會の比較之れなり、即ち此社會は皆全く無關係のものたるなり、之に由りて縦の社會の進化の跡を横に知るを得可し、元來社會進歩の理法たるや、人類全體に通じて同一たる可きも、今尙明にせられざるの理由にて世界各處の進歩に著しき不同を生ずるに至りぬ、由りて今日世界の某處にある社會は他の社會の古代に於て有したる組織を有するの事あり。今之と觀察との關係を見るに、斯かる比較作用は靜的動的の兩方面に於て之を知るを得可し、次に又之に由りて彼の歴史的研究法にて試

みたるもの、欠陥を補填し且つ其をして愈々確實のものたるを知るを得せしむるは後章に明かなり。然りと雖、此方法のみを以てして遂に吾人を誤らしむるもの無きを保せず、蓋し雜然として種々のもの並列しあるも、其順序の如何は之に由りて知る可きにあらず、蓋し雜然として種々のもの並列しあるも、其順序の如何は之に知る可きにあらず、又或は變態を目して本能と倣し偶然的成形を以て直ちに其本質的のものと爲さんとするの誤に陥らむ。之を防遏するの事唯歴史的方法の存するのみ。

歴史的研究は之れ新政治哲學の主なる科學的考案たるのみならず之れが合理的發展は實に斯學の本質を構成するものと謂ふを得可し、之れありて初めて生物學と分つなり、是れ即ち其時代の社會が次の時代に影響を及ぼし、以て社會開展の研究に於て主要なる役目を行ふものなり、若し此事無くば人世史も畢竟自然史となりて了せむのみ。實に部分は全體の知識あるに由りて初めて之を知るを得るものなれ、例へば、歴史的事實の如き之を個々に分ちて研究し以て社會進化の全體と參する無くば遂に何の得る處ぞ、又此くの如きの故に、往古にありし歴史的事實



も面の當り吾人の行動に影響を加ふるあるなり、而して之れが嘗に稗史小説を讀みて吾人に感興を惹起さすとの如き謂に非ずして、此實證的方法に由り人生史を通じて渾然たる一體たるを知了するを得て初めて此くの如きの關係を生來し得るなり。今日政治を事とするもの先づ過去の久しき年月に亘りて稽査し以て現在を案じ然る後未來の事に及ぶ可きなり、又注意す可きは事實を誤らざる事にあるが如き之れなり、其は又その如き現象の或期間に亘れるに過ぎざるあればなり。以上の方法は個人的生活に於て動物學的比較と同様の位置を社會に於て有す、之を名けて歴史的方法と謂ふ他の觀察實驗比較の次に位せしむ可きものとす。

#### 第四章 社會學と實證哲學の他の部門との關係

實證哲學の斯學に於ける情勢は、之れが他の學問に對する關係の未だ明にせられざる限り之を完ふする能はざるなり、之を學問體統中の適當の位置を保たしめて初めて之を知るを得可きに、今日尙然らざるは之を知る能はざるの證なり、故に

吾人は先づ之より初めざる可からず。斯くも社會學を他の學問と連結せしむるは、新考案と謂ふ可し、社會現象は極めて複雑なれども、以上の問題を解せんが爲めには之を二因子に分つを要す、(一)人若しくは人道、即ち現象を構成するもの、(二)周圍即ち他の動物社會と同様人間社會にも勢力を及ぼすもの、社會學は、(一)に由り無機的哲學の體系と關係を有したる、蓋し之れ吾人に人生を教ゆればなり、(二)に由り無機的哲學と連結を致す、之れ人類生存の外的情勢を示せばなり。由りて此處に爲機哲學の化學、物理學及び天文學を合して一として社會周圍を組織するものと爲す可し。研究法に關しては、學の愈々進み愈々複雑を來すに従ひ己れ以前の學の方法を襲用す可きを忘る可からず、又最複雑なる社會學が遂に反動を其以前のものに及ぼすある可きも其は時々云ふあらむ。

社會學が生物學に負ふ事の重且大なるは明々白地の事なり、然かも實際に於て往々看過せらるゝは、一は社會的研究の未だ完からざるに由ると雖、抑も亦生物學の不完全なるに歸せずむばあらず、殊に其最高等部即ち智的並に道德的現象に於て然りとす、生物學と社會學とが最密接に關係せるは、此部分にあり、先づ生物學は

社會的思辨の出發點を供するものなるを見る、即ち人の社會的能力及び其性質を定むる有機的事情の分析を経て之を爲すなり、わけては、又社會的連鎖の根本的事項を知る事難きを以て、夫々の社會にありては、其與へられたる材料を以て其社會に便宜するものと解し、由りて以て實證哲學を夫々の社會事情に適用せざる可からず、即ち彼の社會の原始的狀態如何の如きよりも、むしろ此くの如き方法を探るを以て當を得たるものとす、社會事情の進むに及びてや單に演繹的方法のみを以て遂ぐ可きにあらず、即ち生物的理論と社會學的理論と交互錯綜して存するを見る、其生物學の見地よりするものは、社會進化を以て擧げて、生物學的理法に遵守す可きものとし、人間有機體の不變なる事を論じ、身體的に智的に將た又道徳的に一定のものあり、故に社會進化の如何の時期にありても之と違反せるものは認む可きにあらずとす、併し之れ、人の本性を過重したるの弊なり、吾人は一方に斯かるものあると同時に他に歴史的討究を行ふを忘る可からず、之に由りて以て一社會が他の社會に加ふる影響を知る可く以て之をして變形せしむる處あるを悟らむ、由來學者は其學ぶ處を重んずるの餘り他を忘るゝの傾あるを免れざるが生物學者

の説く處亦此事を見る。

夫れ此くの如し、故に社會學は生物學の附屬と爲す可きにあらず、之れと獨立の地位を占めて而して之れと密接の關係に於て立てるものなり、其研究法に至りては先づ生物學のものに通せざる可からざるは無論の事、其比較研究法に於て大に得る處あらしむるは無論の事なるが、又一方には兩者に通じて結局原因の信條を廢して實理的證明を試みんとするの事之れなり。

社會學は生物學に負ふ處此くの如きを以て、生物學の關係ある無機的哲學の全體系と關係あるや明なり、併し其然るは直接に又之を知る、次の如し。

社會進化の經過す可き舞臺なる外界の事情即ち化學的、物理的及び天文的のもの、全體系を適當に分析するは、之れ無機的哲學の事なり、社會と外界の事情の密接なるからは之を討究するなる此無機哲學の必要明けし、例を天文の事に取らむに、社會は個人と同様地球の回轉、引力の關係等の支配を受くるや大、而して彼は之に勝るものあり、空氣の化學的事情、其他水、土の事等之れなり、又地球の地勢の如き社會の形式の下に大なる影響を加ふ可く、或は個人としては其期間餘りに僅少な

る爲め結果を知るを得ざる程の外的影響物も久しきに亘りては、社會に或印影を止むるに至らむ。此くの如きを以て、吾人の氣附く第一の事は、實證的社會學は、無機的哲學が或度迄進みたる後にあらずむば存する能はざるとの事之れなり、然かも可能と不可缺とは常に克く契合を致すあり、吾人の缺く可からざるものは吾人之を得る事を得可し、故に今日社會の存在に必要な限りに於ける天體の運行は余之を知る、然して、學漸く進むに従ひ其未知のものは益々解決せらるゝならんとは吾人の期する處なりとす。

既に述べしが如く社會進歩に加ふる障礙的原因是、唯其進歩の速度を鈍からしむるに止まり、無機的哲學の範圍のものゝ之に加ふるに於ても之れと同様の事なりと爲す。

逆に人が外界に加ふる行爲如何を考察するに、人が其發展を爲すや、外界事物の性質に通せざる可からず、即ち物理的並に化學的知識を必要とする所以なり、嘗に生物學のものを以てする丈では未だし。

或學を研究するに當りては、他の學が眞と爲したる處のものを眞と定むるの事

必要なり學愈々複雑となるに従ひ益々其より簡單のものゝ知識を要す、社會學を研究するが如き時に於て殊に然りと爲す、爾餘の學、天文學より延いて他のものを悉く豫備的に知らざる可からざる所以なり。

此くの如き學問の次第は、先づ基礎を數學の上に樹立せざる可からず、社會學者が實證的思辨の論理的要件を充足するを得るは、唯此數學あるのみ、然りと雖、數學者が社會的研究を、數學に所謂偶然説に由り解かんとするが如きは誤れりと謂ふ可し、彼の生物學者が社會學を以て己れの附屬物と爲したると同様嗤ふ可きの誤りとす。記號を以て吾が概念に比し、或は數的蓋然性を以て直ちに社會中の幾多の輿論の間に用ゐんとするが如き之れなり。

學問の蓋有的關係の説明を完からしめむが爲めには、更らに位置を逆にして社會物理學が己以前の幾多の科學に及ぼす哲學的反應を評價せざる可からず、而して之を教義と方法の二方面よりして行ふ可きなり。教義に於ては凡そ學問は皆人類の研究なるが故に、當然人類進化の一般理法に従はざる可からずとなり、一旦此理法にして完成せられ如何の學問と雖、之れよりの縦横の演繹的作用を妨止す

るに堪へざるに至らば、科學の體統は今日の形勢を逆にし舉つて一科學の部分を占有するものたるに至らむ、吾人は今日此くの如き様を實現するの能力無し、然りと雖、事情此くの如きを以て、社會學が人類思辨の總ての方面の學問に及ぼす關涉如何は之を知るに難からず、先づ斯かる關涉は吾人々類の本性を爲す生物學上の理論に基かざる可からざるの觀あり、然かも之れ個人的の上よりの事のみ、更に包含的に之を考察すれば人生が社會狀態の中にありて活動する處のものに外ならず、故を以て後者の性質を明にするの要を見る。社會學は幾多の科學を結合するなる根本的關係の研究を完ふせざる可からず、之れ蓋し社會靜學の精髓と稱す可きもの、而して之を最明瞭に示すは社會動學に於て然りと爲す、即ち全體の發展の自然的經過に際し當然發現す可きものたり。科學の歴史的研究の必要此處にあり。

研究法に關しては上述の事よりして當然明かならしむるものあり、社會學の功は之れが他の總ての學問に共通の基礎を與ふるにあり、わけても歴史的方法を以て然りと爲す、在來の三研究方法に加ふるに之を以てす、之に由り學問相互の關係

明になり、無益に空想的討究を試みて以て一方にのみ逸し去るが如き事を爲すに至らず、故に社會物理學は之を爲して以て人生發展の一般概念を監督するの事を爲すものと謂ふ可きなり、由りて社會學の反動的作用二あり、(一)實證哲學は總ての科學を相互に結合す、(二)總ての研究の方法に一新高等の研究方法を加ふ、斯くして社會學は其性質上他の諸科學に依從せざる可からざると同時に又却て之を結合して一團たらしむるものなり、由りて眞の幾多の科學の融合的に同格の位置を保持するの事は此實證哲學よりのみ生ずるなり。

社會科學は其重要なる思辨的方面に關しては、舉げて他の基本的科學に俟たざる可からず、然かも其精神、其機能、其研究法を考察したる今日にありては、斯學は其合理性に於て今日吾人の知識の想見せしむる處のものよりも、更に高等なる地位を與へしむるものあるを見る。其範圍の非常に大なるに係はらず、克く其全問題の一致せる諸方面の相關的状态を保持せるが如きは其將來の發展の愈々大なるを推するに難からざるなり。

## 第五章 社會靜學即ち人間社會の自發的秩序

社會學に於て最も興味のあるは、動的方面にありと雖、又靜的のものを全然忘る可きにあらず、之に由り人間社會調和の根本を明にし、又其當初の狀態を知るに便なりとす。

社會學的分析は、皆三段の研究を爲す、(一)個人の社會の生活の狀態、(二)家族の其れ、(三)社會の其れなり、此最後のものは科學的意義を以てしては、人類全體を包含す。

一、個人、ゴールの頭腦説は十八世紀に行はれし人間の社會的傾向に對する形而上學的空想を排し去りぬ、即ち之を以て其本性に固有のもの、功利的の念慮より生せるものにあらずとなり、ゴールの説なくとも、社會の生來が功利的の意義を有せざるは之を知る、抑も個人が唯此念よりしてとなら、社會は到底生起せず、蓋し其當初にありては喪ふ處のもの、得る處のものよりも多かればなり、事を経る事久ふして初めて社會よりして利益を得るに至れるなり、今日に在りても社會的生活の利益あるを拒むの詭辯學者の存する位なり。

人類が本來裸體とか幼年期の久しきに亘る等の事は在來人の社會性の必要との理由として認められしが、實は過大視せらるゝの風あり、蓋し是等の事實は人間以外の動物にも之れあればなり、今是等生理的事實は討究する事を止めて、今吾人の本性にして社會に及びて其が根本性格と爲し且其發展を通じて、恒久に存する處のものを評價せんとす。先づ述べ可きは、人の情的能力が智的能力に優れる事なり、人は絶えず或一事件に拘れる方成功の基なりと雖、其本性として此くの如きを許さず久しからずして倦怠を致し諸種のものに轉せんとす、人の智的能力は其精力最弱きが故に之を用ゐて或度を過せば必らずや疲勞を覺ゆ、其體力の不完全又道徳的が必要が、人を驅りて他動物よりも一層に此原始的狀態よりして改めしめんとす、而して之を行ふは唯理性をして猛烈に刺激あらしむるの一事にありと爲す。是れ生物學が吾人に教ゆるもの、即ち社會の一般性に大影響を及ぼし次で社會進化の上に及ぼす處のものなりとす、曰く人は本來智的勞働に堪へず、物的勞働に適す。事實此くの如く、情的方面の方、智的のものに比して著しく其度を高ふせるなるが、吾人は此狀態を以て傷む可しと爲す可きにあらず、若し逆に知識の方面

のみ著しく高からむか、遂に枯淡ものなり無感覺のものに了らむのみ、社會の事豈に徒らに抽象的思辨を以て満足す可けむや、果して此くの如くむば遂に妄思なる迷想に陥らむ、故に今日の社會有機體は實に其あり得まじき儘の様にあり、唯其度に於て缺くる處あるのみ、文明の發展に伴ひ漸を遂ふて之を改む可きなり、即ち吾人の情性をして漸々理性に従はしめむ事を期す可く、然かも全然其次第を顛倒するが如き事ある可からざるなり。

次に又、社會的關係に就ては下等なる個人的情性の方高等のものよりも無論優勢を占めあり、人類相互の安寧は社會的情性を完ふして初めて之を得るなるも、生物學上の事實として、人は個人的のもの、方優るあり、斯くして、社會的行動を指導する處のものは此個人的本能たらざる可からず、吾人の庶幾する處は皆吾人の幸福にあり、故に之より打算して事を爲さむとする、もとより當然の事と爲す、汝の隣人を愛する事汝の如くせよとの教は實に克く此事を示しあり、實行の場合には、唯其れ程にも行かざるを憾むのみ。

二、家族、凡そ一體系は如何のものと雖、其れと性質を同じふせるものより成ら

ざる可からざるが故に、社會を以て個人より成るとするは、科學的精神の首肯する能はざる處なりとす、實に社會の眞の單位は家族なり、更に之を云へば一男一女より成れる夫婦即ち之れなりとす。家族は單に生理的に見て、之よりして幾多の人類を生出し、以て種族となり、以て國民となり、今日全世界の人類を擧げて一家族より生來せるものとも見らるゝ位のものなるが、之を以て人類社會の單位と爲すは、實に此くの如き生理的の上よりのみにあらずして、又政治的に之を見るも、家族は社會有機體の諸種の特質の眞正の萌芽を表示するの故に、之を以て其單位と見る可きなり。斯かる家族の概念は、實に個人と社會との中間を構成するもの、之を別にしては、理論的研究を爲すに當り、將た又實際的生活に於て、共に大なる困難に遭遇するを免れざるなり、人の社會性は必らず之を通じて成るものにして、之に由り人は其當初の個人性より脱化するを得、之に由りて性格の異なる二人相合して一結合を爲すに至るなり、抑も社會の存在は其を組織する諸分子が互に依從して種々の異なる手段を有しながら、或一般行動に向ひ不斷の調和を保持しつゝあり、家族關係亦此くの如し。

人類家族の組織は社會の進歩に伴ひ、其必要に應じて幾多の變形を経たり、或時は一夫多妻を要したる時ありき、而して今日は一夫一婦の制を是と爲す、古は半ば奴隸制度の如きものもありたりき、今は家族の根本組織如何を檢覈せんとするのみ。

若し夫れ夫婦の關係はよしや如何の不完全のものにせよ、克く社會の秩序を保持せしむる上に大功ありし事は、到底筆紙に盡す可きにあらず、今日思想界の革命期にありと雖、此結婚なるものを全然廢滅せしめんとにはあらざるなり、實に實證哲學の期する處は、結婚及び家族の制度を人性の本質並に社會發展の上に樹立せしめ、在來の如き空想的のものたらざらしめんとにあり、抑も結婚制度の如きも絶えず變化を受けつゝあるは事實なり、今日の政治哲學も亦唯在來のものを變態して以て時世に適應せしめんとするに止まるのみ。

結婚制度の究極の状態如何は今説く可きにあらず、唯是れも亦社會制度の根本原理と背反せざる可からざるを云へば足る、由是觀之、婦人の男子に服従するは自然の事のみ、是れ個人の生理上より又社會組織の上より判じて共に然りと爲す、男

女其の性質並に體格に於て根本的差異のあるは生理學の教ゆる處、吾人は斯かるものを驅りて、社會中に於て同一の地位を保持せしめずして、各其適當の事を行はしむ可きなり、是れ一が他は從屬的關係にありて存するを得可く、此くの如きは蓋し幸福は其本性とする處を發達せしめて初めて之れあるを得ればなり。

人類と動物とを比較するに、情性に於ては彼は之より尠く、知識に於ては彼は之に優る、而して知識の多少之れ即ち人を他動物と分つ所以にして優等なるものとす、今婦人を見るに男子と比して劣等なる情性に於て優り、優等なる知識に於て缺くるあり、之れ其劣等なる證左にあらずや、婦人は久しきに亘る精神的事業に堪ゆ可くもあらず、之れ深き思慮を要すればなり、世の複雑なる事業は知識の多くを要す可く、到底感情の勝れる婦人の能くする處にあらざるなり、此くも其本性にあらざる處のものを以て之に強ひんとす、吾其幸福の結果を得るを知らざるなり。若し夫れ此く理性的なる男子のみを以てしては、社會は枯淡となり、了す可く、情的なる婦人の入り來るあれば初めて之をして津々として滋味のあるものたるを得せしむ可し、婦人豈無用と云はむや。

次に重大なるは父子の關係にあり、廣く社會的に之を見れば年齢の關係なり、今日如何に極端論者と雖、小兒の如きものにも成人と同様の權利を賦與するを口にするもの無かる可し。家族組織に於て先づ父子の關係ありて、之を以て社會組織の標本と爲すは最當を得たるの事にして、是れ程經濟的の事は無かる可し、父は子に對し絶對權を有し之を指導するあり、而して子は父に服從し、一方には其勞作して得たる資産を受くるの望あるなり、社會的となり其範圍の彌々擴大せらるゝに及びてや、此關係漸く稀薄を來すなるも其原理とする處は一なり、若し夫れ此順序を逆にし父子の關係の如きをも全然社會の方面よりして制肘せんとせんか、此くの如くむば遂に混亂に終らむのみ、蓋し社會の如き未だ其組織の整はざるものを以て標型と爲さんとすればなり、遂に父子の服從と主權の關係廢絶するに至らむのみ。

家族組織の最顯著の特性の述べざる可からざるものあり、即ち現在と未來とを關聯せしめて以て社會永續性の基礎を作成するの事之れなり、人は必らず其父を想ひ延いて其祖先に及ぶ、世の進むに従ひ在來口碑を以てせるものに代ふるに、文

書を以てする等の形態に於て異なるありと雖、現在と未來とを結合するの事に於ては渝らざるものあり。現在と未來となり、故に昨の吾は今の吾にあらず、絶えず進歩的性質を有す、此く一方に過去を忘れざると同時に更に又他の方にては之を延いて未來に及ぼさんとす、過去現在未來を通じて一の繼續體たり、而して此くの如きの精神は克く實證哲學と一致す、蓋し之れは其基礎として歴史を重すればなり、故に今日の如き革命的時期と雖、敢て此實證哲學を容れざるものにあらざるを見る。兄弟の關係の如きも、兩者年齢の差等甚しからざれば權威行はれざる可く、其差甚しければ又父子の如きものあらむ、今此處には之を細論するの遑無し。

三、社會、社會有機體が個人有機體に比して優れる點は、社會に在りては、其を組織する種々の機關が一層分別し然かも雙關的の性質にして、其遂ぐる處の幾多の機能の特殊的性質を有せるにあり、斯くして其目的の統一性は、之が手段の異別の愈々饒多なる丈其れ丈鞏固となりあり、吾人は目前の社會の現象如何を説くは難し、蘆山の中にありて孰んぞ其峯と嶺とを辨せん、併し更に近きも遠方より社會の形勢如何を観るに、其中の秩序の整然たる天地間に於て之に加ふるものあらむや、



其中の個人は皆異別の目的と手段とを意識的に有しながら、其赴く處は皆綜合的に或一の目的に向ひて進行せるを見る。有意的結合は高等動物に於て既に之を見るも雖、もとより人類のみに比す可くもあらず、而して之が濫觴は實に家族制度にありとす、然りと雖、家族制度と社會組織とは同じからざるものあり、前者は情を主とし、智は副たり、後者は之に反す、蓋し社會に於ては分業盛に行はれ、其幾多の部分の相集合して茲に一の組織アソシエーションを成す、然るに家族に在りては分業此くの如きものならず、子は父の行を模倣するのみ、又一家族間にありて人々其業を別にせば遂に家族的統一を損はん、實に家族は之を一の組織と見る可きにあらずして、一の聯合ユニオンと稱す可きものなり、夫れ情的なり、故に家族制度は唯其存在せるの事丈を以てして克く吾人を満足せしむ可く、之に反して社會は智的のものたるが故に、其中のものは皆夫々の仕事を遂げて初めて其職を完ふせるものなり、此くの如き故に社會にありては先づ人々其職を遂行するあり、然る後人は其人々に對して同情の念油然而して湧く、之れ家族の情的を主とせるに反し、社會にては智的方面を主とする所以なり。

上來社會に於ける分業の事を説きしが、此文字は今日普通に解せらるゝものよりも廣義のものたるを要す、即ち或一事業は幾多の國民の關係せざる可からざるのみならず、又幾代に亘りての事たる可し、此くの如くにして社會は人生の全體を通じて渾然たる一體を爲すものたるを見る。人は單獨にて生活を遂げ得可きものにあらず、即ち人々其賦能に應じたるの事を行ひ以て社會的生活を營めば、社會の方よりして之を見れば、其中に幾多の分業の行はれあるものと謂ふを得可  
けむ。

次に分業の弊を述べんに、今日の如く分業に分業を重ねんか、人々は唯己が所屬の事のみを事とし、全體に通じての觀念を缺き來り、道德上の方面に於ては唯己が關與する一小部分の人士に對してのみ同情を有するに止まらむ、一方に縫針の穴を開くを以て終生の職業と爲す労働者あれば、他には方程式の解決に營々として一生を過す學者あり、此くの如くむば其弊の赴く處知る可きのみ。故を以て今日の政治に従事するものは之を察し、社會の各分子をして四散せしむる無く、以て其全體の赴く處を明にす可し、庶幾くは社會進歩なるものあるを得む乎。

茲に於て、政府の根本的理論を明にするを得たり、即ち社會全體を以て其部分に反動的行動に出づるにあり、其行動初め自發的のものなりしが、後には之を整齊せしむ、社會進むに従ひ、其部分的の發達著しくなるに伴ひ、此く反動的に出で全體の結合を爲す可しとなり、而して此事は常に物質的方面に止まらずして、智的、道德的方面に於ても亦然らざる可からざるなり。

此く分化に伴ひ之を中和するもの、生ずるを要す、其終極のものは政府即ち之れなり、其之を爲すは次の如くす、一のものは其れより一層、一般的性質を有するものには從屬的關係に立つとの事之れなり、是れ常に物質的に於て然るのみにあらず、道德的に將た又智的よりして共に然り、此くの如くにして初めて社會は分裂無きを得可し、然して又一方には之に加ふるに夫々の特殊機關が遂行するなる特殊の機能に關しては相互に信頼するとの事を必要と爲す、蓋し初めは各自皆社會のもの、全體を爲したりしも、後には分別の結果己れの全く知らざる働者ありて己れ以外の事を爲し其成ると成らざるとは道德的に將た又事業的に延いて其社會の全體に影響を及ぼせばなり。此從屬的關係の最顯著なる例は工業制度及び軍

隊組織に於て之を見る、己れより一級上のもの、即ち己れより普通性の大なるものには從屬せざる可からざるものあり、斯くして其最後には、最普遍的機能のものに歸せざる可からず、斯くして全體が其部分に反動を及ぼすに至る、茲に注意す可きは智的機能は工業的のものに比し分業の影響を受くる度の尠きにあり、文明の進歩に伴ひ道德的に又智的に不同を増加するは事實なれども、是等のものは物的なもの、如く許多のものを蓄積するを得ざるにあり、今國家が金を要するに當りては全國民の少額宛の寄附も集めて以て多大のものと致すを得可し、智的のものは之に反し凡骨幾千萬を加ふるも遂に一沙翁に及ばざるなり。

以上は之れ人間社會が自發的政治に對する基本的傾向なりとす、此傾向たるや各個人の中に有する處のもの、一方に人を統治せんとの念あるに對し、他には又己を他に依從せしめんとするもの之れなり、人は皆人を統治せんとする欲望あると同時に、己れより優等の人士あれば喜んで己が身を托し、自から己を制するの痛苦より脱せむとす。而して社會全體も亦此くの如し、政治的從屬は缺く可からざるものとなると同時に又避く可からざるものなり。

上來述べし處の語、抽象に馳せし憾あれども、以下進むに従ひ其義の明なるものあらむ。併し人間關係に關して學問上の進化よりして生ずる實益は之を知るに難からず、個人的生活は個人的本能の制縛を受け、家族的のものは同情的本能に由り、社會的のものは幾多の智的勢力の特殊の發展に伴ひ、次期の人間社會の準備を爲す、其次で來るものは、(一)個人的道德にして、個人保持を巧智なる訓練に従はしめ、(二)家族的道德は利己心を同情心に従はしめ、(三)社會的道德は、社會全體の政治の點より大觀して人々をして各其適當なる發達に至らしむるにあり。

## 第六章 社會動學即ち人間社會自然進歩理論

人類發展の進路を最高の科學的立脚地よりして觀察すれば、人類の本性の方が其動物性に比して彌々加大し來るを見る、文明なるものが自然と一致すとの事は此理を以てしてなり、即ち人類の中に初め潜在せるもの、進歩に伴ひ顯在的のものとなりしなり、生物學を見るに此事實を證して餘りあり、動物界にありては、優等なるに、從ひ益々有機的生活より動物的生活の方、勢力を加へ來るを見る、極簡單な

る植物より幾多高等のものを經て動物界に入り脊索動物に至るまで皆然らざるは無し、而して最後に人類に至りては、智的道德的の發達を見る、社會進歩を分析するに其の精髓とする處は幾多の段階を通じて同一なるも高等になるに従ひ其が益々發達せるものなるを見る、而して遂に其の方が他の動物性よりも社會中に優力のものとなり來るなり、之れ社會有機體の靜的觀察なり、以下動的方面より之を見む。

文明の進歩は非常の度を以て、人類が其周圍に加ふるの勢力を増加せしむるあり、斯くして其初期にありては主として物質的方面に注意を向くるあり、蓋し此くの如き所以は先づ吾人をして物質的方面に對する注意より脱化せしめ、以て直ちに智的機能に向ひて全力を注ぐを得せしむ、社會の幼稚なる時は斯く物質的方面の事にのみ係はる、文明の進歩に伴ひ、人類結合の唯一の基礎たる吾人最高等の資質吾人の最寛仁の感情を發展せしむ、野蠻人に在りては智的生活なるもの、見る可きもの殆んど無し、其程度極めて低く僅に感覺的のものに限らる、文明進むに及びてや、人智發達し理性に由りて感情を制馭す、此後者こそ動物的性格のものなれ、

是に由り開展の過程に於て、自然的方面と人工的方面の二者を分つを得可し、自然的とは人類を動物より優等のものたらしむる資質にして、人工的とは當初弱量なりしものをして、人工的に強度ならしむるものを謂ふ。之に由りて古來よりして今日實證哲學に由り確定せらるゝに至る迄變遷を重ねたる人性と動物性との間の争闘の科學的説明を爲すを得可し。

是れ人類進化の方針なり、次には其が氣質其他の偶然的他方的事實を離れてその進歩の度合を見るにあり、斯く特殊のものを離れて一般的のものゝみを見るに、人生進歩の度合は次の二因に歸す可し。(一)主要なる自然現象が結合して人體に及ぼすもの、(二)其周圍に及ぼすもの之れなり、是等二者が人生を通じて常に存在せるを以て、其一を止めて以て兩者重要な度を測定するに難し。

社會進歩に及ぼす第二次の影響は無聊にあり、人は他動物と同じく其有する機能を適宜に活動せしむるにあらざれば倦困を致すを免れず、夫れ此くの如きを以て社會は不斷を見る、然りと雖、此事は人間社會の最高等の機能を活動せしむるに至りて初めて然り、是等のものは即ち智的道德的等のものにして其精力極めて微

なり、其最強力のものに至りては、即ち同時に最劣等のものにして、是等は常に容易に活動せしむるを得て些少の倦怠を來す無し、彼の野蠻人を見るに此下等なる動物的活動に止まる故隨處之を遂ぐるを得、睡眠を恣にし、無聊の何者たるを知らざるなり。是に次で社會進歩を加速的ならしむるものは人類生死の關係之れなり、此點に於ては個人有機體も社會機體も同様の性質を有す、個人にして今日の壽命より數十倍のものたらしめんか、其組織に於て些少の變化を見ず沈滞に終らむ、即ち不用の舊分子は之を斥け、之に代ふるに新分子を以てせざる可からず、即ち社會にありては舊者は保守的にして新者は進歩的のものなり、然りと雖、舊者全く無用とにあらず、唯進歩的改新的とのみならば社會は常に動搖して止まらじ、之を舊者の制するありて其社會に適應のものを得るに至らしむ、故に彼の蟬蛻の一日を以て生涯とするものゝ如きは之を取らず、此くの如くむば絶えず新手段をのみ事として在來のものと比較するの含蓄に乏しければなり、今日の如く數十年間に亘るものありて初めて舊者新者の間の適合を生ずるを得可きなり。

然りと雖、吾人生活の現狀此くの如しとするも、之を以て完全のものとして爲す可き

にあらず、吾人の生命は今日より二三倍となるも些少の不可を見ざる可く、今日の實狀の方、却て不便の尠からざるものあり、實に人は教育の爲め又老耄の爲めに用立たざる幾歳を引去れば、活動する間は一生中僅かに三十年に過ぎず、然かも其中に幾多の障礙のあるを忘る可からず、此間に己が理想を案じ且つ之を實行せんとする豈に難からずや、而して己が理想とする處は他人の到底親切に實行す可くあらざればなり。彼の智的・道德的のもの、如く複雑高尚なるものありては、他人が先人のを其儘に襲踏するの事極めて難く、遂に其理想とする處の實現を見るの期無けむ。

更に第三に社會の進歩を加速せしむるものは、人口増殖にあり、此事實は人類の漸次改善的なるを示すものにして、人類全體として考察すれば疑ふ可からざるの事實なりとす、而して其結果は人口の密集を來す、其よりして生ずる處のものは、(一) 多人數となり初めて分業に便となる、(二) 各個人が益々巧慧なる手段を以て生活を保持せんとす、(三) 社會が益々其中の各個人を制御して統一を附す。以上の事之れ人口増殖との事にあらぬも、人類の或一個處に集中してよりの事なり、此集中に由

り物質的に將た又精神的に幾多の新手段は發見せらる、之れが速度如何は其中の保守・進歩の兩分子の關係如何に由りて定まる可し、此點は先に生命の長短に關し述べし處と同じ、即ち人類が生滅して代謝するも、他より群を爲して入來するも、共に新分子を致す事に於て異らざればなり。然りと雖、此人口増殖にも限りあるを忘る可からず、吾が世界の容るゝを得るに制限あればなり、併し之れ今日の事にあらず、其時には又適當の方法を案出するの人あらむ、今に於て豫め之を計る可きにあらざるなり。

以上は社會進歩を加速的たらしむる主なる要素なり、以下人間開展の諸方面が相互示す處の主なる從屬的關係を見んとす。

社會進化の諸要素は相互關聯し互に影響を及ぼせるが、其一が他のものに特に影響を及ぼさんには、他に優りて優力のものたらざる可からず、今暫らく他の劣等のものよりして別離して此優等のもの考ふるに、智的進化之れ即ち此優力のものなるを見る、是れ社會有機體の靜的研究に於て既に重要なものたり、其動的方面に至りては更に甚しきを見る。人類及び其社會が他動物に優りて其態度の整齊

し持續的行動あるを得るは、此智的作用に由り其力を統ぶるあればなり、既に社會の靜的方面に於て其が根本的學說に由り指導さるゝを見たりしが、其動的方面に於ては更に甚しく、即ち其幾多の變遷を経て動的の之れあるを見る、而して之れが根底を爲すものは人間心意の進化即ち實に哲學史之れなりとす、此變遷の跡を知るは余の主張する歴史的方面に由りて充分に之を明にするを得可く、又之れと他の諸方面との連結如何を知るには、先づ之れと物的方面との間に矛盾のある無きを見ば足る、此二者即ち萬有の兩極端を構成するもの、其間に衝突のある無くば、其中間に介在するもの、猶更らに之れある可きにあらざればなり。

人類進化の一般の方針其進歩の割合及び其が必然的順序は之を述べぬ。今は人間心意の進歩の赴くに履むなる自然理法を検せむ。是に三段あり、(一)初期なる神學的、(二)過渡的なる形而上學的、(三)最後の實證的、即ち之れ、之れ如何の學問にありても必ず經過す可き階段なりと爲す。

讀者は既に此理法の何たるは知らむ、思慮ある人は自己思想の發展を觀察實驗比較の方法に由り檢覈すれば此くの如き事は既に述べたるが如し。學問にして

既に實證的時期に至れるものは皆此三大時期を經過したるものなる事は學者の普ねく認むる處、獨り社會學に於て此くの如くならざるの觀を呈せるは、斯學は神學的時期を経て形而上學的のものに至りしにして、斯く普ねく認められ實證的論法を採るは實に余を以て嚆矢とすればなり。此理法が社會學に行はるゝは本書に於て之を示す、本書の全體に於て之を知る能はざるの士には、到底論證に由りて之を説く可きものにあらざればなり、今之れが歴史的關係は姑らく之を置き、其哲學的説明を見るに、此三時期の經過の一般の事實なる事は未だ以て之を證するに充分ならず、即ち先天的に此三大時期のあるを見たりしが、之を社會動學に試むるに當りては、近く其事實を見ざる可からず、其論理的方面は既に之を知りぬ、由りて自今道德的社會的の方面より觀察せんとす。

智的進化の必然なる所以は、人の初等の傾向が己れ自身の本性を以て、移して總ての現象を説明せんとすればなり、哲學者は「己を知る」の困難を説けども、之れ餘程進歩したる状態に於てのみ、既に人が己れを以て萬物の中心と想ふからは、又己れを以て宇宙の標型と爲し、萬事己れを以て尺度として計量するは當然の事とす、即

ち萬物を以て己れと同様と解す、故に又人は唯己れのみを知るものと謂ふも不可なからむ。人が外界の事物研究を以て遂に己に擬するに至るは、之れ餘程進歩したる後の事のみ、此二方法は互に補充的性質のものなるが、今日に至りても餘程の達眼の人にして初めて之を遂ぐ可きにて、而して初期にありては實に天然現象を以て人類意思の作用と同一視す、萬物皆生を有する己れの如しと做し、其精力の強大なる點は己れに一步を加へたるものと解す、此くの如きは之れ神學的時期と稱す可きもの、之が勢力の絶大なる今日と雖、人が之より脱する能はざるものあり、唯克く到底不可知なる本體の性質、原因等を究明するを止め、現象界の理法を檢覈するに止めば初めて免るゝを得む、若し此域を脱せんか曩日の方法を再びせざる可からざるに至る。

神學的哲學の斯く避く可からざるの性質は其根本的性格にして、又之れが久しく優勝權を占めし所以なり、是れが、吾が智的進化の初期に必要な所以は既に述べぬ、蓋し實證哲學の未だ生起せざるに際し、個々の事實を全體よりして判するを、要するに此事を外にして之れ無ければなり、個々の事實の集積の無意味にして或

理論よりして之を解するにあらざるよりは、何等の得る處なきは氣象學の研究之れが適例なり、而して此事社會の事實に於て殊に甚しきと爲す。種々異なる科學に於て此基本的教義が克く相一致するの事は、大に吾人の注意す可き現象なりとす。

神學的哲學の避く可からざる所以は、概念を得んが爲めに觀察し、又觀察せんが爲めに先づ理論を構成するの必要よりして此くの如し。此哲學は現象を擧げて人類行爲に比するを以て其結果を得たり、先づ萬物が己と同様の生命を有すとし、次では可視世界以外に許多不可視的働者ありて、其が物質に加ふる行動に由りて現象なるものを生ずと爲す。今日に在りては、此くの如き神學的説明を要せざれども、人智の未だ幼稚なる時代にありては探るを得可き唯一の方法たりしなり、斯かる時代にありて、人類は己が實力の少なるに係はらず、外界に加へんとするの統制の大なるに駭かずむばあらず、所思、天地現象は悉く超人間的意思の支配する處たり、故に人は此宇宙を變態せしむるを得可しと、其は自ら之を行ふにあらずして此絶大無限の力を有すると做せる大實在に通じてなり。若し斯かる時に當りて、

宇宙に存する恒常の理法を知り、人力の如何とも爲す可からざるを悟らむか、人は失望して當初の状態に止まり、知識に於て將た又道德に於て進歩する事無かりしならむ、今日にありては吾人は自然法を知ると雖、之れが爲めに失望するなく却て克く之を利用しあり。彼の神學的時代にありても亦其が直接に現實の世界に加ふる處多きとの信念よりして人類の行爲の上に勢力を有したりしなり。古代にありては實に神は如何のものをも爲し得可しと爲しぬ、彼の奇跡の如き、初めは日常の事として、此語の生じて以て其他の自然的のものと別ちしに至りては、既に其力の微弱となりし時のみ、故を以て希臘の神話にありては神は自在の行爲に出づ、之を示して餘りあり。今日他の學問は皆實證的時期に至りしが、獨り社會學の幼稚なる爲め、此神學的説明を試み、其中に理法を見ざるが如く人の意思に由り、自由に之を變更するを得可しと爲すが如きは、之れ曩時の夢想を再びするものにあらずして何ぞや。

神學的哲學が社會方面に關しては、將來精細に述ぶる處なるを以て、此處には唯一言にして止まむ、是れ二方面よりして觀察すべし、(一)社會を組織するの機能、(二)

向專念に思辨的事業に従事する階級の永久に存在し得る事之れなり。換言すれば、一社會は如何のものにせよ、社會なる名稱を附するに足る丈のものを構成するに當りては、其中の個人の偏辯を制するを得る丈の全體に亘り、其共通意見なるもの、體系あらざる可からず、而して斯かる勢力は、今日の如く文明の進歩して、人々責務の念に由り結合せる時にありてさへ、社會の組織の上に於て必要なるからは、況んや人類の初期に於て社會的觀念未だ發達せず、各家族が兎もすれば各個運動に傾ける時にありては、之が結合を附するには更に大なるものあり、同情の如き感情的のもの、若しくは利害の一致の如きは未だ以て社會をして久しく結合せしむるに足らず、智的のものありて其中に生ずる分裂を防止するを要す、家族的に感情の要せられし如く社會には知識を要するや切なり、其結果として政治組織成る、併し人間心意が既に斯く社會組織の基礎を構成したるからは、其將來の發達は其社會の發達に待たざる可からず、蓋し之れと人智の進歩とは相伴的のものなればなり、而して當初の共通意見なるものを組成せるは神學的哲學にして、社會は之に由り指導されしものと謂ふ可きなり、今や社會が分裂の時にあれども、曩者斯かる時



期ありしを忘る可からず。

神學的哲學が人類進歩上政治的に缺く可からざりし第二のものは、社會にありて一向專念に思辨的活動に従事するを得る特殊の階級を設くるを得しにあり、斯くして神學的哲學が社會中に最上權を占めて以て今日に及びしなり。

今日の如き時代にありても、實用にならぬ學問は兎角度外視せらるゝ傾向のあるより推して、上古の世、軍事と工業とは離れし、斯かる學究的の事に專念従事するを得る階級の特存するの難きを臆ふも、到底以て其充分を盡す能はざるなり、實に之れは神學的哲學なるもの、勢力に由り社會の自然的發達中に特に此くの如きものを設くるに至りしのみ。もとより神學的方法が智的研究に關し混亂せる處あり、又其主要なる研究の無益なるありと雖、斯く學究の階級を別ちて存するを得せしめしは斯學の功に歸せざる可からず、實に學問に従事するものは之れが研鑽に充分の餘裕あらざる可からざればなり。

以上は神學的哲學の優秀を占めし所以の智的・道德的將た又社會的の理由なりとす、其論評の比較的長く亘りしは、(一)余の所論中、人の踵を受くる多き處にして

又、(二)余が全論の根本原理とする處を包含すればなり。

社會の初期斯くの如きものありしと雖、其實證的時期にありては又之れと同じからざるものあり、實に神學的哲學は一時的のものにして、永遠に亘りて存す可きにあらず、未だ眞實の哲學なるものあらざりし時に當り、人類の理性を監督し之を進めたりしが、實證哲學と相對するに至りてや、其弊や流れて人間心意を抑壓するに至りぬ、又初めは人に慰藉を與へ、大に活動的精神を養ひしも、遂には依頼心を生ずるに至らしむ、又社會的に之を見れば、今日加特力教全盛の時に於て社會は分裂を來し統合を見ず、其之を爲すは即ち實證哲學に待つあるのみ。

社會心意は個人心意と同じく初めは想像に由り支配せられ、後に益々理性の制馭する處となる、神學的哲學の盛なりしは之に代るの他の方法無かりしが故なり、人は現象の理法の攻究と其第一原因の研究のどちらにても研究するを得し時は、必らずや後者の如き精神的のものを捨て、前者の如き實證的のものを採りぬ、即ち諸現象中最簡單なるものは常に自然法に従ふものと爲し、決して超自然的事物の放恣的意思に由るものにあらざるを云ひぬ、斯くの如くにして實證的論法は、

よしや微弱にもせよ神學的時期の初期に於て既に存し、漸次發達して今日に迄至りしなり、此概念は今日の社會學說を知る上に極重要な事、蓋し斯く在來存せざりしものを今日急如として生來せしむるを得可きにあらざればなり。斯くして舊哲學の一時的假のものたるを愈々明にし來る。

併し上述の事よりして此兩哲學が常に兩々相對せしとはあらず、初期にありて物理的研究が未だ幼稚なりし時に當りては、神學的説明に屈從せざる可からざりし、現象の觀察充分にせられ相互の關係愈々精細を知るを得るに至りて、初めて兩者對比的關係に至りしなり。實證的研究法漸く進みて以て神學と對峙せるは、即ち知識の優り來りて想像に勝ちしなり、由りて天地の理法に明かにして其變化を豫想するを得可く、彼の神の放恣的意思に由りて動作するものとし、唯祈禱に由り其變化を求めしが如き事は止まむ。

次に形而上學的時期來る、之れは前記神學的時期と、後に來る實證的時期との間の連絡を爲すものにして、其性質の固定的ならざる克く兩者の間にありて之を爲すに適せしむ、實に此二者は相對比すれば非常に極端のものにして、一に次ぐに他

のものを以てせんか、其間に何等の連結を爲す能はず、其之を爲すは形而上學にありとす、神學的説明に於て超自然的働者の數多ありしものを一に歸するまで進みしが、此形而上學出づるに及びて之を承けて之に代ふるに實體を以てしたり、此實體はもとより神學的のもの、初期の神々の如く絶大の勢力を有するものにあらず、斯くして之に次で生ずるものは、第三期の實證的のもの、現象界の理法を闡明せんとにあり。而して形而上學者の唱ふる實體たるや、益々夫々の現象に相當の抽象的事物たるに止まり、其行爲する處もとより無能になりとす。斯くして神學的哲學の有したりし勢力を有す可くもあらざるなり。然かも過渡的のものとして此必要なるは上述の如し。

上來科學の總研究に於て余は神學的、形而上學的及び實證的の三時期が異なる科學に關しては、同一人に同時に存在し得るの事を説くに勉めぬ、此事極めて重要な事、讀者の忘れざらむを希ふもの、此三大時期の大理法を非難するの聲は實に此三大時期の大理法を忘るゝに座す、即ち同一人を以てして極めて簡純にして普遍的の科學は既に實證的時代に至り、更に複雑にして特殊的のものは形而上學的に、

而して萬有の中にありて最複雑なる社會科學は神學的のものを執るは敢て恠むを須るざるなり。斯く此の理法に明になりしからは、將來の研究上に大に資するあらむ、蓋し此くの如くにして、次で來る可き現象の處理に關して執る可き態度に關しては豫め知るを得ればなり。

以上は之れ智的方面の發達の次第なるが翻て物的方面のものを見るも亦之れに相當するものあり。

正しく人類を研究するものは、古代に於ける人類の傾向は軍事的にして今日に至り、最後のものは工業的のものたるを知る、戰の度、世の進歩に伴ひ漸く減退し來る。

原人にして正規の勞作を嫌惡せる限り、其活動をして充分なるものを得せしめしものは此軍隊生活の中にのみなり、彼の食人を外にしては、生活をするの最單純なるものは唯之れのみ、斯くして其後社會の進歩して他の方法を以てして生活を支持するを得るに至りても、尙人類進歩に資するものありたり、是れ人類職業の初に執り得る唯一のものにして、宛かも科學的精神は宗教の保護を待ちて後發達せ

るに似たり、實に宗教は科學の前身たりしなり。軍隊制度ありて人類初期に於ける散亂的狀態を結合して、以て共同一致の精神を養はしめ、以て後世の社會組織に鞏固なる基礎を與へぬ。而して軍隊政治の必然的基礎を爲すものは生産に従事する奴隸の存立にあり、之に由り戰士は己が活動を充分に行ふを得せしむ、此奴隸制度ありて、初めて古の軍隊制度が充分の活動を遂ぐるを得し事、並に之れが後世人の工業的生活を奨励するに效力ありし等は後に述ぶるあらむ。

斯く軍隊政治は必要のものなりしとは云へ一時のものたるを免れず、工業制度にありては人と國との分ち無く世界を通じて進歩あらしむるを得るものなるも、軍隊制度は其中の或特種のもの丈を昂進せしめて他のものを之れが爲めに制縛せしめらるゝを免れず、遂に一時的のものたるを失はず、歐洲に於て羅馬が軍隊組織を以て當時の世界を征服し了るや、其れにて其發達は終局を告げ、更に工業的精神の漸進を防止する能はず、然かも此二者は其性質全然反するもの、由りて其間に結合を要する事、彼の神學的のものと實證的のものとの間に於けるが如し。其過渡時代にありては、(一)軍隊組織の在來攻勢的なりしものを轉じて守勢的のもの

のと爲し、(二)益々軍隊的精神を工業的のもの、次に置くに至らしむ。此くの如きもの即ち今日の状態なり。

以上は之れ社會の實際的方面の進化の三時期にして、彼の智的方面のに克く符合するあり。吾人は後に神學的精神と軍隊精神と科學的精神と工業的精神と、而して一より他に推移するに資する形而上學者と法家との間に夫々連絡のあるを見ん、斯くして吾人の論議に一貫する處あるを見む。

神學的權力と軍隊的權力との間に往々にして生ずる争闘は哲學者にすら兩者間の根本的和合の事を疑はしむるあれども、眞實の争闘は或一の政治組織の中にある異分子間に初めて之れあるを見るのみ、其目的とする處遠く間接となるに従ひ、之れが手段とするもの愈々分別を來し、是等相互の間に些少の連絡ある無ければなり。之に反して、二個の異なる政治上の權力が同等に精力を有して興亡を同じふするあれば、よしや兩者の間に折々の衝突のあるにせよ、合して同一政治組織に屬するものと稱して可ならむ、争闘なるものは二個の機關の作用ありとして、兩方の一が盛となれば他が衰へざる可からざる性質のものなる時に、初めて之れあるのみ。

るのみ。

更に進んで此二者を結合する強固なる鞆帯を見んか。凡そ軍隊組織は如何のもの、雖神學的精神の風豊を有して初めて存續するを得るもの、其初期にありて、其目的とする處の狹隘にして近邇なる人間心意をして屈從せしむるに甚しきを要せざりし時に當りて、社會鞆帯は未だ薄弱にして事を爲す可きにあらず、唯軍隊の長が興へられし宗教的主權に由りて初めて之を遂ぐるを得しのみ、又社會の漸く進み來りしに及びてや、其目的の茫漠として遠方となり、之に關與するの事も間接的行動たるを得ざりしに際しては、久しき訓練も未だ以て人民の共同的動作を充分ならしむる能はず、唯神學的辨證に由りて軍隊の長に盲目的に服從するの事に由りてのみ之れあるを得しなり、此く神學的と軍隊的精神の二者は常に同一の歩武を執り利害を共に爲しぬ。

更に又實證的精神と工業的精神との間の和合如何を見るに、曩者と同様のものあり、工業的精神の發達は科學的精神の勃興を促し、遂に又科學的精神の昂進は工業的精神を隆盛ならしむ、而して之と神學的精神との間の關係を見るに、氷炭相容

れざるものあり、文明の未だ進まざる時にありて種々の發明を爲し、天然力を利用せんとして神威を贖すものとせられしは吾人の常に耳にする處、是れ之を證す。吾人は兩極端を檢覈したり、其中間にあるものは特に説くを要せじ、過渡期にありて精神的と世俗的の兩權力の結合を爲すは之れ當然の事、形而上學者並に法家の事たり、此時に當りてや一方に哲學的優力あると同時に他に政治的優力のあるなり。此くの如くにして三大時期を通じて二元的性質を有するもの、而して其が如何に融合するかを知る。以上は之れ社會動學の梗概なり、之に由りて歴史哲學の基礎を知りぬ、歴史哲學の精神並に研究法に關しては既に説きし處、以下更に進みて之を應用して以て人類歴史の分析に進まむ。

### 第七章 歴史問題の準備——第二期神學的形態即ち

#### 拜物教——神學的並に軍隊的制度の濫觴

社會發展に關する余の原理が究に社會學を更生せしむるを證するの最善き方

法は、之れが人間社會の過去を少くとも其主要なる形態を完全に解釋するを示すにあり、此方法に由り其範圍の概念及び其が適當の應用を得たらむか、將來の哲學者は更に之を擴大して新分析に資し、以て益々人間進歩の特殊の方面を檢覈するならむ。併し今施さんとする應用は簡單ならしめむが爲めに其範圍を制限するの要あり、而して先づ此制限如何に就て述べざる可からず。

其尤なるものにして且爾餘の條件を包含するなるものは、吾人が試みむとする分析は單一の社會的連鎖に限るとの事、即ち同一文明の發達し來りし次第を尋釋す可き、幾多の異なる文明にして中絶せるが如きものは顧る可きにあらざるなり、然り而して此文明中最進歩せるものは歐洲殊に西歐のものなり、故に吾人は唯之れをのみ事とす可きなり、而して遠く古に溯るに於ては是等の民族の政治的祖先を討究す可く、其國の何處なるやは問ふ處にあらざるなり、換言すれば人類をして今日の狀態に至らしめし文明の次第を檢せんとなり。

此故に吾人は唯最善く人に知れある事件を要するのみ、是等大事件は、克く歴史發展の三大時期に相當し之を充分に説明するあり、斯くして社會生理學定められ

しからは、其細説に至りては、夫々の特殊の事件を稽查すれば皆親子關係にあるを見む、由りて各時代を通じて其連絡のある處を明にするに至らむ。

斯かる制限たるや敢て新奇の事にあらず、又此社會學に特有の事にもあらず、他のものにありても抽象科學と具體科學との別の形式を以て有す、物理學と自然歴史の差は之に相當す、此事其研究對象の愈々複雑となるに従ひ敢て異なる事無し、社會學に於て或特殊の事實を稽查し、之れが全體に通じての發達奈何を知らむとするは、之れ具體的のものに比す可く、之に反して其全體の理法を闡明せんとするは抽象的のものゝみ、而して前者は此後者の明なるに於て初めて之を明にするを得可きなり、もとより此抽象的理法は具體的事實より材料を得るなれども、今吾人の研究せんとする處のものは此抽象的方面にあり。夫れ人類の自然歴史は天然諸現象の研究事實を綜合的に並列したるもの、自然哲學に至りては是等事實を分析して、以て理法を明にせざる可からず、而して社會學は實に此事を爲すなり、故に在來の他の諸學科が成立せし後にありても社會學は尙成る能はざるものゝあるを見る、社會學は是等材料の集合より之を整頓せしめて以て其中の理法を明にする

にありて存す。

社會の抽象的理法の攻究が具體的社會學の爲す處と同じからざるは上述の如き理由なるが、今日一般の學問未だ此具體的のものにも至らず、例へば地質學の如き然り、其他氣候、人類等に關するの事、社會學的理法抽象的の明なるに及びて初めて之を知るを得可し、歐洲の人士が世界に優れたる文明を有するの理如何、其人種に就き、其地勢に關し、説かざる無しと雖、未だ以て其充分なるものを得ざるは實に之れが抽象的理法に缺如する處あればなり、今日は材料に缺くなきなり、由りて吾人は先づ此事より初め、然る後具體的に移る可きのみ。

更に尙ほ豫件の説く可きものあり、次の如し。吾人は進化の三大時期の理法には夫々社會の實際的方面に相當の形態ありたり、而して同時期に於て或範疇に屬するものは既に形而上學的時期に達せるに、之より普遍性の少くして進歩の遅れたるものは未だ神學的時期なるあり、而して又他に是等より複雑の度の尠きものは既に實證的時期となれるあり、此くの如き現象に就き疑惑を抱くものは、未だ夫々の時期の眞の哲學的性格に通せざるが爲めのみ、要は次の如し、吾人は各時期を

決するには最複雑にして最特殊のもの、即ち道德及び社會的のものを以て之を判す可きのみ、之れ當に其が最重要のものとの意を以ての故のみにあらず、又其が包有的梯階の最後の極端の位置を爲せばなり、故に之れより上に位する他の諸學科が、如何の時期に達するも、之にして未だ至らざれば、以て其れと爲すに足らざるなり。

人類の神學的時期の初は純正拜物教を以て之と爲す、斯教にありては外界を擧げて人類と類似に生命を有するものと解し、其別は唯密度の多少にあるのみと爲す説なり、是れ人の生物的理論より然る處、既に個人として斯かるからは、其集合に於ても亦然らざるは無し、學者或は社會の初を以て多神教となし、或は一神教と爲し、拜物教を以て多神教の敗壞せるものと爲すあれども、之れ誤れるものにして事實は上記の如きなり、斯く人類が初は拜物的にして又食人種なりし事も、後に至りて其品性を向上し來りて今日に至り、人類より劣等の獸類は依然として其當初の慘境に在るを想へば、亦聊か慰藉する處ある可し。又或論者は説を爲して、拜物教以前の狀態のありし事を述べ、即ち人類が全然物質的にして思辨力の些少だに無

かりし時なりと、今日南米のチエラデルフエゴ地方に住する人民の如きものなりしと。果して論者の如くむば、人類に智的欲求なるもの、絶無なりし時代あらざる可からず、然るに今日の生物學は之を認めざるなり、人類は常に或必然的要求を有し、其進歩するに従ひ之れも發達をせるもの、即ち程度の上に於て差のあるのみにして、其本質とする處は人類を通じて渝らざりしと爲す、如何の初期にありても拜物教の萌芽は之を見るを得可く、彼の星辰崇拜に至りては、其進歩して多神教に入らんとせる處のものなり。

此假説に基きて、人類は其初を下等動物のもの、如く爲したりしなる可しと云ふなり、實に下等動物にありても腦髓の發達せるものは、人類の如き拜物教の粗雑なるものには至り、或ものは多神教位にすら上るなり、唯之にありては人類の如く是等より驕脱する能はざるあるのみ。

吾人は唯今唯形而上學的神學をのみ考察するを得るなるを以て、神學の緣起の粗雑時代に就きては之れを知るに由無し、併し人は其極めて幼少の時の經驗を考ふれば、彷彿の間に之を知る事難きにあらざるなり、ボッシュエの所謂事々物々皆神、な

り、唯神自身を除くとの事は神學の極めて幼稚なる時代を示すもの、自然法を知らざる時代にありては、斯かる事敢て惟むを須むざるなり、之れ即ち拜物教の根本原理なり。

此拜物教は實に神學的哲學の基礎を爲すものにして、人類思想終極の時に至る迄之を見る、埃及の諸神崇拜の如き即ち之れにして、後種々の變遷を経て、今日獨逸の形而上學者の唱ふる萬有神教の如きも、實に之に屬するものにして、唯俗人の眼を欺かんが爲めに種々煩瑣の形容を施せるのみ。

斯かる哲學は人類初期に於けるが如く、知識の幼稚なる時代には恰適のものなりしが、又當時の如き道德的狀態にも適せり、斯かる時代の特色として、人は知識よりも感情の方、著しく多たなりしを以て、己れ以外の萬物を人格視し、己れ同様有情的のものと爲すなり、斯かる時程天地萬物の間に調和の整頓せるを見る能はず。社會の進歩せる今日と雖、情的方面の勝れる人は容易に又拜物教に陥る無きを保せざるなり。

言語の隱喻的性質は又原人的狀態の顯著なる證明なり、人類言語の主要的部分

は最古の時代より傳來したるものにして、今日に至る迄に於て他のものに比して最大に當時の體形を保存せるものと謂ふ可し、古は外界を以て人類の行爲に比して用語を爲したり、後科學漸く發達し來るに及びてや、逆に本來不活動の外界に適せる言語を以て人類行爲を説かんとす。

此初期の神學的哲學が人類進歩に加ふる影響如何を検するに、拜物教は其人に加ふる勢力の最深きもの、少くとも個人としての人に及ぼすは大なり、人類の初期にありては、極めて普通の自然現象にして、殆んど獸類と雖、然るを知るを得らるもの、みを以て自然現象と解し、他のものを舉げて無數の神々の仕業とす、己が周圍には是等際限無き神の在すあり、之が人に及ぼす影響知るに難からざるなり。斯くして萬事を此神的に解するなり。若し夫れ是れが社會的影響のある處は、個人に於けると異り極めて弱し、而して其抽象的となるに従ひ、之れが強くなるの事實は次第に述ぶるあらむ。

其拜物教が知識の方面に勢力ありしに係らず、文明發展の上に及ぼす影響の渺かりし所以は之れを知るに難からず、第一に斯くあらんが爲めには、僧侶の整然た



る組織ある事必要なり、斯くして社會的に行動するを得可し、殊に宗教の如き其範圍の曖昧なるものにおいて、此主權者の組織無くしては遂に效無し、然るに拜物教にありては、其神とする處は皆特殊の一事一物のものを表示するにして、人々は皆直接に之れと交通するを得たり、多神教に至りては之に反し其神とする處多少一般、性質を有し來り、其加ふる勢力又特殊のならず、斯くして其本體とする處も彼の拜物教の時の如く一事一物の具體的のものにあらずして、人に不可視的性質を帯び來り、此處に初めて僧侶の媒介を要するに至る、蓋し一般人は彼時に於けるが如く直接に之に近づく能はざればなり。

僧侶の濫觴は、彼の亞非利加の拜物教徒の中に存するト筈者、呪詛者の職に於て明に之を辨別するを得可し、併し其此くの如くに至りては拜物教も發達の頂點に達し、星辰崇拜の域に至りたるものなり、抑も星辰崇拜たるや實に多神教への入門にして、純粹の僧侶制の發達を德憑するものなり、星辰は天一面に亘り存在して、以て其性質の一般的なるを想はしめ、又高く天に在るが故に普通人士には到達する能はざるものとの念を懐かしめ、此くの如くにして通俗人と此者との間に媒介を

行ふ僧侶なるもの、生出の必要を感じ來る。

純乎たる哲學的の見解、即ち人類の思辨を指導する機能との事よりしては、斯かる宗教の極初期の形式は、在來人類能力が無感覺たりしものが、吾人の知識に或營養を加へて、以て之を刺激したるの效あり、併し此時に當りては想像的事實の方真實のものより優勢を占めありて、其云ふ處のものは實際に之を知るを得ざるもの比々皆然り、此人心を刺激したる點は其功績とす可きも、之れは又永く人をして眞理研究の活動を阻害したり。

是れが美術に及ぼせる影響に至りては彼が如く甚しきものあらず、全宇宙を擧げて生命ありとせる此教の如きは、大に人の想像力を富臆ならしむるに效ありしや疑を容れず、故に今日稱する美術の如き詩歌を外にしては大抵拜物教時期に既に存したり、此事は多神教の初に於て更に説く可し。

人類の工業的方面を觀察するに、其が天然の征服を初めしは、既に拜物教の時期にあり、此時に於て、人類は既に馴致せる動物を使役し、火を用ゐ、又極幼稚なる通貨制度を使用したり、其破壊的性癖は克く天然の障礙物を破り、又狩獵に由りて近隣

の種族と交通を爲すを得、固より此時に於ける諸動作は、人類が己が後には諸々の神ありて己を守護すとの念想よりしてなるも、抑も亦人類は己等が大然よりは優等との事を自認するに非ざるよりは孰んぞ此くの如きの舉に出づるを得んや、極近代に至り總てを自然法則に基きて動作するに至りし迄は、舉げて此神學的刺激に由りてなり。

其社會的影響に關しては、拜物教はよしや爾餘のもの程に至らずとも、貢獻せる處尠少にあらざるなり、今日の學者は既に消滅せる宗教の及ぼせる價值を判ずる事難く、唯實證哲學のみ之を克くす、實に人智の進歩して後制定せられし諸々の制度の如きも、神學上よりして大に其可なるを稱揚せられし爲めに、之を有效ならしむる事往々あり、況んや又當初の社會にありては、人智未だ發達せずして、先見的思想に乏しくて猛烈なる情念を制する丈の思慮に至らざる時、人をして墜落より救濟するは唯此神學的教練ありしのみ。

神學的勢力を以て優者が劣者を治むるの具と爲すの説は根本的に誤れり、治者にして眞實其然るを信するにあらざるよりは、之を人民に施す能はざるや疑を容

れず、往々にして行き過ぎたるが如き行動に出づるを見るは之を證して餘りあり、而して之に就き二の説く可きあり、(一)初期に在りては其信仰箇條の極めて茫乎として明瞭なるもの無かりし事、(二)信仰は社會其折々の事情に由りて定めらる可きの事、一に由り僧侶別を設けて之を下等のものに濫用さるゝを防ぐ事を要し、二に由り其當時の社會狀態に適切の形式を得るに至る。信仰愈々單純になり組織的となるに及び、益々一方を減じ、其代りに二の方に於て力を加へ來る、以下更に説くあらむ。

農業制度は人類に極めて必要にして、之れ無くば、人類の進歩は之を見るを得可からざるの事を知るは學者比々皆然りと雖、宗教が初期の社會をして農業的時代に變遷せしむる上に於て、如何許り關係する處あるかを知るもの無し、戦争の如きは初期の文明時代にありて、主要なる臨時的用具として用ゐられしが、之れと雖、遊牧時代たる間は、未だ以て其文明に貢獻する處あらざりし、此時代に於ける獯猛なる狩獵的生活の如きは、宛然野獸と異なる無し、斯くして人類は放浪的生活即ち其本性なるが如く、之を一處に居住せしめんは精神的訓練を要す、而して一旦共同生活

を爲すに及びてや、土地を耕耘し又家畜を飼養するの必要を感じ來り、其此くの如くに至りしものは、人類に本來潜在的に存する性質の必要に應じて顯在的となりし丈けの事のみ、無より有を生出せるとにはあらず。此時代に當りて一民族が他種族に征せられ、其郷土を去るに至り最痛苦を感じるは、其郷土に固着せる個々の神々なり、彼等は之より去らざる可からざればなり、農業時代となりし時には未だ拜物教全く滅せざりし、併し又一方には多神教に推移しつゝあり、星辰崇拜の如き既に行はる、其農業と直接に關係するは天體の行動を知る事を必要としたればなり、之に反して、遊牧時代には唯北辰をのみ知れば其移動に差支ふる處あらざりしなり。

更に又拜物教が社會進歩に貢獻する處のものは、有用の動植物を保護するにあり、即ち諸々の動植物を以て神聖視し、無益に之を害する無く、以て其發達を充分ならしむ。

吾人は更に歩武を轉じて、之れが多神教に移りたる次第を瞥見せんとす。拜物教が、中間に媒介者のある無くして直ちに多神教となりしは、何處の歴史も

明示する處、希臘諸神の如き大洋と地との二者より生出したりとの如きは、此二個の狂崇拜より轉化したりととの事に外ならず。拜物教にありては常に物々生命ありと爲せるに、多神教に至りては之を以て不活動のものと爲す、其間に一大鴻溝の存するが如き觀を呈するあるも、其推移の次第は之れを知るに難からじ。

抑も科學的精神の勃興は極近代の事實とは云へ、宗教上の形態をして疾くの古より變形させつゝ來りしとの事は疑ふ可くもあらず、拜物教の時は各個のもの皆夫々の神たりしが、後に至り其中の同一の現象を呈するものは、皆共同の一の神に屬從せるものと解するに至る、例へば解樹の如き、何れの處何れの時にも解樹として共通の性質を有するあり、即ち解して之れは一の吾人の視る可からざる神の本體あるなる可し、解の精なるものあるなる可し、而して個々の解樹は唯之れを護衛するの用を爲すに過ぎずとす、之れ多神教なり。

夫れ此くの如し、故を以て彼より之に移るに當りては、其現象とする處のもの、最一般的形式を帯びたるものならざる可からず、即ち抽象的にして又普遍的のものなる可きなり、天上の星辰之に最適す、到る處として之れあり、而して高遠なる能く

人をして身邊散在する彼此の差別性を忘れしむ、宜なる哉、多神教の初を爲すや。最後に述べ可きは、形而上學的精神が此時既に有したる事なり、是等神學的哲學が科學的精神にて變態さるゝは、實證哲學の出現する迄は、形而上學的精神が之を行はしめしのみ、彼の拜物教の如く個々物を神聖視する事を止めて、或超自然的働者の示命に従ひ行動するものと解するが如き、而して其行動の範圍たる、もとより局限する處無からざる可からざるが如き、又數多の狂崇物を合して其共同性質を抽出して一の神の屬性と爲したるが如き、皆之れ形而上學的精神の作用のみ。

## 第八章 第二期形態即ち多神教——神學的

### 並に軍隊的組織の發展

近代は一神教獨舞臺の有様なれば、多神教の如き、幾何の効果を收めしかを知られざるが如きものありと雖、之れも其時期には必要なりしにして、實に其時に在りては、今日一神教の有する勢力に増して一層重要な事を行ひしなり。

以下執る方法は、多神教の有する本質を逐次檢覈し、而して其に相當する政治組

織如何を見んとす。即ち多神教を極めて普通の義に解して之を見んとす。

人間想像に及ぼす勢力及び其社會的有效の度如何に關しては、多神教は優に他のものゝ上にあるを見る、宗教的精神は此時程其範圍の廣大にして自由なるもの無かりし、未だ以て形而上學的精神の侵入の見る可きもの尠く、實證的精神の如きに至りては個々の數現象のみ、其に由り説明せらるゝに止まりぬ、大小の事件を擧げて、超自然的實在の自由意思に従ふものとの故に、此體系は爾餘のものに比して其行動に就き一層束縛せらるゝ處無し、故に日常生活の一進一退にありても、擧げて神のみそなはず處と爲し、宗教心の盛なる通常人の解するが如くに、一神教の時ものゝ到底及ぶ可きにあらず。

以下之が研究を(一)科學的方面より、(二)詩的方面より、(三)其工業的方面より觀ん。

一、諸現象を以て一々宗教的意義を以て解釋を附する神學的哲學が科學的精神の擴大するを妨害するは明なる事、天地間の現象を自然法則に由り解かんとせしめざればなり、併し其に係らず拜物教より多神教に移りし事は、思辨的活動の第一期にして又最重要のものなり、之れの中に人類の智的生活の初を爲すなり、之に由